

環境活動40の証言



3.11あの時

東日本大震災 2011年3月11日(金)14時46分からの物語

東北地方太平洋沖地震により被災されました多くの皆様に、心からお見舞いを申し上げます。

また、この大震災により犠牲になられました皆様の、ご冥福を心よりお祈り申し上げます。

3月11日(金)14時46分。

あの時、何が起こったのか。

未曾有の大震災から目をそらさず、忘れないで欲しい。

多くの学びを活かし、環境復興を目指して欲しい。

そんな思いを込めて、

東北で環境活動に携わってきた人々の声をお届けします。



環境省 東北地方環境事務所 所長

鳥 居 敏 男

2011年3月11日14時46分。

この時を境に私たちの暮らしや人生観は大きく変容しました。

千年に一度といわれる大津波は、一瞬にして多くの人たちの命とそれまで築き上げてきたかけがえのないものを奪っていきました。改めてお亡くなりになられた方々のご冥福をお祈りするとともに、今なお不自由な生活を強いられている方々にお見舞いを申し上げたいと思います。

地球という一つの天体にしてみればごく自然な現象だったのかもしれませんが、その上で暮らす私たちにとってはあまりにも大きなインパクトであり、その後の人生に少なからぬ影響を受けた人の数は、いったいどれだけになるのか見当もつかないほどです。しかし、それだけ大きな影響であったにもかかわらず、震災直後、盛んに言われた助け合いや省エネルギー、節電といった社会の風潮も震災から1年以上が経過し、何だか少し薄まってきたように感じるのは私だけでしょうか。

東日本大震災により、私たちは何気ない普段の暮らしがいかに大切であるか、また呆気なく壊れてしまうものであることを気付かされました。犠牲となられた方々に報いるためにも、私たちは震災の記憶やあの時の思いを忘れることなく、これからの社会のあり方や人との向き合い方をもう一度考える必要があると思います。

本書には、東北環境パートナーシップオフィス(EPO東北)のスタッフが、様々な立場、所属の方々へ震災当日の状況を直接インタビューし、お答えいただいた生々しい記録や感想、今後への教訓など、示唆に富む貴重な言葉が綴られています。これらの言葉を読むことで、もう一度あの時のことを思い出しながら、私たちの今の立ち位置を見直してみることが必要ではないでしょうか。

「このままでいいのか？」を常に自問自答しながら前に進む、本書はその一助になるに違いありません。



公益財団法人みやぎ・環境とくらし・ネットワーク (MELON) 理事長

長谷川 公 一

人の数だけ、希望の物語がある

東日本大震災の死者および行方不明者の数は1万9009人。戦争をのぞくと、明治以降の日本の近代史の中で、関東大震災、明治三陸津波に次いで3番目に多い。第二次世界大戦後では最大の犠牲者数だ。1人ひとりの死には、絶望を耐え抜こうとした、あるいは力尽きた、1万9009とおりの語られざる無言のドラマがあっただろう。

生き延びた者にも、生き抜いたドラマが、物語がある。復興を歩むドラマがある。今もなお自宅に戻れない約36万人の方たち。36万とおりの別れがあり、涙があり、被災から13ヶ月の日々がある。被災後を生きる重い現実。将来の見とおせなさ。不安等々。

本書は、東北環境パートナーシップオフィス (EPO東北) が、被災約45日後の4月25日から本年3月29日まで、Web-Siteに掲載した40件の聞き書きの記録である。聞き取りは約1時間から、長い場合には、3時間に及んだという。語り手は合計44人。直接の被災者だけでなく、宮崎県や東京都からの支援者も含まれている。44とおりの物語だ。どんな小説も、どんなTVドラマや映画も及ばない、3.11後の「現実」との格闘の物語だ。今も日々生きられている、日々作られている無名の人びとの歴史だ。

大地震、津波被害、原発震災という突然の非常時に、何を感じ、何ができるのか。わが身と家族を守るだけでなく、被災地救援にすぐに駆けつけた人びと。家や事業所を流されながらも、復興に尽力する姿。それぞれの持ち場を守ることで復旧・復興を支える姿。自然を守ろうとする姿。傾聴すべき言葉の数々。44とおりの人間の素晴らしさ、44とおりの希望がここにはある。校正ゲラをあらためて読み返しなが、線を引き、何度も落涙した。

背後にあるのは悲しく重い現実だが、それでも希望に向かって、地域の明日に向かってひたむきに生き抜こうとしている人びとの雄弁な言葉の力を、何度も味読してほしい。

1. 東日本大震災 被害状況まとめ	5
2. 3.11あの時 ～東日本大震災 2011年3月11日(金) 14時46分からの物語～	7
岩手県	
Report.1 遠野市 千葉 和 (NPO法人遠野エコネット代表理事)	
多くの団体と連携して遠野被災地支援ボランティア「遠野まごころネット」設立	7
Report.2 盛岡市 石田 朋子 (Moonbow 地域資源プロデューサー)	
つながりと信頼関係と多くの善意で、不可能が可能に。	8
Report.3 盛岡市 菊地 満 (社会福祉法人 自立更生会 盛岡アビリティセンター)	
震災直後24時間フル稼働したBDF精製 必要性の認知拡大へ	10
Report.4 遠野市 松田 賢雄 (社会福祉法人 睦会 障害者支援施設遠野コロニー)	
大震災からの復旧を支えたBDF燃料	12
Report.5 陸前高田市 中村 浩行 (社会福祉法人大洋会 就労継続支援B型青松館 館長)	
想像を絶する津波。店が流され集まらない廃油。施設再開へ向けて	14
Report.6 花巻市 酒匂 徹 (自然農園ウレシバモシリ)	
エコロジカルな暮らしは災害に強い	16
Report.7 釜石市 岩崎 昭子、伊藤 聡 (宝来館)	
津波に襲われ生き残った私達の経験は、これからの日本のための経験。	17
Report.8 遠野市 岩間 敬 (GLOBUS)	
森を見て活かすことで気づく。自然と共生するため人は謙虚にならなければ。	20
Report.9 大槌町 芳賀 正彦 (NPO法人吉里吉里国)	
海と山と川があって、はじめて暮らしが成り立つ。	22
宮城県	
Report.10 名取市 大橋 信彦 (名取ハマボウフウの会代表)	
津波から逃れ、今だからこそ活動を続ける	24
Report.11 仙台市 山岡 講子 (NPO法人環境会議所東北)	
自分たちにできることを。被災地に物資を届ける	25
Report.12 仙台市 島野 智之 (宮城教育大学 環境教育実践研究センター 准教授)	
「タフなボランティア」を集めて被災地支援	27
Report.13 仙台市 佐々木 圭 (株式会社ホテル佐勘 社長室長・販売支配人)	
災害復旧支援隊を受け入れ、避難所の皆さんに無料日帰り温泉サービス	29
Report.14 仙台市 遠藤 智栄 (地域社会デザイン・ラボ 代表 (プランナー・NPOアドバイザー))	
被災者と災害ボランティアをつなげる「応援紙」を発行	31
Report.15 七ヶ宿町 海藤 節生 (NPO法人「水守の郷・七ヶ宿」理事長)	
北上町相川地区で地域の人とつながる継続的な支援を。	33
Report.16 仙台市 小幡 秀樹 (株式会社サイコー 総務部総務課主任)	
救援物資配送と津波被害の廃棄物処理。同業者の支援に支えられて。	35
Report.17 仙台市 足立 千佳子 (NPO法人まちづくり政策フォーラム理事)	
女性のための支援へ。東北人がつなげる現地と支援者	37
Report.18 栗原市 呉地 正行 (日本雁を保護する会 会長)	
生きる力のヒントはかつての日本文化の中に。自然の猛威と恵み。	39
Report.19 大崎市 大場 宏昭 (大崎市民生部環境保全課主査)	
不眠不休の対応、震災の大きな爪痕。	41
Report.20 大崎市 松本 善文 (株式会社一ノ蔵 代表取締役社長)	
酒屋が酒を造れなかった37日間。心を込めた酒造りと環境保全型農業で恩返しを。	42
Report.21 石巻市 川村 久美 (NPO法人いしのまき環境ネット 理事兼事務局)	
石巻市民の私たちにできることを考えながら。	44

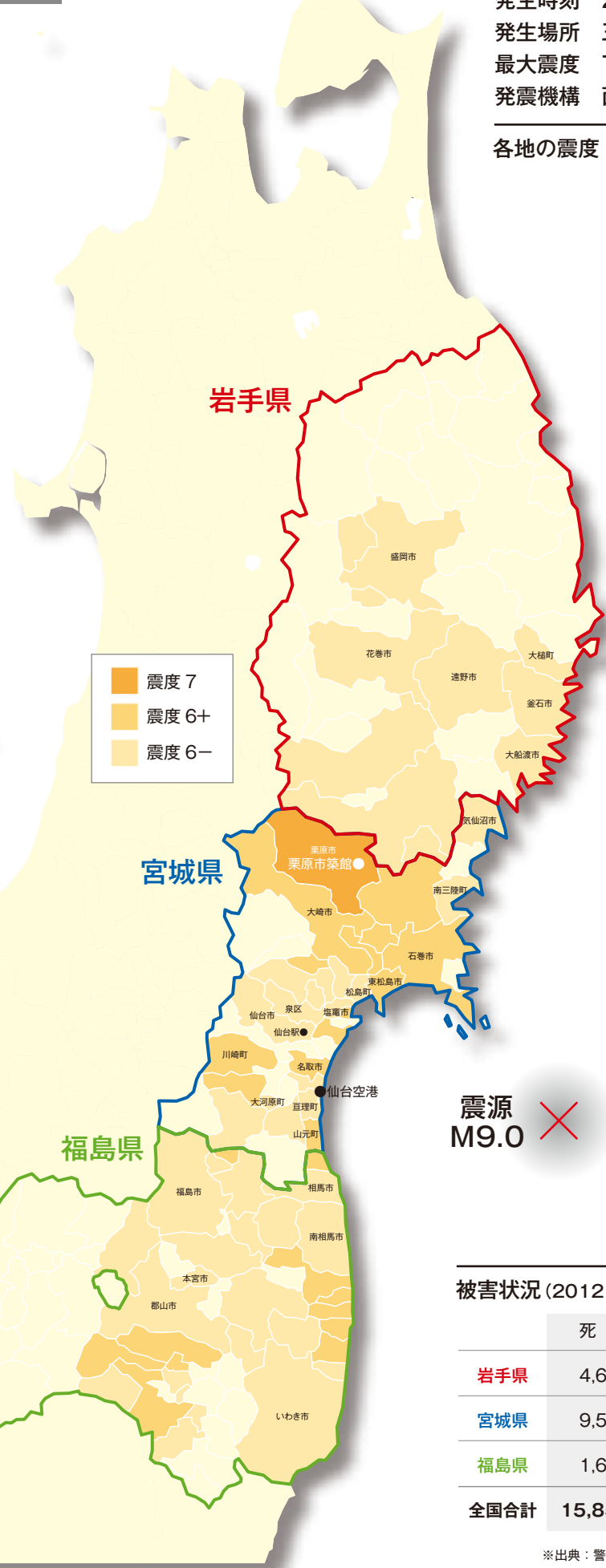


【特別編】	石巻市 川村 久美(NPO法人いしのまき環境ネット理事兼事務局)、相沢 健一、毛利 壮幸 石巻の住民による対談 「石巻から考える復興」	45
Report.22	仙台市 木下 牧子、岡 菜実(ACT53仙台 事務局メンバー) 震災で唯一良かったことは。一番大事なことがわかったこと。	48
Report.23	石巻市 鷹 有司(宮城県漁業協同組合) すべて流されても「やっぱり海しかない」。漁業復興への課題	50
Report.24	石巻市 太田 美智子(東日本大震災圏域創生NPOセンター) 水平線に見えた津波の壁…。何もなくなった町で、皆のやる気を掘り起こす。	52
Report.25	塩釜市 渡辺 信哉(塩釜団地水産加工協同組合) 手動で汲みあげたBDF燃料。給水・救援物資輸送車両への給油のために。	55
Report.26	仙台市 中田 俊彦(東北大学大学院工学研究科技術社会システム専攻 工学博士) 「新しい暮らし」を自分達で生み出し、地元「エネルギーの駅」を作ろう	56
Report.27	名取市 三浦 隆弘(なとり農と自然の学校) 「自然と共に生きる農業」のこれから	58
Report.28	仙台市 長田 賢一(武心學館 長田道場 師範) 大震災を経て学んだのは、感謝の心。たくさんの方がつながって、私たちの暮らしが成り立っている。	60
Report.29	仙台市 新妻 弘明(東北大学大学院環境研究科 教授) 1人ひとりの死が1万数千件あった災害。失われたのは普通の地域の普通の人々の営み。	62
Report.30	仙台市 板橋 恵子(ラジオパーソナリティー) 停電状態の中唯一生き残ったメディアとしての責任感。	64
福島県	Report.31 相馬市 新妻 香織(NPO法人フー太郎の森基金 理事長) 松川浦ガイドブックを持って避難所訪問、干潟に残ったかすかな生き物の気配	68
Report.32	相馬市 鈴木 修二(相馬海浜自然の家 次長) 10mの津波の被害を受けた相馬海浜自然の家	70
Report.33	福島市 佐藤 和子(NPO法人ふくしまNPOネットワークセンター 理事長) 支援の中継役としてマッチングとコーディネートを行う。	71
Report.34	郡山市 鈴木 和隆(NPO法人うつくしまNPOネットワーク 事務局長) 支援活動に注力した2カ月。複雑化を増した地域の課題。	72
Report.35	いわき市 吉田 恵美子(NPO法人ザ・ピープル 理事長) 物資支援、炊き出し、雇用創出・・・地域の外からの支援に支えられて。	74
Report.36	いわき市 大平 ひかる(オフィス・クワイ) 外で遊ぶ子どもの笑顔を見て、ママも笑顔になってほしい。	76
Report.37	いわき市 里見 喜生(いわき湯本温泉 元祿彩雅宿古滝屋) 震災後、スピーディーに動いたのは個人。日ごろからの顔の見える活動が大事。	78
その他	Report.38 宮崎県宮崎市 石田 達也(NPO法人宮崎文化本舗 代表) 宮崎から恩返し。唐桑の空家を拠点に陸前高田市、気仙沼市を支援	80
Report.39	青森県三沢市 相馬 孝(小川原湖自然楽校 代表) ボランティアを支えるためのボランティア、組み立て式風呂の支援。	81
Report.40	東京都 櫻田 彩子(フリーアナウンサー(株式会社オーケープロダクション)) 被災した故郷。被災地での取材の中で感じた「育てあい」。	83
3. 編集後記	「3.11あの時」取材を経て	86



東日本大震災 概要

発生時刻 2011年3月11日(金) 14時46分頃
発生場所 三陸沖(北緯38度06.2分 東経142度51.6分 深さ24km)
最大震度 7
発震機構 西北西-東南東方向に圧力軸を持つ逆断層型



各地の震度	震度 7	宮城県	栗原市築館
	震度 6+	宮城県	石巻市、登米市、大崎市、仙台市宮城野区、美里町、東松島市、塩釜市、涌谷町、山元町、他
		福島県	国見町、大熊町、天栄村、双葉町、浪江町、新地町、白河市、富岡町、須賀川市、鏡石町、他
	震度 6-	岩手県	一関市、矢巾町、釜石市、大船渡市、滝沢村、藤沢町、花巻市、奥州市、他
		宮城県	岩沼市、気仙沼市、角田市、松島町、仙台市青葉区、白石市、南三陸町、仙台空港、他
		福島県	郡山市、田村市、南相馬市、二本松市、いわき市、福島市、飯館村、川俣町、西郷村、桑折町、他

※出典：気象庁HP 「平成23年(2011年)東北地方太平洋沖地震」より
http://www.seisvol.kishou.go.jp/eq/2011_03_11_tohoku/index.html

津波の高さ	岩手県	大船渡	16.7m
		釜石	9.3m
	宮城県	女川	14.8m
		石巻	7.7m
		塩釜	4.3m
		仙台	7.2m
		仙台空港周辺	8m
	福島県	相馬	8.9m
		南相馬	12.2m
		双葉町	16.5m
		富岡町	21.1m
		いわき	4.8m

確認された遡上高	岩手県	大船渡	31.9m
		釜石	32.4m
	宮城県	女川	15.6m
		仙台	5.6m
		南三陸	15.9m
		気仙沼	20.6m
	福島県	相馬	21.6m

※出典：社会実情データ図録
<http://www2.ttcn.ne.jp/honkawa/index.html>

被害状況(2012年3月12日現在)

	死 者	行方不明者	家屋全壊	道路損壊	橋梁被害	堤防決壊
岩手県	4,671	1,249	20,185	30	4	-
宮城県	9,512	1,688	84,728	390	29	45
福島県	1,605	214	20,160	187	3	-
全国合計	15,854	3,155	129,225	3,918	78	45

※出典：警察庁緊急災害警部本部発表「平成23年(2011年)東北地方太平洋沖地震の被害状況と警察措置」



NPO

遠野市

多くの団体と連携して遠野被災地支援ボランティア「遠野まごころネット」設立

千葉 和 NPO 法人遠野エコネット代表理事

取材日 2011.8.4

■ NPO 法人遠野エコネット

エコツーリズムの考え方を取り入れ、行政とパートナーシップを組み合わせながら地元に密着した自然環境保全活動を行う NPO 法人。

■ 遠野市被災地支援ネットワーク『遠野まごころネット（遠野被災地支援ボランティア）』

東日本大震災で被災した岩手県沿岸部の被災者を支援しようと結成されたボランティア集団。

3月11日 14時46分

遠野市内の図書館の視聴覚ホールで、自ら代表理事を務める NPO 法人遠野エコネットのスタッフと共に映画上映会を行っていた。揺れを感じた時、スタッフの携帯電話の緊急地震速報が鳴り響いた。その時初めて携帯電話の緊急地震速報を聞いたので、最初は何の音が鳴ったのか理解することができなかった。揺れは次第に大きくなり、電気が消えた。図書館だったので、本が崩れるのを防ぐため必死に本棚を抑えていたが、本は一冊も落ちる事はなかった。女性スタッフが泣き叫んでいるのも見えたが、意外にも多くのスタッフは冷静だった。

尋常な揺れではなかったので、震源地がわからないが大きな災害だろうと直感した。津波の状況は後にラジオで知った。当日、図書館近くの川を見に行った人から「川が濁っているのを見た」と聞いた。山が崩れ、泥水が流れたせいだ。

自宅は遠野市内から車で30分程の場所にある。中学校のPTA会長をしていたため、状況を確認するべく真っ先に中学校へ向かった。その後、子どもが通う小学校へ向かい、車で一緒に自宅へ戻った。道路は信号が消え、屋根の瓦などが落ちていた。

自宅は薪ストーブを使用しており、水は湧水をひき、ガスもプロパンガスだった。電気は3日で復旧し、食料は普段から蓄えることを習慣づけていたので、それ程困る事はなかった。ラジオも常備していたので、ある程度の情報を得ることもできた。一番困ったのはガソリンだ。3月11日当日に給油する予定でいたため、所有している2台の車は共にガソリンがほとんど入っていなかった。

「遠野まごころネット」設立

遠野の風土と観光を考える連絡協議会を立ち上げたばかりだった。普段から地域づくりに関わる活動を行っていたので、このネットワークを活かし、「遠野まごころネット」（遠野被災地支援ボラ



ンティア）を設立し、災害支援活動を行っている。個々の力は弱くとも、多くの団体と連携することで機動力が増し、今回このネットワークが大きな役割を担うことができた。

車社会の弊害

車社会にのみ込まれていたことを痛感した。震災後2週間は、動きたくともガソリンがないために何もできず、フラストレーションがたまった。車がないと何も支援できないことは、今回の教訓にしなければいけないと思う。高齢者や車を運転できない子どもたちなど弱者目線に立ったコンパクトな町づくりの構築も必要と感じた。

被災地に入って感じたこと

日々感動の連続だった。支援活動を苦に思うことはまったくなかった。偶然訪れた避難所で、消息不明だった人との再会を果たしたこともあった。また、被災者には感謝してもらえた。

震災直後から4月初めにかけては、支援物資を運ぶために甚大な被害を受けた大槌町、陸前高田市へ向かった。釜石市では、川を挟んで天国と地獄の差がはっきりと見て取れる風景に変わっていた。津波がビルの3階まで到達した形跡を見ても、すべてが想

像を絶していた。

同じ避難所でも、被害が全くなかった人、電気が止まっただけの人、自宅が床上浸水した人、自宅を流された人、家族や身内を失った人、それぞれ被災者でも被害の差があり、対応の難しさも強く感じた。

今後の活動

これから寒くなり冬になるにつれて、個々の仮設住宅に入居している被災者の自殺が増える可能性がある。1人の自殺者もださないために、仮設住宅にいる被災者に対して、孤立させることのないよう交流の場を設けていきたい。行政も復興に向けてがんばっているが、個々の1人ひとりに対応していくためには、ボランティアの力が必要になってくると思う。

今後は、自然と共存した地域づくりをしていきたい。三陸から、世界のモデル地域になる1つのビジョンを作りあげていきたいとも思っている。自然エネルギーだけではなく、暮らし方を変えていかなければいけない。50年先、100年先の未来に、

子ども達にどういうものを残せるか、今回の震災を契機にきちんと向き合っていかなければ、二度とチャンスはないと思っている。

震災を振り返り

正直、振り返る状態ではない。マスコミの震災に関する報道も減ってきた。ボランティアの数も減っている。常時240~250人はいるが、夏休みに入った今でもボランティアは足りていない状況である。運営しているスタッフの人材育成も課題のひとつだ。

まごごろネットを立ち上げる時、「最低5年は活動をしていかなければならない。長期戦になる」と申し合わせた。ボランティアは減少し、被災者は孤立化する。これからが正念場を迎えると思っている。動き続けながら、失敗しながら、ベストではないかもしれないが、最良を目指して活動している。

市民レベルのネットワークづくりの重要性を今回改めて強く認識した。

個人

盛岡市

つながりと信頼関係と多くの善意で、不可能が可能に。

石田 朋子 Moonbow 地域資源プロデューサー、わわプロジェクト岩手エリア プロジェクトリーダー

取材日 2011.8.4

■ Moonbow

盛岡の地域資源の掘り起こしと魅力発信、コミュニティと人材育成に重点を置いた長期ビジョンのまちづくりに取り組む。

■ ソーシャルクリエイティブプラットフォーム わわプロジェクト

復興活動に取り組む人々と支援者を結ぶため、被災地域で活動する人との連携、活動拠点の整備、新聞・Web-Site を活用した地域情報の発信を行う。

3月11日 14時46分

盛岡の自宅で仕事をしていた。これから出かけようと思った時に、今まで体験したことのない大きな揺れを感じた。家族と近所の人々の安否確認をした後、ラジオを確認しながらすぐに車で携帯充電器、電池、ガスコンロのガス、保存食を買いに出かけた。いち早く行動したので、並ぶことなく購入することができた。

翌日は自転車に関係先の安否確認、県庁・市役所での情報収集に奔走した。盛岡市内はいつも見る住み慣れた町の光景ではなかった。車が少なく、空気が澄んでのんびりとしているようにも思えた。ライフラインは電気が2日目の夜に復

旧したので、（水道は途中半日断水したが3日目には復旧）テレビとインターネットから情報を収集、「何かをしなればならない」と翌日泊まり込みの準備をして出かけた。

「SAVE IWATE」結成

震災から2日後の3月13日、震災前からつながりのあった仲間と先輩方と一緒に東日本大震災被災地支援チーム「SAVE IWATE」を立ち上げた。中には3月12日から被災地に入り活動していた仲間もいた。

「SAVE IWATE」では1週間、ほぼ不眠不休で活動に取り組んだ。被災者名簿や現地状況をホー

ムページに掲載し、集めた情報を紙にして、物資や灯油等と共に被災地へ届けた。17日夜、現地に入っている仲間から緊急支援依頼があり、急遽仲間達とネットで支援を呼びかけた。日頃から懇意にいただいている『あさ開』さんが酒蔵を解放してくれた事もあり、翌日の昼には酒蔵いっぱい物資が集まり、2日間で5tトラック4台分の物資を被災地の人達に直接届けることができた。振り返ると、仲間達や共にまちづくり活動等してきた人達との震災前からのつながりと信頼関係、そして多くの皆さまの善意のお陰で不可能にも思えた事が可能になったのだと改めて感謝している。

被災地での活動

2週間目からは個人で被災地に入り、住環境整備や物資配給、弁護士相談の仲介、ニーズや被害状況調査等、必要に応じ臨機応変に活動した。物流はガソリンが入れば一気に回復するだろうとあまり深刻に考えなかったが、避難所の様子を目の当たりにし、被災者が落ち着いて住める場所を早く整える必要性を一番感じた。そのため、被災地に入り最初に行ったのが一般的にはあまり知られていなかった、応急仮設住宅(民間賃貸住宅の借り上げ)の推進である。民間賃貸住宅の借り上げは、県が2年間の家賃等を保証し、手続きした日から入居できるメリットのある制度だ。迅速に進むよう、役場に入って制度の説明や契約書等の作成、日本赤十字社や大手NGOが寄贈する家電製品等の手配に奔走した。

山田高校制服レスキュー

県立山田高校を訪れた際、先生から220名の生徒のうち約半数が被災し、44名の生徒が制服を失ったと伺った。そこで制服支援を行おうと盛岡の山田高校卒業生を中心に”やまだ応援隊”を結成し、制服購入募金を募った。「身体は動かないけど、皆さんの幸せを強く願っている事を伝えてください」「主婦の貯金からなので少しですが、お役に立てていただきたい」と多くの方から応援をいただき、さらに主旨に賛同した企業や国際NGOの支援もあり、制服を失った生徒全員に制服を贈ることができた。

今後の活動

現在参画している「わわプロジェクト」では、現地情報の収集と、新聞やWeb-Site等での情報発信を通した現地とのコミュニケーション、被災地域の行政や社協、市民団体等のニーズと、それ



撮影：2011.3.27 物資配布

に応えられる方々や物、制度等とのマッチングなど必要に応じた活動をしている。

「お役に立ちたいが何をやって良いかわからない」「新しいプロジェクトを立ち上げたいがどうしたらいいかわからない」といった方々の仲介、手助けを継続的にしていきたいと思っている。また、震災当初は疎かになっていたが、今後は、今まで活動してきた盛岡のまちづくりや地域振興を大事にしながら、復興支援に関わっていきたい。

震災を振り返り

失ったものがとても大きく、正直未だに受け止められずにいる。お亡くなりになった方々に恥じぬよう、犠牲を無駄にしないよう、高い志と未来に希望を持って、被災した人達と共に一歩一歩大事に築いていきたい。微力ながら自分もできるベストを尽くしたいと思っている。

また、今回の震災を通して『幸せ』『豊かさ』について考えさせられた。いつ実現するかはわからないが、原子力発電に依存するのではなく再生可能エネルギーでの持続可能な生活と、多義で豊かな社会を目指し、諦めずにアクションを起こしていきたい。



福祉施設

盛岡市

震災直後 24 時間フル稼働した BDF 精製
必要性の認知拡大へ

菊地 満 社会福祉法人 自立更生会 盛岡アビリティセンター

取材日 2011.9.12

障がい者が自立した日常生活または社会生活を営むことができるよう、事業所通所により生産活動等を通じて訓練を行い、一般就労に向けて支援を行なっている。主な事業は部品組立作業、電気製品備品検査、農事事業、そしてBDF精製作業。ものづくりの原点に立ち戻り、機能訓練にも役立つことから蜜蝋キャンドル作りにも取り組む。

3月11日 14時46分

岩手大学にいて、「東北桑ベルト」の会議中に起きた。周囲で携帯電話の緊急地震速報を伝える音が鳴り響き、研究室の女子学生の悲鳴が聞こえてきた。揺れは、大きく長く感じた。おさまった後も大きな余震が続き、これは一大事だと感じた。電気も消えた。会議は途中で終了して急いで外に逃げた。その頃は雪が降り寒かったので、車のワイパーを凍結防止の為に立てていた車が多かったが、それがすべて倒れていた。ひとまず勤務先の施設に戻った。信号機は消えていた。自宅に戻ると、妻と子どもは屋外に避難していた。家の中はサイドボードが倒れ、足の踏み場がないほどの状況だった。水とガスは止まる事はなかった。自宅には反射式のストーブもあり、普段から電池、水、カップラーメン、パックご飯等を備蓄していたので、それ程困ることはなかった。ガスが使えたので、風呂も大きな鍋で沸かして利用した。電気が回復したのは震災から3日目のお昼頃だった。テレビで流れる映像はまるで映画のワンシーンを見ているかのように感じた。

震災直後 BDF（バイオディーゼル燃料）精製施設 24 時間フル稼働

盛岡アビリティセンターでは、岩手生協からの委託でBDF精製をしている。震災直後はガソリンや軽油が不足し、支援物資を宮古、大槌の店舗に運べなくなっていたので注文が殺到した。いわて生協では燃料が入手できない緊急時に、自前で精製できることが不可欠との判断がされた。急遽いわて生協内でチームが編成され、盛岡アビリティセンターではBDF燃料の精製レクチャーのためにスタッフを派遣した。そうしてBDF燃料を精製するために、いわて生協の精製施設を24時間フル稼働させる体制を作り上げたが、実際には8時間の稼働しかなかった。結果、被災地での移動販売や炊き出しのためのトラックを走らせることができ、多くの支援者が燃



料問題で頭を悩ませる中、大きな力を発揮することができた。これだけBDF燃料が必要とされたことはなかったように思う。

震災をきっかけにBDFの
必要性の認知へ

深刻な燃料不足に陥ったことで、BDF燃料を知らなかった人達にもその必要性を認知してもらう事へつながった。これまで精製に携わってきた人間として、多くの人々に頼られたことをとても嬉しく感じている。今後、二酸化炭素（CO₂）排出削減だけでなく、ガソリンなど化石燃料不足への対応、福祉施設などへの精製委託による経済効果も期待できると思う。これからも更に多くの人達にBDF燃料を理解してもらいたい。

— ONLY ONE EARTH —
生まれてくる次世代の子どもたち
にきれいな地球を残そう

被災地の状況を受け入れることを、最初はできなかった。嘘であって欲しいと思った。バイオ燃料を作る時に必要なメタノールが足りなくなり、原料が値上がりしたことも大変だった。自分達が必要と感じてやってきた事が、本当に必

要とされ、頼ってもらえたこと、地域との触れあいの場が増えたことなど、今までBDFの精製作業に携わってきて本当によかったと思う。環境首都を目指す岩手のBDF事業の潜在能力は高いと感じている。知らない人がまだまだ多いけれども、普段から取り組んでいた事が間違いではなかったのだと今回の災害で証明されたような気がする。今まで行ってきた取り組みをもっとたくさんの方に理解してもらえるよう、今後も変わらないスタンスで取り組んでいきたい。福祉施設の利用者の方が、地球人として地域と交わり、自信と誇りをもって生き生きと成長してい

く姿にはしっかりと手応えを感じている。社会の役に立っている、貢献していると感じてくれたことも嬉しく思っている。

震災によってモノの有難さを特に感じた。食料、ガソリンなどが不足し、盛岡市内のスーパーでは商品の買占めが起きていたが、沿岸部ではみんなで協力しあいながら避難生活をしていた。地域の違いによる温度差を感じた。改めて、今まで不自由なく暮らしてきた事、今までの暮らしを見つめ直さなければいけない時期にきているのかと感じている。



盛岡アビリティセンター利用者 農作物収穫作業



菜の花一般公開にてBDF 燃料で走るエコカー展示



撮影：2011.11.24 陸前高田市消防団の車



撮影：2011.4.12 給水に並ぶ人々

福祉施設 大震災からの復旧を支えた BDF 燃料

遠野市

松田 賢雄 社会福祉法人 睦会 障害者支援施設遠野コロニー

取材日 2011.9.13

睦会では県の補助を活用してBDF精製機2台を設置し、障害者授産施設石上の園でBDF精製事業に取り組む。原料の廃食油はスーパーなどから買い取り、地元企業や個人に販売している。原料の安定的な調達や品質確保が課題で、睦会遠野コロニーでは市民が自由に廃食油を持ち込める回収所を設置。町内会や婦人会等に協力の輪が広がっている。

3月11日 14時46分

地震が起きた時は自宅にいた。いつもと違う大きな揺れを感じた。家が新築だったせいか、建物自体はほとんど被害はなかったが、自宅の向かいにある保育園は大騒ぎになっていた。すぐに職場である障害者支援施設へ向かったが、着いた時は既に職員が外に施設利用者を避難させていた。お年寄りや車椅子の方などが多くいたが、当時はとても寒く、施設に止めてあった車に避難させ、地震がおさまるのを待った。

施設の中に入ると、自分のデスク周辺は足の踏み場がない程の荒れようだった。施設の壁にはひびが入り、クリーニング用ボイラーのコンクリート製の台座が粉々に砕けていた。

停電が起きた施設では、施設利用者が恐怖に怯えながら不安な時間を過ごしていた。利用者全員に懐中電灯を配布したが、身体が不自由な方がほとんど。暗闇の中トイレに行く事も考え、外に止めてあった車のエンジンをかけてライトを付け、外から施設内を照らすことにした。寒さが身にしみる時期だったので、食堂に発電機を1台、事務所には石油ストーブを1台設置して暖をとった。普段避難訓練は施設で行っていたが備蓄はほとんどなかったので、栄養士の指示で手をかけないで済むカップラーメンやソーセージ、電池等を職員が手分けして買い回った。

夜、誰かが小さなラジオを持ってきた。ラジオから聞こえるニュースに耳を凝った。

「仙台市若林区で遺体が300体あがった」何それ、何を言ってるの、と思った。「津波があった」「多くの人々が行方不明になっている」。外では自衛隊のヘリコプターが飛び立つ音も聞こえてくる。徐々に情報が入るにつれ、常識を超える災害が起きていることが明らかになってきた。施設利用者の命を守らなくてはならないという使命感と共に、保育園で働く妻、郡山や宇都宮にいる娘とも全く連絡がとれず、時間だけが過ぎていった。



大槌町でのボランティア

震災から1週間経った頃、甚大な被害を受けた大槌町にボランティアへ行った。大槌は施設の行事やプライベートでよく訪れていたもので、災害前の町並みを知っていたが、この時、人生で初めて「言葉が出ない」という気持ちになった。

印象に残っているのは、道路がどこにあるのかわからなかったことだ。自宅を失い、家があったと思われる周辺で思い出せる物を捜していた若い夫婦と話す機会があった。「アルバムが、自宅があった場所から何百mも離れて見つかった」と聞いた。

現場には生活の生々しさがあった。茶碗や子どもの帽子、冷蔵庫、車が逆さになったり、子どものTシャツが木にかかっていた。「このTシャツを着ていた子どもはどうなっているのか」「この冷蔵庫はどこかの家で3月11日まで使われていたのに」。物から連想されてくるのは「人」だった。安全靴を履いて瓦礫の上を歩いた。トタンでできた屋根は焼けずに残っているが、その下の木は焼けているので、歩くとまるで落とし穴に落ちたように足を踏みはずした。安全靴を履いているのに、足を切ってしまった。案内してくれたおじさんの長靴はボロボロに切れていた。

ガソリン不足の中BDF 燃料が大活躍

遠野市内のガソリンスタンドは震災直後から給油のために長蛇の列ができた。同法人内の石上の園ではBDF(使い終わった天ぷら油を利用した環境に優しいバイオ燃料)精製販売を行っていたので、極度の燃料不足の折、BDF燃料を供給してほしいと多くの問い合わせがあった。

「被災地に行きたいが行けない」「発電機を使うのにBDFが欲しい」「釜石市での瓦礫撤去で重機を動かすのにBDFが欲しい」「沿岸と内陸を結ぶ支援物資を運ぶトラック等に燃料を供給して欲しい」など、噂を聞きつけた人達が石上の園に駆け付けた。

施設にも岩手県登録第一号のBDF燃料タンクローリーがあったが、被災地支援への要望を最優先に考え、BDFを供給し続けた。

BDF 燃料の今後

今後の課題は安定的な廃食油の調達と品質確保だ。企業努力と共に、この震災で人々が考えるきっかけになってくれればと思っている。市民が自由に廃食油を持ち込める回収所を設置し、町内会や婦人会などの協力の輪も広がってきた。

広く市民の協力を得るためにも、BDFがCO₂削減に貢献できる燃料であることを多くの人に理解してもらうことが大切だと期待している。作業は原料の回収・精製・販売などで、環境保全に取り組みながら障がい者の意欲向上にもつながっている。CO₂を削減することで社会貢献ができ、障がい者の工賃にもつながる有効性の高い事業である。

これから

電気、ガス、水道といったエネルギーに支えられた生活があって、日常生活のもろさを感じた。原子力発電は熱効率も良くコストも安いけれども、人間が100%コントロールできるものでなければ、このような大きな災害が起きた時にとてつもないリスクを伴うということを考えていかなければならない。エネルギーは絶対必要なものだ。必要なエネルギーを安全なもの、環境に良いもので賄っていかなければ、矛盾を伴う。誰もそれに気付かなかった。

この震災を受けて、国民誰もが真剣に考えていかなければならないと思う。この機会を逃したら同じ社会の繰り返しになるだろう。今の世の中に生

きている自分達にも責任がある。常日頃から、継続していく事が大切だ。次世代を生きる人々のためにも後世に対しても責任を感じる。これから、未来あるエネルギーをつなげていくことが大事だ。



撮影：2011.3.18 岩手県大槌町

福祉施設

陸前高田市

想像を絶する津波。 店が流され集まらない廃油。施設再開へ向けて

中村 浩行 社会福祉法人大洋会 就労継続支援 B 型青松館 館長

取材日 2011.9.13

授産活動の1つとしてBDF精製に取り組んでいたが、協力業者の被災により事業を中断。その後、椿油を精製する新規事業を立ち上げた。東北で唯一椿油の搾油を担っていた陸前高田の製油所が被災し廃業、伝統の特産品・椿油が途絶えかけた。青松館では製油所関係者の協力を得て、地域復興のシンボルとなることを目指して椿油製造に取り組む。

3月11日 14時46分

震災があった3月11日当日は、勤務中だった。動ける方は駐車場に避難し、身体が不自由で動けない方は、テーブルの下に隠れてもらった。長く大きな地震だったので、津波がくると率直に感じた。実際に大津波警報が発令され、この時すでに「これは大変な事になる」と実感があった。

ただ、職場は高台にあり避難所に指定されているため、自分達が逃げなければならないとは思わなかった。まず思ったのは、津波がおさまった時に利用者の方々をどうして自宅に帰せばいいのか、利用者の家族で海岸線に住んでいる方々の安否確認、避難所である青松館に逃げてきた方々をどのようにしてケアすればいいのかということだ。

建物の中にいるのは危険だったので、利用者をまず外に避難させた。当日は寒い日だったため、外に止めてあったマイクロバスや自家用車のエンジンをかけ、利用者や避難者を乗せて待機してもらうことにした。また、隣にあるシルバー人材センターは倒壊の恐れがあったため、外に椅子を並べて利用者に座ってもらった。自身は状況確認のために、青松館よりさらに高台にある陸前高田市内を一望できる場所へと移動した。地震から10分～15分後、その場所には多くの人達がすでに避難していた。

前々日にも大きな地震があり、津波警報が発令されて30~50cmの津波を観測したので、最初は2~3m程の津波を予想した。実際に、放送でも津波予測はその程度だった。高台に避難した人々と一緒に津波が到達するのを眺めていた。その時は、誰もが大きな津波になるとは思ひもしなかった。

想像を絶する津波

高田松原の堤防は4~5mはあったと思う。堤防の外には7万本の松の木が植えられている。堤防で砂浜の状況を見ることはできなかったが、松の木が波に押され、堤防から水が流れ落ちたのが見えた。



その後は一気に津波が平野に押し寄せた。5分も経たないうちに水かさが増し、「バリッ」「バリッ」と音をたてて住宅が流され始めた。「まずい」。直感的に思い、車に乗せていた利用者を降ろし、付近の1m程小高くなっているところに全員を避難させた。その直後に、青松館の施設内にも1mほどの津波が押し寄せた。利用者を流されないように、ひと固まりにした。

駐車場に止めていた車は全部がぶかぶか浮かんで、入口の鉄門も浮かび、マイクロバスとぶつかりあった。「これ以上きたらどうしようもない」と思っていた時、水はひいていった。おかげで何とか助かった。

津波が平野を走り始めてから利用者を高台へ逃がし、津波がくるまでの時間は全く記憶にないほどあっという間のことに感じた。とにかく「凄かった」という思いだけが残る。

今まで経験した事のない出来事だったので、スタッフ共々無我夢中で行動したが、結果的に利用者全員が無事だったことが一番嬉しいことだった。

津波がひき、高台に二次避難した時、身体が不自由なお年寄り100人以上を抱えたり、おんぶしたりで自分の身体もかなりの疲労が重なっていた。休憩しながらたき火で暖をとっていた時、200mぐらい先に人が倒れているのが見えた。若い男性だった。

声をかけると、左腕が挙がった。水を飲んで溺れ、意識がない状態だった。下半身が水につかる状況の中、職員を含め6人で男性を担ぎながら高台に戻った。その後、男性は水を吐いて意識を取り戻し、消防団の方へ引き継いだ。

津波がおさまった後

津波がおさまった後、松原苑という老人保健施設へと避難した。駐車場には1,000人近くの人々が避難していた。

しかし、建物が倒壊の恐れがあり、施設の中に入ることはできなかった。外は寒く、凍死する人が出るかもしれない状況だったので、施設内のカーテンをはずし、シーツを出した。多くの避難者に行き渡るほどの量はなく、クリーニング事業も行っている青松館に戻り、中にあったシーツをかき集めてなんとか避難者全員に配布することができた。

その後、3km程離れた場所にある「ひかみの園」という入所型の施設の体育館に、青松館の利用者をマイクロバスでピストン移送し避難させた。そこで初めておにぎり1個と飲み物を口にした。

とにかく情報が欲しかった。午前0時を過ぎた頃、対策本部はどこに設置されたのか、車を借りて陸前高田市内を捜し回った。瓦礫で通れない道が多く、山手の道を走りながら対策本部が学校給食センターに設置されているのを確認した。とにかくライフラインの状況、他に避難している人はどこにいるのかを知りたかった。しかし、対策本部は全くといっていい程、機能していなかった。対策本部でも被害状況を把握していない。結局、欲しい情報を得る事はできなかった。

青松館の分場「せせらぎ」が5kmほど山手にあった。安否確認をしたかったので車で向かったが、瓦礫で道を阻まれて行くことができなかった。ところがその夜、施設の職員が懐中電灯1つで歩いて山を越えて、施設利用者や職員の無事を知らせに来てくれた。職員と再会を喜んだ。不安な一夜を過ごし、勤務先の本部がある大船渡は被害が少なかったため、3月12日に利用者と共に移ることになった。

大船渡の本部は電気、水道は不通だったが、非常用の電源があった。避難した施設にも300人ほどの利用者がいたので、備蓄していた食料を少しずつ皆で分け合いながら、困難な状況を乗り切る事ができた。

青松館再開へ向けて

震災翌日から2週間くらいは利用者の家族の安否確認を行った。家族の自宅が津波で流された方々

もいたので、今どこにいるのか確認するのにとても時間がかかった。施設職員も自宅を流され、家族も行方不明になっている職員がいたので交替で休ませた。家族や家が無事な職員は自宅に戻らないで、利用者と共に避難生活をした。

3月20日頃からは、施設の泥かき、片づけをはじめた。水は出ない、電気もないので、多くの人手と時間を費やした。施設の備品等を外へ運び、分場「せせらぎ」近くの井戸水をくみ、タンクに2t程の水を積んでトラックで運び、泥を洗い流した。

施設で行っている授産作業は、取引先を含めて全般的に大きな被害を受けた。特にBDF精製事業は、大変厳しい状況にある。廃油を集めていたコンビニや弁当店などがすべて津波により流されてしまったからだ。大量に供給してくれた鶏肉工場は被害が甚大で工場が廃業。しかし、現在は商店が徐々に営業を開始し、廃油は集まりつつあるが、それでも最盛期の10%に落ち込んでいる。まとまって作る程に廃油が集まっていないのが現状だ。当面、精製したBDF燃料は自家消費を考えている。施設で所有しているトラックで使用していく予定だ。

電気は4月下旬、水は5月中旬に復旧し、幾多の困難を乗り越え5月16日に青松館を再開することができた。

施設では、障害をもった方々の収入を確保することを目的に多くの作業を行っているが、震災後に通常の30%まで落ち込んだ事業の生産性が、現在は90%を超える程回復した。



震災時に撮った写真を手に当時を振り返る。

NPO

エコロジカルな暮らしは災害に強い

花巻市

酒匂 徹 自然農園ウレシバモシリ

取材日 2011.9.13

ウレシバモシリとはアイヌ語で「この自然界そのもの」の意。「循環と共生に満ちた空間での自然も人も搾取しない暮らし」をモットーに、パーマカルチャー（身の回りの自然環境と調和した持続可能な人間の生活圏を創りだすためのデザイン手法）に基づいた農園づくりに取り組んできた。自然栽培と出会ってからは可能な限り不耕起栽培に取り組む。

3月11日 14時46分

震災発生30分前に、バイオディーゼルアドベンチャーの山田氏が取材に来ていた。3年前の岩手県内陸地震の時より小さかったが、揺れている時間は長かった。ガラスも落ちることはなかったが、電気は停電した。

今はソーラーを使っているが震災当時はなかったため、電気が4-5日使えなくなった。小さな井戸はあるが、電気ポンプで汲み上げているので水も使えなくなった。飲み水は防災用としてポリタンクに常備していた。井戸の止まったポンプからも多少惰性で出た。車に燃料が残っていたので、近くの湧き水を汲みに行った。暖房と給湯は薪を利用している。

食料はもちろん、問題がなかった。冷凍庫にストックもあったが、まだ寒い時期だったのでそれほど影響はなかった。

実家は北上にあるが、オール電化のため何も使えない状態になっていた。

復旧・復興への取り組みについて

震災後すぐ、味噌、米、水、衣類、防寒具を持って支援に行こうと思った。しかし、震災後1-2日は住民以外は被災地に入ることができなかった。2-3日後から被災地に入った。最初に行ったのは釜石だ。釜石は都市ガスが多いため、電気だけでなくガスも使えなくなった。パイプラインで繋がっていた今までのメリットがすべて無に帰した。避難所である大船渡市内の公民館では、震災直後だというのに住民が風呂に入ることができた。30軒ほどある集落のうちの2軒が薪ボイラーを使っていたからだ。薪は瓦礫の中から男性達が集め、1日中薪を使って交替で入浴していた。避難所を回っていて感じた事は、男性に元気がないということだ。女性は炊き出しや掃除などやることが多く、元気だった。仕事を失った男性はやることがなく、男性に仕事をつくることも必要だと感じた。

1ヶ月間は支援活動が続けていたが、4月上旬まではガソリン、軽油を手に入れることが難しかった。1週間後に宅急便が動き出してから、多い日は100ケース以上の緊急支援物資が全国から集まった。地元の有志が中心となって仕分け、ニーズに応じて被災地に配布した。ガソリン・軽油がなくても廃油で走る車が、廃油や支援物資を満載にして応援に来てくれた。バイオディーゼル燃料も送って頂いたので、ガソリンが自由に手に入るようになるまで頑張れた。

自宅では被災地へ向かうボランティアの受け入れを行い、多い時で20人程が宿泊まりした。その後も常時7-8人が宿泊した。

多くの善意が寄せられありがたい限りだったが、必要な物資がほしいと言った時にはなく、タイムラグがあった。そのためものによっては届けにくいものも出てきた。米、味噌、水など基本的な食料のニーズがあったのは自衛隊が入る前の3日くらいだけだ。カップラーメン、レトルトカレーなどの保存食も喜ばれたのは最初だけだ。必要な時に必要な方にお届けする難しさを感じた。

いざという時…

仕事が農業なので、機械もそれなりに使用している。春の農作業本番まで燃料が行き渡らなければどうしようかと考えた事もあった。この空間の中でなるべく循環し、外からくるものに頼らない農場にしたいと考えているが、現実的に車、機械も使うので、今回の災害で改めて基盤の脆弱さを感じた。もっときちんと向き合って、現実が厳しいからと後回しにしてきた事の優先順序を考えて実現に移していきたい。独立系の小さなソーラーパネルを設置したのもその一環だ。車も2タンク方式SVO(軽油と廃油で走る車)にした。今後は馬を使って耕運していきたい。

震災から半年過ぎて…

エコロジカルな暮らしは災害に強いのがメリット

だ。エネルギーも一極集中するのではなく、小規模分散させたほうが多少経済効率は劣ってもいざという時には強い。仮設もオール電化では危うい。今後の暮らしを考えるキッカケになったのではないだろうか。自転車が街に溢れ、親子でゆっくり散歩するなど、本来あるべき姿が見られ、“大事に使うこと”が本当はできることが分かったはず。“こっちの暮らしが良かったのかも”という気持ちを皆でシェアし、そういった暮らしに向かえるようになるといい。

みんなの気持ちを動かすには、“こっちの方が心地よい”と思うこと。避難所は大変だったと思うが、皆で過ごした方が楽しい部分もあったはず。皆で寄り添って暮らす良さを実感したはずだ。新しいコミュニティづくりは始まったばかり。今はまだ変わったかどうか分からないが、果てない消費に固執する暮らしから、手作りの豊かさを分か

ち合う暮らしに喜びを見出していく流れはこれからだと思っている。



企業

金石市

津波に襲われ生き残った私達の経験は、これからの日本のための経験。

岩崎 昭子、伊藤 聡 宝来館 女将、番頭（ばんがしら）

取材日 2011.10.20

震災前から「かまいしグリーン・ツーリズム」に参加、自然体験の受入れに取り組んできた。震災後は地域の財産である山と海を川でつなぎ、自然と歴史をとりあげた新しい町づくり「どんぐりウミネコ村」構想を立案。2011年10月31日より仮設店舗で食事処「松の根亭」の営業を再開、宝来館は2012年1月5日から一部営業を再開した。

3月11日 14時46分

《女将》 当日は法事、お祝いの会の予定があり宝来館でお客様の接客をしていた。2日前にあった地震とは違い、記憶にある宮城県沖地震とも違うと感じた。「三陸沖地震が近いうちに来るぞ」と言われていたこともあり、今日がその日なのだと直感した。揺れがおさまった頃に娘が荷物を取りに自宅へ行ったが、「もうこの家を見るのはこれが最後かなと思った」と言っていた。そうした直感を働かせるような、あるいは感じさせるような揺れの大きさと長さだった。

《番頭》 あの揺れで大きな津波が来ると思い、自分の車を諦めた。10年乗っていたので愛着がある車だったが、今日で終わりだなと思いながら山を登っていた。

《女将》 津波の到達は地震発生から30~40分後のこと。宝来館は避難ビルだったが、4階まで



上がるということを思いもしなかった。ビルに逃げる揺れではなく、山に逃げなければいけない天変地異が起きたのだと直感した。

一度山へ登ったが、集まってきた地域の皆さんは宝来館に留まっていたので、スタッフが迎えに行った。間にあわないから呼んでしようという思

いで体が動いた。この時の映像が放映され、テレビでは「住民を助けに行った」と美談として語られたが、本当はしてはいけない行為だ。「津波でんでんこ」と言って、津波の時は自分で自分の命を守れという言い伝えがある。人を助けたり物を取りに行く行為は皆に迷惑をかけることだから、津波においてはやってはいけない。戻った人は皆のまれてしまう。あの時は私も考えが甘く戻ってしまった。幸い助かったけれども、そうした行為をした人は皆亡くなっているかもしれない。だからあれは美談ではない。本当はしてはいけない行為だった。逃げると思ったら逃げなければいけない。それが津波だ。自分達の間にあうという予想、大丈夫だという思い、そんなレベルではないのが天変地異。人間の予想など当たらない。今日はその日だと覚悟していたが、実際はそれ以上だった。結局山へたどりつく一步手前で波にのまれたが、その瞬間は怖いとも思わなかった。あつけにとられてのまれて、気づいて苦しくて浮かび上がって助かった。ただただ生きたいという思いで必死で、恐怖感を味わう暇はなかった。怖いと思ったのは落ち着いてからだった。

《番頭》 本当に何がなんだかかわからない状況だった。怖いと思う間もなく「とにかく逃げなきゃ」とパニック状態だった。自分がケータイで撮っていたあの映像を出すつもりはなかった。ただ逃げ惑っている姿なので、こんな映像はどうということもないと思っていた。たまたま1つ下の後輩にカメラマンがいて、映像を使いたいと打診があった。自由に使っていいと返答したところ、そのまま放映されてこちらが驚いた。その後、誰かがYouTubeに載せたようだ。そこにたくさんのコメントが付き、再生回数は300万回を超えた。後からいろんな人の話を聞いて、シチュエーションも撮り始めたタイミングも奇跡だったと思う。映像の中で歩いていたのは地元の人だ。あそこが一番高く、今までに波があがってきたことはない。地元の人にはそれをわかっているから、宝来館まで行けば助かると思っていた。だから「早く逃げろ」とさんざん行っても、「しょうがない、女将が言うから行くかな」ぐらいの思いしかなかった。山へ登る道は人1人が通る幅しかないため、逃げる人で連なっていたが皆呆然と目の前の光景を見ていた。覚えているのは、女将の一番下の娘さんが「お母さん、お母さん」と叫んでいたこと。それで女将がのまれたのだとわかった。ぱっとみたら、1人しがみついている女性が見えた。隣のたばこ屋のおばちゃんだった。慌てて山を降りてひっぱりあげたが結果的に足を骨折していた。その後は一度山の上まで逃げて、火をたいて凌いでいた。

《女将》 寒くて凍えて、波にのまれた人達がこのままだと死んでしまうというくらいに衰弱していた。宝来館の4階に逃げた人が、このままだと凍え死ぬから降りておいでと呼びに来たので、山を降りることにした。

運命共同体

《女将》 1日目は宝来館にあった飲み物やお部屋のお茶菓子で凌いだ。最初は38人だったが、2日目は集落の東の沢からお墓で一晩過ごした皆さんが合流し、一番多かった時で120人程いたようだ。流れ着いた人たち、ちょっとだけ宝来館で休んでまた歩いて山越えをする人、いろんな人が2-3日の間に訪れた。

このままでは飲み物も食べ物も足りなくなると思い、高校生と短大生の子どもに管理させることにした。飲み物を紙コップに少しずつ入れ、お菓子も1枚を半分にして全員に行きわたるようにと分けている時、おばあちゃんが「たったこれだけ」と言った。ホッとしてお腹がすいたのだろう。皆前日から食べていない。そう言われるまで自分たちも食べてないことに気づかなかった。それでああ、お腹がすいているのだと思って、食糧をかき集めて炊き出しの準備を始めた。

「動ける人手伝ってくれますか」と声をかけたら、ケガをしている人もお年寄りも皆がぱっと立ち上がった。前日、お墓で一晩過ごした人達の中には凍死した人もいた。年寄りも子どもたちも皆で励ましあいながら助け合って一晩過ごした影響もあるだろう。

お父さん達は外に出て側溝からブロックをあげ、松林にトイレを掘る人、大工さんを集めて小屋を作る人、ガス屋さんはガスボンベを拾ってきたり、瓦礫の山をかき分けて沢に水を汲みに行った。お母さん達はお米を洗って1回目の炊き出しをした。私たちは部屋の冷蔵庫を全部壊して飲み物を一ヶ所に集め、それを若い子達に管理させた。一番困ったのはトイレだ。風呂場の桶にビニール袋をかぶせてお丸がわりに使い、屋上でしてもらうようにした。夜に懐中電灯で案内した時、間違っ

て海を照らしてしまう。まだ海で生きている人もいたかもしれない。真っ暗闇の中、懐中電灯の灯りを見て「助けが来た」と思うだろうなと思うと、とても辛かった。4階から見る海はただまっ黒にうねっているだけだったが、2-3日はまだ潮がひかず、普通の波の音に戻るまで1週間程かかった。今までに聞いたことのない「ざざざざ」という波の音がすごく嫌だった。

皆の分がなくなってしまうからやめて」と言われてしまった。皆で生きる共同体をしながら、家族を探さなければいけない。けもの道を5時間も6時間も歩いて山越えをして家族を探し歩いた。それも日が暮れないうちに移動しないと、真っ暗な中を命がけで帰ってこなければいけなかった。2日目の夜からは24時間火を焚きっぱなしにした。真っ暗な中を歩く人達の目印になるように。

飲まず食わずでこの山を歩き通している風の自衛隊さんも通った。どのくらい歩いているのかを聞くと、十何時間と答える。飴玉1個しかないけど差し出しても受け取ってはくれなかった。いいから飲んでって、食べてってと言っても絶対に受け取らないその姿に、涙が出た。

3日目、明日からのお米がないと言われてしまった。それで午後にお米を探しに出かけることにした。ところが市役所や避難所、どこにもお米がなかった。歩く中で行方不明の子ども達にも会い一緒に歩かせた。帰り道、消防の屯所に寄った。宝来館には100人の人が避難している。褒めてもらえるかと思ったら、屯所は暗く沈んでいた。「米はないけど水やっから」と貴重な最後の水をわけてもらうことができた。後から聞いたところ、皆家族が亡くなっていたそうだ。それでも消防団だから法被を着て皆を救助しなければいけない。逃がしたはずなのに戻ったら家族が亡くなっていたり、何日も避難所に家族が現れなかったり、当時そうした人達が消防屯所に寝泊まりをしていた。自分達がどれほど辛いと思っても、言えなかった。消防団に、自衛隊に連絡をとってケガ人や赤ちゃんを救助してもらいたいと頼み込んだことがあった。女の人達と一緒に救助してほしいと言うと、「女の人がいないと男だけじゃこの町を守れないべ」と言う。津波で集落が大きな被害を受けていても、自分たちの集落を捨てて行くことが、男の人たちにはできなかったのだ。救助してもらえないのなら皆で歩いて逃げようという気持ちがあつたけれども、4日目の朝にはやっぱりここにしようと思ひてようやく金庫をこじ開けた。それまで何もかもがどうでもよくて、目の前に打ち上げられている宝来館の金庫を開けようとも思わなかった。

集落の若い人達が残った重機で瓦礫を撤去して歩き、5日ほどで車の通る道を作った。

《番頭》 道が通れるようになり、釜石まで行けばなんとかかなるだろうと思って行ってみた。ところが釜石の町もとんでもないことになっていて、自分達の町を見た時以上に呆然とした。

《女将》 釜石の惨状を見た時に「皆こうなのか」とショックを受けた。

環境を活かした復興

外から力を貸してもらうためには、自分達がまず動きださなければいけない。自分達が明るく元気でいなくてはいけない。明るく元気でいるためのきっかけといたら、お風呂だ。釜石には温泉がない。震災後、誰もがお風呂に入って笑顔になれた。みんなが元気になるきっかけ「再興の湯」を作って、よそから来た人も笑顔になれるグリーンツーリズムに取り組みたいと思っている。

三陸地域ではグリーンツーリズムで町を復活させようという動きがある。震災直後はボランティアと地元漁師をつなぐボランティアツーリズムに取り組んでいた。その延長上で、皆さんの知恵と力を借りながら一から自分達の地域を作り上げたい。自分達に残されたものは、壊れたけれども海と山と川しかない。今こその財産を皆さんにわかってもらいながら、「復興そのものが旅」というグリーンツーリズムをしたいと考えている。

未来に向けたメッセージ

メディアの方がインタビューに来た時、「世界中のアスリートの皆さん、力を貸して下さい」と訴えた。2016年に岩手国体がある。けれどもあれは、自分を奮い立たせるために言った言葉だった。私たちの地域づくりには人が来る空間を作る目標が必要だ。人の来る漁業をしながら、人の来る観光地として、再建させたい。何回津波が来ようと私たちにはここに帰ってくるDNAがある。ここで生活する道を選ぶようにできている。

これは世界一の災害だと思っている。世界中の人が見ている中で、日本人ならではの克服と新しい住み方を作るために、多くの人の知恵を貸してほしい。災害は今後も必ずある。あることを恐怖に思うのではなく、今からいっぱい準備して、日本人らしい生き方と街づくりを5年・10年かけてすべきだと思う。ただそれは理想論で、私たちができるのは一步一步自分達ができることをすることだけだ。

天変地異はくり返し起こることだから、ただ受け流してほしくないし、忘れてほしくない。いろいろなことを考え直すきっかけにしてほしい。

振り返って

《女将》 私たちのこの経験は次の30年を担う子ども達の、次の日本のための経験だと思っている。今の大人たちが自分のライフスタイルを変えることは難しい。ただ、この経験をした子どもたちが新しい生き方をするための教育を実践していくことはできる。未来を担う子どもたちが、今回

の経験を踏まえて新しいライフスタイルを作って行くことは可能だ。

普通の仕組みの中で生きる毎日の中で、日本中が震災を忘れてしまうだろう。今回得た多くの気づきをいつも心に思っていて、子ども達を教育して、次の未来のために生き残る日本を作っていかなければいけない。

あの時、「来るよ」と言われ続けながらも30年後かもしれないと思っていたことが、今日来たのだと思った。皆さんに「今日その日が来る」ということを肝に銘じてほしい。「その時」のための準備と子ども達への教育は、今からしておける。

《番頭》これから日本を作る人達に来てみてほしい。今しかないし、これはまぎれもない事実。そこに生活があったものが津波によって崩れた事実を見て、多くの人に伝えてほしいし、いろいろな分野で活用して欲しい。もともと高齢化が進んでいた町で、さらに人が減ってしまった。だから一緒にこれからのことを考え、後押しをしてもらいたい。贅沢な願いかもしれないが、長期的に後ろから支えてほしい。

《女将》5歳の女の子が「津波より強い人は、津波より高いところに逃げる人。誰かを助けるために波にのまれた人も、強い人」と言っていた。5歳の子どものように言わせるような、悲しいことが起こらないようにしていきたい。

海は怖くないし、水も怖くない。ただ地球が動いただけの出来事。海は見えていないと異変を感じ取ることができない。津波が来るまでには短くても5分はあるのだから、5分で逃げられる場所を作り、立ち向かう勇気を持つことが必要だ。



撮影：2011.10.20 宝来館の眼前に広がる海

個人

遠野市

森を見て活かすことで気づく。 自然と共生するため人は謙虚にならなければ。

岩間 敬 GLOBUS

取材日 2012.1.24

馬と共に山に入り、伐採された木を馬による木材の運搬方法「馬搬（地駄曳き）」で運び、昔の技術そのままに炭を焼く。今では珍しい循環農法で馬の堆肥を肥料にした「馬米（うまい）」も販売。養蜂などの山仕事、人と馬が共生する営みを継承している。「GLOBUS」は自然の恵みと共に暮らす岩間さんご夫婦が提供する生産物ブランド。

3月11日 14時46分

遠野市立図書館で環境映画の上映会を行っていた時に、大きな揺れが起こった。今までの地震とは違うと直感的に思った。今まで経験した震度5や6の地震とは明らかに違う揺れであったし、図書館の前を流れる川の水が濁っていた。この時点で津波が来る、大変な事になるだろうと思った。

家族のことが心配で、自宅へ車を走らせた。市内の信号は消えていて、家路を急ぐ車で道は渋滞が起きていたが、なんとか家に着くことができた。

農家の強みで、普通の生活

電気がストップすれば、電化製品は使えなくなるのは当たり前の事である。ここで農家の強みを発揮した。水道水も少しは出ていたが山水も自家水道として地域全体で各家に引いているので、歩いて2分程の所で湧水を汲むことができた。

暖は電気を使わないだるまストーブでとった。情報が知りたかったので、発電機を使ってアナログテレビをつけた。ほとんどの人は知らないが、ブレーカーを落として発電機を直接コンセントに繋げると、自家発電機として使うことができるのだ。今回のような緊急時に使うことができたのは、父

の教えがあったおかげだ。父は大工で、今の自宅も材料、造成、基礎工事まで、父がハンドメイドで建てた家だった。そんなオールマイティーな人間だったので、今回は父の知恵がとて役立った。3月ということで冷凍食品は外でそのまま保存できたし、作りおきの食べ物や米や野菜も豊富にあったので食材にはそれほど苦労をしなかった。炭で調理できる蒸し窯で米を炊き、おにぎりにして自転車です市民センターに届けたりもした。1ヶ月くらい生活できるほどの薪のストックもあったので、薪風呂にも入ることができた。通常の暮らしより少しだけ生活水準を落とした程度で生活することができたのは、一重に農家の強みだと思う。今回の震災を機に薪ストーブを家に導入した。リビングに設置するのが一般的だが、母の進言で家全体を暖めるために家の中心部に設置した。2階まで住居全体を効率よく暖めるためだ。

木材を運んだのは…

破壊された大船渡の町を初めて見た時は、津波の力の凄さを改めて感じさせられた。

陸前高田市に知り合いがいたので、米や薪や炭を大量に寄贈することにした。当時は寒い日々が続いたので、薪や炭は被災地で暖をとるのに大いに役立ったと聞いている。

被災地は5月を過ぎる頃まで復興のための片付けに追われていて、林業で使う重機は主に瓦礫撤去に使われていた。一方で、沿岸地域の漁師小屋が津波で流されてしまい小屋の建築のために材木が必要だという。この時森から材木を運んだのが「ばんえい種」と呼ばれる馬だった。

吉里吉里林業大学校・馬搬 (馬で木材を運ぶ)

「吉里吉里林業大学校」では、馬と人による環境に優しい木材搬出技術である「馬搬」の継承と普及、宣伝を行っている。重機を使った作業は動線確保のために不要な木を伐採して山を傷めし、二酸化炭素を排出する。馬搬は燃料も使わず山を削り傷める事もない。山と海はお互いに強い関連性があり、豊かな漁場である海を守りたければ森や山のお手入れが欠かせない。森の整備をすることは、地球のお掃除をするようなもので、やがてその効果は川や海にも影響する。

大槌町で6月から始まった吉里吉里林業大学校の林業研修で、愛馬「サムライキング号」を連れて馬搬のデモンストレーションを行った。伐った木材をある程度の長さ揃えて金具に連結する。馬はチェーンでその金具を引っ張る。地理条件で運び本数は変化するが丸太サイズで1度に4-5本の



木材を引くことができる。「馬力」「馬車馬のような働き」と言うけれども、人間の力で動かそうと思えば何人もの手が必要な太くて長い木材も、馬はあっという間に引くことができる。多い時には一日40-50本の木材を搬出できる能力を持っている。丸太を楽々乗り越えて林内を進むことができ、4本の足で現場を自由自在に動くことができる。馬搬はハイテク化の進む現代においても、十分に通用するほどの作業効率性を持っている。かなりの急斜面を行き来することもできるし、人が行けそうなところならどこへでも入って行くことができる。飼い主と意思疎通ができるようにまで成長すると、手綱さえも外して声だけで指示することが可能になる。動力としてとても優秀な馬に気持ちよく働いてもらうために、人間も優秀でなければならないと思っている。

大震災を振り返って

本当の豊かさや幸せとは何かと考えた時、田舎は電気も使うが薪も使うし、山を活かして自給自足もする。しかし、都市部に入れば入る程、便利で他人まかせにしすぎている。お金を払えば蛇口から水が出るが、良い環境でなければ良い水も出ない。地球に生かされているのに、自分たちは地球に還元しているのかといえば疑問に思う。他人まかせで、本当の幸せとは何なのかを錯覚して生きてしまっている。時代にとらわれてはならない。「鳥かごの中の鳥」のように飼いならされてはならない。「人間は自然に活かされて生きている。国土の多くを森に囲まれている日本は、森を見てそれを活かすことで、人が気づくこともたくさんある。自然と共生するためには人間は謙虚にならなければ」と言う教訓を教えてくれて、「知恵を出し合って生きる」ことを教えてくれたのではないかと痛感する。

これから

「ワーキング・ホース協会」が主催しイギリスのチャールズ皇太子が名誉総裁を務める「地駄曳き競技会」に昨年出場し、優勝した。この大会は、6mの丸太を馬で引く競技で、スラロームしたり、丸太を載せる馬車に丸太を載せる正確さを競う。今年も昨年に引き続きイギリスでの大会へ出場を予定している。「地球環境を考える中で地駄曳きは絶対必要な職業」であると確信している。



馬が伐採した木材を運ぶ

NPO

海と山と川があって、はじめて暮らしが成り立つ。

大槌町

芳賀 正彦 NPO 法人吉里吉里国

取材日 2012.1.24

吉里吉里地区はこれまでも幾度となく災害が起きた地区で、先人たちは厳しい自然と折り合いをつけて生きてきた。当NPOは震災後、先人の「自然と共生する知恵」に学び、住民自らリスク管理できる街づくりを目指そうと住民有志が自ら設立した。地域の財産である海と山の恵みを最大限に活かし、新たな雇用の創出をしながら地域再生に取り組む。

3月11日 14時46分

あの日、高さ約15mの大津波に襲われた。自宅から避難する時は、ラジオと携帯電話だけを持って逃げた。逃げる途中、携帯電話のカメラでシャッターを切り続けた。でも、保存のボタンを押さなかったため、その当時の画像は1枚も残っていなかった。何も考える余裕がなかった。吉里吉里小学校に避難し、津波が来るのを見ていた。津波の第1波から最後の波まですべてを見ていた。津波が引いた後は、町がほとんど無くなっていた。ただ茫然とするだけだった。「何もかもが終わってしまった。」「個人、家族、町の人の暮らしが無くなってしまった」と。

町の人々と協力して

寒い日だったので、避難所にいた男性達が壊された家の廃材を避難所に運び、小学校の校庭で暖をとった。同時に別の男性はスコップを探して校庭に穴を掘り、男性用、女性用のトイレを作った。女性達は手分けして高台に残った家を1軒1軒回り、食料や毛布など物資を集めるのに奔走した。行政機関とも連絡はとれない。自治組織や消防



分団員などのリーダー達が約12名程集まり、自主的に災害対策本部を立ち上げ、活動を開始した。町には4台ほど重機が残っていたので、次の日から重機の所有者と協力しながら国道や町道の瓦礫を撤去した。同時に行方不明者の搜索、町の農村グラウンドの瓦礫を撤去してのヘリポートづくり、町の小さなガソリンスタンドの地上部分は津波で破壊されていたが地下タンクに残っていた石油、灯油の汲み上げ作業に追われた。災害から3、4日目にヘリポートも完成し、自衛隊が到着して緊

急支援活動と行方不明者の捜索活動が本格的に始まった。3月末までは「生き延びる為の期間」だった。4月30日、吉里吉里小学校から旧吉里吉里中学校の体育館へ避難所が移ることになった。小・中学校で入学式、小学校と中学校の合同授業を開始するためだ。大槌町で校舎が被災していなかったのは、吉里吉里小学校と吉里吉里中学校の2校だけだった。自衛隊と協力して行っていた行方不明者の捜索は、この頃まで続いていた。警察が、身元確認ができない人々の写真を持って訪れたこともあった。男性か女性かの判別もできないくらい悲惨なものだった。瓦礫撤去が本格的に始まったのもこの頃だ。避難所の最後の1人が仮設住宅に移ったのは、8月の初旬頃だった。

復活の薪プロジェクト

瓦礫の中の廃材から薪として使える材料を集め、釘抜き、薪割りをして袋詰めし、販売する「復活の薪」プロジェクトを立ち上げた。この試みはTVや新聞に取り上げられたこともあって、予想を越える反響をいただき全国から注文が集まった。このプロジェクトは、昔のような吉里吉里三陸の海を取り戻すことを目的とした、最初の活動であった。もちろん、避難所生活者の自立・生活再建、さらに瓦礫処理のための活動でもあった。注文受付は瓦礫の廃材がほぼ無くなった9月30日で終了し、現在は森林の間伐を行う「復活の森」プロジェクトの活動が始まっている。山に入り間伐や森林整理をしているが、チェーンソーを持つての労働は体力的にきつく思うことがある。けれども犠牲になった方々を思うと、不思議と足が動く。

大震災を振り返って

目に見えない力で自分が助けられた思いがする。犠牲になった方々に恥ずかしくない、笑われない



撮影：2012.3.11 3.11 祈りの灯火

ような生き方をしなければいけないと思う。

これまで、あまりにも物質的な豊かさに依存した生き方をしていた。3月～8月までの避難所生活を振り返ると、3月11日以前の暮らしは、お金や物が溢れすぎていた。まもなく大震災から1年が経ち、人々は当時の事を忘れようとしている。立派な家を建てたい、立派な洋服を着たいと元の生活に戻ろうとしている。また子どもや孫の時代で津波の被害に合うのかと思うと心配でならない。

朝はおにぎり1個、昼はアンパン1個で毎日暮らしていた。それでもあの小さな避難所でコミュニティは生まれていた。あのようなことは忘れてはいけないし大事な事だ。声をかけたこともなかったような人達が、同じ避難所で枕を並べて生活したことで、本当のコミュニティができていたような気がする。

津波は大きな災害を残したが、多くの事を教えてくれた。三陸沿岸という町は、海と川と山があって始めて暮らしが成り立つ地域だということを忘れてはいけない。だからこそ、自然の恵みを授かる術をきちんと身につけた自分を誇りに思う。自然と共に生きる知恵の中から人口流失、限界集落といった問題がクリアされていくと思っている。



撮影：2011.5.17 大槌復活の薪プロジェクト



撮影：2011.10.20 ハロウィン用大かぼちゃに刻まれた文字

NPO

津波から逃れ、今だからこそ活動が続ける

名取市

大橋 信彦 名取ハマボウフウの会代表

取材日 2011.4.28

閑上（ゆりあげ）海岸で絶滅したと思われていた海浜植物「ハマボウフウ」が市民によって発見されたのをきっかけに、美しく健康な海岸の復元を目指して平成13年に発足。地域と連携しながら保護区を設置し、保護育成に取り組んできた。大震災による大津波で閑上地区は壊滅、保護区も土砂で埋まったが、再び保護区を設置し会の活動を続けている。

3月11日（金）14時46分

海岸作業用の軽トラ「ハマトラ号」のハンドルを握り、名取市役所に向かっていった。自宅と市役所の中間地点を走行していた時、激しい揺れに襲われた。前方を走っていた車が道路脇に停車したので、これに倣い車を止めた。長く激しい揺れに、今まで経験した事のない恐怖を覚えた。

この尋常ではない状況に、市役所へ行くのを取りやめ閑上にある自宅へ引き返すことにした。電柱は斜めになり、電線が切れ道路に垂れさがっていた。閑上から市街地に向かう車、閑上に向かう車で道路は混雑した。

やっとの思いで自宅に戻り、散らかった部屋の中で妻の無事を確認した。次いで、海辺に住む知り合いの老夫婦の家へと車を走らせた。老夫婦はこの時点では無事で、一声かけてまた自宅へ戻った。ハマトラ号は置き、もう1台の軽自動車で安全な場所へと車を走らせた。時刻は3時半を回っていた。生まれも育ちも閑上で、地元の地理を熟知している。どの道が混んでいるか、すいてるかは理解していた。電線が垂れ下がった県道を通って逃げ遅れてしまう。名取川の土手沿いの道を通って仙台へ向かった。幸いにもそれほどの混雑もなく脱出することができた。

この10分後には津波の第1波が閑上に到達していた。仙台には姉が住んでいる。姉の無事を確認した後、再び妻と閑上に戻る事にした。ところが戻ってみると、風景が一変していた。家が流され、瓦礫の山が広がり、田んぼにはプレジャーボートが打ち上げられていた。当然自宅には戻る事はできず、その夜は名取市役所隣りにある市の体育館へ避難し、軽自動車で一夜を明かした。

震災翌日から

次の日、別の避難所へ移動して一夜を明かした。3日目から3月末まで、仙台の姉のもとに身を寄せた。姉の住んでいる高齢者向けの県営アパートは、行政の配慮か電気や水の復旧が3日程で回復



した。だが、移動するためには車のガソリンが必要になる。4時間並んで、5人前で販売が終了になったこともあった。けれども他にはもっと困難を抱えている人がいる、こんな苦労は苦労ではないと自分に言い聞かせた。仙台と名取の往復用に自転車を1台購入し、情報収集に努めた。

後に、無事を確認した老夫婦の婦人が津波被害にあったことを知った。

今回の震災でハマボウフウの会の会員の方が6名犠牲になり、1名が行方不明になっている。犠牲になった方の中には、市議会議員、町内会会長なども含まれていた。責任感の強い人々が、自分が逃げるのを遅らせてまでも多くの人々の命を救ったのだ。

海岸のお花畑復活を目指して

自宅を流され、今は仮設住宅で暮らしている。大津波により浜辺は大きな被害を受けたが、名取ハマボウフウの会では6月に海辺で活動する10団体と連携して「第2回ふるさと海辺フォーラム」の開催を予定している。周囲からは反対意見もあった。だが悩んだ末に、この時期にやることに意味があると開催を決めた。多くの人が苦しみ、悲しみの中にいる。けれどもずっと沈んでばかりはいられない。

春の日差しが心地良いこの季節、全滅したと思っていたハマボウフウの芽が数箇所を確認された。あの大津波に負けず、力強く芽吹いたハマボウフウに希望をもらった思いだ。会では今後、ハマボウフウ保護区の看板を新設し、何年かかるかはわからないが、子どもや大人が集う海岸のお花畑を復活させたいと考えている。



震災後、力強く咲いたハマボウフウの花

NPO

自分たちにできることを。被災地に物資を届ける

仙台市

山岡 講子 NPO 法人環境会議所東北

取材日

2011.5.9

地域を中心とした環境と経済の独立に向け環境ビジネスの促進を目的に活動に取り組む。毎年「エコプロダクツ東北」を開催してきたが、多くの企業が被災、会場の夢メッセみやぎも津波被害を受け閉鎖、2011年度の開催は中止に。被災した今だからこそ復興と再生には環境に配慮した環境経営の推進が必要と考え、活動に取り組んでいる。

3月11日 14時46分

山形県米沢で中小企業・大学関係者を対象とした、低炭素社会構築をテーマとするシンポジウムを開催していた。地震が起きたのは休憩中。鳥たちが一斉に飛び立ち変だと思った直後、何かにつかまっていなくて倒れそうなほどの揺れが長く続いた。米沢は内陸部にあり地震が少なく、こんなに大きな揺れは珍しいと聞いた。館内放送とテレビでの報道で震源は宮城県沖、津波の予測は10mだった。

セミナーは中止とし、駅に向かったがすでに新幹線は不通、復旧の見込みもなくレンタカーで仙台へ帰ることにした。高速は通れないので飯坂経由で帰ることにした。両側のすべてが停電。真っ暗な道をラジオからのニュースを聞きながら走行した。道は陥没したところもある。時折の余震は走行中でもわかり、不安の中「多賀城に500人取り残されています、〇〇地区に200人取り残されています」と放送が聞こえてきた。アナウンサーの説明に『津波』という表現があまりなく、益々不安は募った。まさか内陸にまで津波が到達しているとは予想もしない。「取り残される」というのは一体どういうことなんだと見えない不安の中、



一路仙台に向かった。講師をお願いしていた吉岡先生と職員の高田と山岡、そして仙台から参加していた江成先生の4名の運命共同体だ。これが1人だったら帰ることが出来たのだろうかと思ってしまう。

16時に現地を出て、仙台に着いたのは夜23時だった。仙台到着後、緑ヶ丘の江成先生が降り、向山では吉岡先生が降りることになり向山に向かった。周囲は停電で真っ暗、仙台港の火災の炎が赤々と見え、大変な事態であることを実感した。

帰宅した自宅マンションは停電で6階まで階段で昇った。懐中電灯で照らしあたりを見回すと、居間の60cmの水槽が壊れ水浸し、台所は冷蔵庫、食器棚が倒れ足の踏み場も無いすさまじい状況だった。

ライフラインの復旧まで

電気・水・ガスが止まり、12日の朝に余震を心配した息子が迎えに来た。息子のマンションは免震構造なので特に被害はなく、耐震と免震構造の違いに驚きながら避難した。

13日は自宅に戻り、息子の手を借りて冷蔵庫や食器棚を直した。ほとんどの食器は壊れ、冷蔵庫の食料は床に飛び散り、保存食やらっきょうの瓶が割れ強烈なおいが部屋中立ち込める中で片付けをした。水が出ないため拭き掃除ができない。箒とちりとりで壊れた食器を片付けた。

夕方、知人がおにぎりや惣菜、果物、水などを持ってきてくれた。反射式ストーブを使用していたので電気が無くても暖がとれ、お湯をわかし、更に料理もできた。水の消費量が多いトイレはタンクにペットボトルを入れてかさ上げした。2時間並んでも2ℓの水しか手に入らない状況の中、友人が4ℓのペットボトルを5本持ってきてくれた。飲み水は1日2ℓで足りるが生活用水は足りない。トイレの水と洗い物に苦慮した。何とか工夫をしなければと洗米後の水はバケツにため、使った食器は紙で拭き、溜まったとぎ汁で洗い、最後はトイレのタンクに入れる。トイレの紙は別に流す時は「小」だけを使い3回に1回流す。お風呂に入れない期間はお湯をわかして体を拭き足湯にし、足湯に使った水はトイレに流す。とにかく水は無駄になかった。毎日していた洗髪ができない、臭いが気になりイライラする。そこで思いついたのが美顔器の蒸気。ブラシにガーゼをつけ髪に蒸気をあてながらブラッシングをする。ガーゼには汚れが付着するので取り替えてはブラッシングを繰り返す。髪はサラサラなのが気持ちが良い。4月1日にガスが通るまで繰り返した。

被災地に入って

電気が通り、テレビを見た。津波のすさまじい光景と避難所で生活している方々のニュースを見るにつけ、自分は毎日布団で寝られるだけでも幸せなのだなと思った。そして何かしなくてはと考えた。じっとしてられない。いろいろなものを届けてあげたいが食糧も物もガソリンもない。震災直後はないものづくしだった。そんな中、通っている仙台福音自由教会に全国からの支援物資が届き、土曜日曜は仕分け作業を手伝った。教会では

必要としているところに届けてくださいと言われていたので、4時間並んでガソリンを満タンにし、石巻、多賀城、名取、七ヶ浜に物資を届けてまわった。被災地を実際に目の当たりにした時は、言葉は出なかった。とても表現できない。

今までそこには生命があって、営みがあった。それが一瞬で無くなってしまった。自然の猛威の前に無力な人間であることを思い知らされる。

人間はすべて「おかげさま」で生きているにも関わらず、そこを忘れている。無理な開発を繰り返し、自然に逆らって生きてきた。エネルギー問題も声高に叫ばれて久しいが、代替のエネルギーでまかなえる生活をする事ができるのか自問自答し、我慢はいやだという身勝手さに恥じ、情けなさや無力さを感じた。やる気も消失しかけた。しかし時間が経つにつれ、多くの犠牲者の方々のためにも、生きている人間がこの大震災を忘れず、根本的にエネルギーやライフスタイルの在り方を考え直し、持続可能な社会にしなければ考えるようになった。

避難所を訪問すると、人間の持っている内面が2通りに分かれていく寂しさを感じる。リーダーがいて1つの大家族として運営しているところは、他人同士の寄り合いなのに助け合い、役割分担し、食事まかないも自分達の手で行っている。大きい避難所は土足であり衛生面も悪く、誰かがやってくれるだろうと無責任になってしまうという一面を見る。

自分たちにできることを

4月12日、支援物資を積んで南三陸へ向かった。訪問した会社は、工場も事務所も海の近くにありすべて流されていた。家族は避難所には入らず、高台にある冷蔵施設の作業場で生活している。電気も水も何もない。それでも商品は自家発電で冷やしていた。「水がくれば商品化し、宅配が復旧



撮影：2011.4.7 南三陸町

すればネット販売ができる、1日も早く再開したい。」家も工場もないが、希望を捨てていなかった。あきらめずに希望を持ち、前に進もうとしている。逆に勇気付けられる。これから先このような企業のために自分達ができることは現場や現地での生の情報収集をし、経済を循環させるためにも全国に発信し紹介することで購入へつなげることにあると考えた。

「みちのくEMS」は今まで無理や無駄やムラがあったことを、マネジメントシステムの構築により見直すものだ。普及することが企業への啓発にもつ

ながる。また、予期せぬ天災ではない、命や安全を確保するにはどうするかを皆で研究しながら規格化・マニュアル化していくことも必要と考える。現存するすべての人々が初めての経験ではあるが、「今後も必ず起きる震災」ということを忘れてはいけない。どのような状況におかれても人間1人では生きられない。

昔はあった「講」という組織の復活が、今回の大地震により見直されたことであり、お互いに助け合う心を忘れずに相互扶助の関係を根本におき、仕組み作りをすることが大切であると痛感する。

大学

「タフなボランティア」を集めて被災地支援

仙台市

島野 智之 宮城教育大学 環境教育実践研究センター 准教授

取材日 2011.5.12

大学生のうちに自然に親しんでもらおうと野外教育・自然教育を行っている。また、世界中の研究者と連携をとりながら持続可能な開発のための教育（ESD）や環境教育の推進に取り組む。震災後は被災者支援のボランティアに加わり、気仙沼市、南三陸町などの被災地を巡り、救援物資の配給や炊き出し、風呂沸かしの作業を支えた。

3月11日 14時46分

大学の研究室で原稿を書いていた。もうそろそろおさまらだろーと思っていたら、まだまだ揺れ、普通の地震よりもとても長い気がした。外を見たら、大学の噴水がゆすったバケツのように揺れていた。研究室はとにかく本や紙のものがたくさんあるので、腰くらいまで本に埋まった。

直後は携帯もつながりそれほどでもなかったが、停電のため信号も消え、夕方になるにつれ道路は大渋滞になっていった。大学には学生50人以上が帰れず、そのまま避難していて、その夜はケアをした。

自宅では震災対策をしていたが食器類の8割が割れ、本棚はトントン相撲のように前にせり出していた。池の水を汲んできて沸かそうかと思ったくらい水は欠乏した。幸い家にあった水でまかなうことができたけれども。野菜を洗って、お皿を洗って、それをトイレに流す。そうして3回使った。たぶん沢の水を汲みに行くのが正解だったなと、今から振り返れば思う。

「タフなボランティア」を募集し被災地へ

震災3日後に、郡山の義理の兄弟を実家の富山に



疎開させた。富山ではネットが問題なく使えるので情報を集め、どこに入るかを決め、仲間呼びかけ、現場に直行した。震災から1週間程度後のことだった。

富山から直接自宅に寄り、そのまま、登米のRQ市民災害救援センター事務局に入った。RQは自分たちがやりたいことを自分たちで見つけるというボランティアセンターだ。入ってまずしたことは、このボランティアセンターで何が行われているか把握することだった。次に、自分が何に貢献できるかを周りの人たちとディスカッションしながら考え、次の日のスケジュールを決めた。

現地に入ってすぐに雪が降った。車は朝、霜が降りて凍る状態だった。暖房も何もない体育館に寝袋で寝る生活だったため、耐寒用のシェラフを持ちこんだが1日目は寒くて眠れなかった。夜の寒さが一番厳しかった。

そもそも、ぼつんと田んぼの中にある廃校にボランティアセンターが設置されていた。必然的にそこまで自力で来てここを拠点に自分の車で被災地に出かけて行き、ここに戻って自力で眠れるような「タフなボランティア」が条件となり、かなりの人がふるいにかけられた。結果として、こういう寒さでも動ける、自分で考えて自分で動ける、そうしたアウトドアに慣れた人たちが周りに集まった。

ガソリンスタンドの人たちが助けてくれた

とにかくガソリンがなかったため、車の問題も大きいのしかかった。傍のガソリンスタンドの方が融通してくれ、限定的な量を供給してくれた。南三陸では津波によって破壊され、鉄筋の枠しか残っていないようなガソリンスタンドがあった。そこで、汚れた作業着を着たスタンドの方が、並ぶ災害復興の車に手回しのポンプでガソリンを入れていた。自分たちのガソリンスタンドがそこまでの影響を受けているのに、そこにガソリン缶を運んで、「なんとかがんばってください」と言って皆さんを助けていらっしゃる姿は本当に涙が出た。

1カ月経った時も、本当に何もない、屋根ぐらいしかないところで「パンク修理します」という看板を出したガソリンスタンドもあった。「自分たちが助けないとこの人達が何も活動できない」と、ガソリンスタンドの人たちは身をていしてがんばってください。津波被災エリアには彼らががんばらなければ本当にガソリンがなかった。話を聞くと自衛隊も喉から手が出るほどガソリンが欲しい時期だったという。

被災地で

RQの方針として、1カ月は物資支援、3カ月までは立ちあがりの支援と考えていた。確かにその通りで、2週間が過ぎると普通のNPOが現地支援に入り、物資の支援が急速に増えた。1週間から10日くらいまではガソリンもなく、その人たちが入れられるような環境ではなかった。

震災後10日くらいで自衛隊が入ったが、それでもリアス式の起伏の裏側にあるような集落（居住区）には支援物資が届かなかった。どうすることもできず、昼間から焼酎を飲むお父さん達もいた。お母さん達は辛かったろう。昨日で震災後2

カ月になるが、現地はまさに復興が始まった状態だ。1か月後ではまだ避難所に衝突しなかった。ただ、向こうは地域まるごと避難所に入ることとなり、それは良かったと思う。コミュニティがそのまま引越してきたため避難所の運営もうまくいっていた。津波で大きな被害があり区が混在しているところでは、避難所の運営が難しかったようだ。最初のうちは家が残った人たちが、家を失った人たちを助けていた。そのうちに避難所の物資が潤沢になっていくと、逆に家に残った人たちが物資を手に入れることができず、対立も起こるようになった。

市町村にはなかなか対応できない。とくに、5分の1の職員を失った南三陸町役場などは大変である。ボランティアはその間を埋める役割だと思っている。

この2カ月を振り返って

今回は本当にいろんなことに涙が出た。5日目くらいに高速道路で仙台方面に向かってタンクローリーが走ってくるのを見た時、これが救いの手だと思って涙が出た。大阪や神戸、京都ナンバーのガス局や水道局、重機を積んだ車が50台くらい団体で来たのを目撃した時もだ。たまたま止まったサービスエリアでタンクローリーの運転手さんに話を聞いた。実は運転手さんも被災をしていた。海沿いで、ご家族の方が行方不明だという。それなのに、タンクローリーを動かさなくてはならないと言って運んでらっしゃると聞いた。涙がにじんだ。

ボランティアに入っている人達は未だに、若い人達なのに「今日はどんないいことがありましたか」と皆で話し共有して、ちょっと涙ぐんで、それを明日へのエネルギーにしている。人間はそういう生き物なのかなと思う。

私たちは、野外生物学者としてこれまで過酷な自然の中に身をおき、鍛えられてきた。そして、人



撮影：2011.5.28 瓦礫撤去をするボランティア

間の損得とはかけ離れた自然の喜びを伝えるという極めて人にうらやましがられる生活も続けてきた。地震被災地のこの現状をみて、過酷な自然にも耐えられる力を持っている野外生物学者が立ち上がるべきだと思った。自然の中で生きる術を知っている我々が行動をすべきだと思ったのである。

=用語解説=

■RQ市民災害救援センター

RQ市民災害救援センターは東日本大震災の被災者救援のために、3月13日に発足した任意団体(RQはレスキューの略)。「NPO 法人日本エコツアーリズムセンター」が中心となり、団体の活動に賛同した市民有志で結成された。

企業

仙台市

災害復旧支援隊を受け入れ、避難所の皆さんに無料日帰り温泉サービス

佐々木 圭 株式会社ホテル佐助 社長室長・販売支配人

取材日 2011.5.13

ホテル佐助では環境配慮企業を目指し、全社員が一丸となって電気・ガス等のエネルギーの高効率化や使用量削減、周辺地域の清掃活動に取り組んでいる。また、お客様に提供する食事には旬の食材を選び、朝食に環境保全米「秋保米」を使う他、調理残さや食べ残しなどの食品廃棄物排出量の削減にも取り組んでいる。

3月11日 14時46分

地震の時刻はちょうど会議のお客様がいて、一般のお客様はチェックイン前という時間帯だった。お客様、そして従業員を外に避難させたが、余震もあり周りの状況がまったく見えていなかった。私共が一番被害が大きいのか、はたまた周りで大きな被害が起こっているのか、情報がまったくとれない状況が続いていた。ただ、これはただ事ではないということだけはわかった。その後に徐々に情報が入ってきた。津波の情報、ライフラインがすべてダメになっていること、交通機関の不通。お車で来ていた方の中にはその日のうちにお帰りになった方もいた。ほとんどの方は3日から4日程、長い方で5日滞在された。ロビーのガラスが割れ寒い状況ではあったが、余震が続く上階の客室へ入るのは怖いということで、震災初日はロビーで100人以上のお客様がお休みになった。食事は旅館料理のため、お鍋などは固形燃料で炊けるようになっている。固形燃料の在庫がある限り鍋でうどんを作ったり、お米を炊いた。カップラーメン等の備蓄もあったので、なんとか3食お食事をご用意することができた。

電気は26日くらいまで不通だった。自家発電が動いたので最小限の非常灯が点灯し、真っ暗にはならなかった。お客様がお帰りになった5日目には自家発電を止め、休館状態に入った。電気とガスが復旧すればいつでも営業再開できるよ



うにしようと皆で声をかけ、崩れたものを取り除き、後片付けをし、毎日掃除をした。ベニヤ板を貼っていたロビーには、昨日ようやくガラスが入った。

災害復旧支援隊の受け入れ

3月25日から仙台市ガス局の復旧隊を中心に災害復旧支援の方の受け入れをスタートした。まだまだ電気・ガス・水道がきていない、油の供給もない不完全な状態だったが、給水車で秋保に水を入れてくれる約束ができたことで受け入れを決めた。

支援隊のピークは4月の前半頃で、多い日で1日に800名程の方が宿泊した。皆さんは朝6時に出

かけて行き、夜の11時・12時まで帰ってこないような状況だった。仙台のため、宮城のために一生懸命がんばってください、本当に頭の下がる思いだった。今も工事関係者の方や、警察官の方々にご宿泊いただいている。

先日、石巻の復旧に入った隊長さんとお話しをする機会があった。自分たちがマイナスからゼロまで復旧する仕事をした、僕らは帰るけれども必ず石巻は復興していくので、3年・5年後に見にきたい、また来ますよと言って帰っていった。僕らもそれまでがんばらなければいけないし、また来ていただけると言っていただけのことの嬉しさは、本当に涙が出るほどだった。

市民に日帰り温泉を

3月末、水が来てから日帰り温泉を始めた。重油がないため館内のお湯や暖房を利用することはできず、水は出るけれどもお湯が出ない状態からのスタートだった。温泉浴槽が2つあるので、1つの浴槽の温泉を使ってかけ湯をし、体を洗ってからもう1つの浴槽に入ってもらおう形をとった。多い日には千名近くのお客様にお越しいただいた。

その他に、仙台市と秋保温泉のタイアップで、4月の頭から避難所の方々を無料でご招待した。観光バス「るーぶる仙台」のバスがまるきり余っていたため、避難所と秋保温泉の間にるーぶるを走らせてもらった。1軒あたり30人ずつを受け入れ、3-4軒が協力したので1日に100人程の方にお風呂を利用していただけたと思う。

災害対策

何かが起きた時、何百名というお客様を抱えた状態で被災する状況が想定できる。マニュアルを作り、18ℓタンクでの水のストック、カップラーメン等ある程度の食糧の備蓄をしていた。実際、まさか使うことになるとは思っていなかった。ビルの構造上、水を上に汲み上げてトイレに流しているため電気がこないと水があがらない。そのため、ご宿泊になるお客様のためにタンクの水をトイレ用に1部屋ずつ配った。大浴場の温泉の水をタンクに詰め替えて、トイレ用の水として利用もした。

社員の中には身内で残念な結果になったスタッフもいたが、本当に一生懸命お客様のために動いてくれた。総従業員数は職員、パート職員あわせて200名。3月11日は約100名のスタッフが出勤していた。お客様を受け入れていたわけではないのでガソリン不足はさほど影響しなかったが、社員の通勤には影響し泊まり込む社員も多かった。

振り返ってみて

事務所のホワイトボードにも「何日目」と書いていた記憶はあるが、こうして振り返るといつで1カ月であったのか、本当にあっという間だった。今は一部コーナーを休んでいるが、ようやく一般のお客様を迎える状況となり営業を再開している。大変だったのは、これからどうなっていくんだろうという先が見えないところ。また宿屋をやっていくという希望を持って、復興隊の皆様をお迎えしたり、一般のお客様をお迎えしたりしていたが、これから東北がどのように力を戻して行くのかというところが誰にもわからない。観光が一番影響を受けやすい産業であるので、希望をきちんと見せることもできない中で社員に作業をさせる心苦しさは今なお解消されていない。予測できない不安要素を払拭できない中、営業を再開しているところが苦しい。今回お客様に「がんばってください」と言われたことは非常に多かった。「お風呂に入ったのが何日ぶりです、本当にありがとうございました」と言われた時に、温泉をやっている僕らの社会的使命というものを感じた。本当に、心が折れそうになることはいっぱいあったが、佐勘は秋保で34代続いてきた温泉旅館だ。これまでもそれぞれさまざまな困難はあったことと思う。ここでつまづくわけにはいかない、という強い意志を持ち、社員皆で力を合わせてがんばってきた。これは今後にも必ず活きると思って今やっている。本当に大変なことがあったけれども、それを力や勇気に変えて、秋保温泉街がまた活気を取り戻せるようこれから一步一步、歩みを進めていけば良いなと思っている。



撮影：2011.3.21 破損したロビーのガラス

個人

仙台市

被災者と災害ボランティアをつなげる
「応援紙」を発行

遠藤 智栄 地域社会デザイン・ラボ 代表（プランナー・NPOアドバイザー）

取材日 2011.5.17

地域社会のプランナーとして企業やNPOと協働・連携した事業、地域社会を担うさまざまな人や組織が参画するプロジェクトの支援などに取り組む。震災後は有志による情報交換の場づくりとして始まった「ふっこうカフェ」、仙台市災害ボランティアセンター広報ボランティアチーム、(特活)日本ファシリテーション協会災害復興支援室に関わる。

3月11日 14時46分

地震の時は仙台駅付近の喫茶店で、仕事仲間と原稿作成の打ち合わせをしていた。突然の大きな揺れに驚きながら、揺れが収まるのをその場で待った。店の中では食器が割れ、電気が落ち、女子高生が泣き出し、たまたま出張で仙台に来ていたらしいサラリーマンがパニック状態になっていた。外はアーケードの天井部が落ちてきそうな勢いで、積もっていた塵や埃が白い煙の様に舞っていた。その中を人々が慌ただしく右へ行ったり左へ行ったりしているのを見て店の外に出るのはためらわれた。店内で落ち着くのを待ち、打ち合わせも途中だったが切り上げて仕事仲間と別れ、近くの自宅マンションまで徒歩で帰宅した。途中、地震に驚いて店を飛び出して来たシャンプークロスを着たままのお客さんとハサミを持ったままの美容師さんなど、日常では見られない光景を目にした。自宅へ戻り部屋の中へ入ると、タンスや食器棚、本棚の本が崩れ、中の物は散乱していた。水が出るのを確かめて風呂桶に溜めたが、やがて断水となった。マンションの知り合いの安否を確認し、余震が続いていたので雪の中しばらく建物の外で過ごした。指定避難所である小学校へ行くか、残るかという話になったが、食糧や安全性などを考えると自宅の方が安心できると友人らと判断しマンションに残ることにした。

携帯電話は繋がらず、メールで親戚や知人の安否の確認を行った。すぐに充電が無くなったため充電できる所は無いかと考え、非常用電源がある県庁を思いついた。翌日出かけてみると、既に多くの人達がテーブルタップや充電器を持ち寄り（おそらく勝手に？）充電していた。充電という共通の行為を通じて何となくコミュニティが生まれ、「配給される物資はこっちの方が良かったよ」「あそこのお店は開いているよ」などといった情報の交換の場ともなっていた。「お店が開いてるなら買いに行きたいな」と言うつぶやきに「僕が携帯を見ていてあげますから買



い物に行ってください」と言ってくれた若者がいて、おかげで買い物をすることができた。マンションに戻ると管理組合で住民の安否確認の手法を検討していた。すでに遠くに避難した人、避難所へ行った人、まだ戻ってきていない人がいて住人全員の安否も所在もわからない。模造紙に階と号室を書きこんだマップを作成して1階ロビーに貼った。そこには安否確認や被害の状況を書き込み、伝言板用の模造紙とペンも用意するなどしてマンションの住人と情報を共有した。

日曜日になり、市内の仕事関係やお世話になった方の所を見て回った。

震災後の生活

以前、宮城県沖地震から30年の年に防災関連シンポジウムのコーディネーターを担った。その時や、地域づくりワークショップなどでは、普段の地域づくりの活動を一緒に顔を合わせて行うことが非常時にも役立つ、と話をしていた。そうしたお話しをするにあたり、自らも自宅に対策せねばと基本的な防災グッズは準備していた。今回それはとても役に立った。キャンプをよくやることからツーパーナーや乾電池式ランタン、携帯ラジオなどのアウトドアグッズもそ

ろっていて、日々の生活よりは不便だったがお陰で切り抜けることができた。

また、実家の組合で生協と取り引きがあったため、生協へおにぎりの差し入れを行っていた。生協本部へ届けるついでにと実家からの食料を届けてもらえた。おかげで食料の手配に関しては行列に並ぶといったことは少なくて済んだ。

震災で変わったことは？

特に大きく変わったということは無いが、未来をより良くするために提案する活動や仕事をしているので、元通りにするのではなくて震災をバネにして、より良く変えていける機会にできないかと思っている。平常時に変えにくいことも、非常時だからこそ仕組みや、やり方を変えるきっかけにできれば良いと思う。環境の活動にしても「地球温暖化防止のために節電」と言っていた時とは違って、今後の電力不足に備えて節電に参加・実践している人が多い。こういう機会をきちんと捉えて未来をより良く創っていく活動や仕事をしていきたいと考えている。

ふっこうカフェ、災害ボランティア支援活動について

地域づくりに関わっている「東北こんそ」のメンバーリングリストの中で、復興に向けたワークショップをやりたいという投げかけがあり、賛同したメンバーが集まって検討を行った。まず現状を理解することから始め、過去の経験がある人達の話の聞き、対話と情報交換をしながら次のアクションに反映できるようなことをしようと、現在のスタイルで「ふっこうカフェ」を行っている。何回のカフェをいつまでやろうとは決めておらず、今後の動きを見ながらフレキシブルに動いて行くつもりだ。

仙台市の災害ボランティアセンターのお手伝いもしていて、災害ボランティアに関わる人やインターネットを使えない地域の被災者やお年寄りなど、災害ボランティアをお願いしたい人を対象に「応援紙」を発行している。記録を残す観点からも今後役立つだろう。取材していて感じるのは、今回初めてボランティア活動をした方が多いということ。そのため、災害ボランティアセンターはどんなところで、どんな活動をしているのかといった情報の紹介を行っている。編集のためのボランティアメンバー募集から取材・編集・発行までをお手伝いしている。

また、所属している日本ファシリテーション協会では「災害復興支援室」を設置して支援活動を実施している。市民1人ひとりの力やコミュニ

ティの力を活かして、そして、支援されるだけではなく自分たちからいろんなパワーを出して復興を促進していけるような、そんな話し合いの場、取り組みを作ろうとあちこち飛び回っている。

今後の活動

3月の後半から新年度に向け、自治体と「地域の活性化や協働のまちづくり」などで打ち合わせを行う予定があったのだが、津波による影響で事業自体が無くなった。今真っ只中の復興計画作りは自治体により差が出てくるだろう。市民からも声を出していかないと、市民の意見を活かさずにいつ決まったの？ということになりかねない。そういった意味では復興計画、まちづくりにどのように市民と企業と行政と、いろんな人が一緒になって取り組んでいけるかということが、そのまちの元気度に関わってくる。こうした動きを応援していきたい。地域づくりや地域の活性化の活動や仕事をしていて、まさに復興とも絡んでくるので、地域のいろんな人たちの力を総動員して活かしていけるようなお手伝いをしていきたい。

2ヶ月を振り返って

全国各地の知人と話をしてみると、支援をしたと考えている人はまだまだたくさんいる。そうした人達の想いをより良く活かして復興していけるいろんな道や方法が、関わっているいろんなところでできてほしいし、自らも創り出していきたい。被災者と支援者の両者が疲弊することなく、WinWinの関係になるように、出会いを大切にして継続的な繋がりが生まれるよう取り組んでいきたい。



仙台市災害ボランティア応援紙

NPO

七ヶ宿町

北上町相川地区で 地域の人とつながる継続的な支援を。

海藤 節生 NPO法人「水守の郷・七ヶ宿」理事長

取材日 2011.5.19

水源地七ヶ宿の役割と魅力を伝え、地域の自然と人を守り育てる事業に取り組む。震災後は北上町相川地区で瓦礫や危険木の撤去、伐採などを行う他、焚付け用にと「仙台光のページェント」の使用済み割り箸と間伐材の炭を寄贈するなど継続的な支援を行う。また、「水守の郷・七ヶ宿」では『海と山をつなぐ復興プロジェクト』を展開している。

3月11日 14時46分

僕の3月11日は、他の人とは違った形でやってきた。3月8日夜、昨年11月から病気で入院していた母が亡くなった。3月11日は「友引」にあたる。お寺の住職さんと相談の上、高齢かつ遠方の親戚に配慮し、通夜、葬儀を早めて行なった。3月11日、仙台市内にある実家に仮祭壇を設け弔問客のお相手をしていた。近所のおばあちゃんがお線香をあげに来ていた、まさにその時に地震が起きた。母の遺影や位牌、お花がすべて倒れ祭壇から落ちてきた。もし母が病院に入院していなければ、この家で1人地震に遭っていた母の姿を想像しゾッとした。弔問客のおばあちゃんを抱きかかえ一歩も動けずいろんな事を頭に浮かべた。妻と子どもにトイレに避難するように言った。後は神頼み。家具には転倒防止を施していたので倒れることはなかった。おばあちゃんは気丈にも自分であげたお線香が祭壇から落ちたのを見て指でもみ消していた。

揺れが収まるのを待って、おばあちゃんを自宅まで送り届けようと外に出た。仙台市内の電柱の多さとその上のトランスに恐怖を感じた。途中、小学校の校庭に児童が集合し、先生が点呼をとる姿を見た。

学生の時に体験した「宮城県沖地震」の記憶がよみがえって来たが、その時より「たいしたことないな」というのが自分自身としての印象だった。当時はあちこちのブロック塀などが倒壊していたが、今回は近所の周辺に目立った被害が見られなかった。耐震補強や建築基準の見直しなど、過去の教訓が活かされているのだろうと感じた。

その後、全く通じない携帯電話を操作しながら妻の実家へ安否確認に向かった。屋根や塀の瓦は被害が大きかった。瓦を片付け、シートを貼って、余震に備え立ち入れないように予防線を張った。ガスはプロパンで石油ストーブもあり、さらに水を近くで手に入れることができた。ライフラインの復旧も早かったため、日々の生活にさほど不便を感じることはなかった。ガソリン



不足は別としてだ。

宮城県沖地震の時、普段家に帰って来ない父親と、あまり家に居ることのない自分と、弟と母の4人で、停電の中ろうそくを囲んだのを思い出す。家族が共にいる幸せを感じた。今回も妻の実家で義父や、平常時は別棟にいる親戚と、皆が同じ部屋で寝食を共にすることとなった。他界した両親と同じ屋根の下で暮らすことはできないけれど、ひとつ屋根の下で家族が集うことに何とも言えぬ悦びを感じた。

ボランティア活動

震災直後はNPO法人日本エコツアーリズムセンターが中心となり発足した「RQ市民災害支援センター」にボランティアで入り、支援物資の配送を行っていた。震災直後から行政をはじめさまざまな団体・ネットワークが支援に入っていたが、上手く連携できていない。支援の方法に疑問を持ち始めていたその時、本吉町の小泉中学校避難所で「ひまわりおじさん」に出会った。この方は阪神淡路大震災の被災者でもあり、震災後は給水ボランティアやお風呂の出前ボランティアを行い、ひまわりの種を集め、瓦礫の街にひまわりを咲かせる活動をしている。小泉中学校を拠点に継続的に支援し、時間の経過と共に変化して行く被

災者のニーズを先取りしながら適切な支援を行っているのを見て、こういった支援の仕方がとても理想的に感じた。

自分はどこでどんな支援ができるだろう？と模索していたところ、個人的な繋がりから瓦礫の処理のためにチェーンソーを貸して欲しいという依頼が舞い込んできた。チェーンソーの扱いは難しい。そうしたワークがあるのであれば、僕たちで切ってあげようと七ヶ宿の有志が集まった。北上町の相川地区に入り1人ひとりの顔が見えてきた。ここを継続的に支援していこう！と決め、活動が始まった。当初は倒壊した家屋の木材を燃料として使用するために、また津波で根がさらわれた危険木を伐採することが僕たちの仕事であった。伐採された木は炊き出し用の薪として使われた。次第にボランティアの問い合わせが集まってきた。僕たちは可能な限り現地に連れて行ってあげた。厩に合わせ鯉のぼりをあげたり、カーネーションの鉢植えを持って行ったりもした。訪問を重ねるごとに地域の方達との繋がりが深まり、行けば帰りがけに「今度はいつ来るのや？」と声をかけられるようになった。山形県の高島町や東京のNPOがたくさんのボランティアを連れてやってくる。「こんな人達がいつから連れてきていいべか？」と聞くと快く「おお、連れてこい」と言ってもらえる。今のミッションは、川を遡ってきた津波により木やのり面に引っかかったゴミや川の瓦礫を取り除く作業だ。気の遠くなるような作業だ。

2ヶ月を経過して

学び、支え合い、繋がっていく、これを再構築できるかできないかが、これからの僕たちへの課題ではないかと思う。七ヶ宿と相川には共通する点が多いと感じている。過疎化する山に人が住むことの大切さを認識し活動している自分、漁業を生業にそこに住み海を守ってきた人達の思い。これからもお互いに頑張ろう。「被災地支援」という言葉ではなく、それぞれの地域の未来創りだと考えている。自然と共生した海と山でつながりながら競い合う、学び合いながら未来を創っていくこと。僕たちが住む場所は日本という大地を守っていくための大切なフィールドなのだと思う。

振り返って見て思うこと

被災者のニーズとは異なる支援があったり、被災者のためと言うよりも自分のための活動が見受けられた。そういう場面を目の当たりにするたび、自分自身の活動について振り返る反面教師的学びの場となった。こういった経験を今後活かして

行くことが大切だと思う。

そして、改めて地域活動というのは非常に重要であると感じた。分け合うといった感覚での未来作りを、日本人が試されているのではないだろうか。震災直後、みんながいろんな物をシェアしていた。奪い合い、戦い合い、競争し合いの社会から分け合う社会、「シェア」という感覚が、これから日本がうまくやっていくためのキーワードではないかと思う。今回の震災で自分の進む道を確信した。



撮影：2011.5月 チェーンソー隊



撮影：2011.6月 ごみ拾い



撮影：2011.12.8 手作りしたバスの停留所

企業

仙台市

救援物資配送と津波被害の廃棄物処理。 同業者の支援に支えられて。

小幡 秀樹 株式会社サイコー 総務部総務課主任

取材日 2011.5.19

自然にやさしく、明るく豊かな未来を創造していくエコロジー産業を志向してリサイクル事業を展開している。小中学生の施設見学の受け入れ、地域イベントの出展など環境教育や啓発活動にも取り組む。震災では産業廃棄物の中間処分場である仙台港資源化センターが被災。できることをしようと残されたトラックで救援物資輸送の支援に取り組んだ。

3月11日 14時46分

私が勤務する仙台市宮城野区岩切の事業本部では、これまでに経験したことのない強く長い揺れを感じた。道路はところどころ液状化したりマンホールが飛び出し、尋常でない事態だと感じた。その頃、仙台港付近の工業団地内にある当社仙台港資源化センターでも、建物の倒壊は無かったものの周辺すべてが停電し、すぐに津波警報が発令されたため、センター勤務の社員は全員でトラックの荷台に乗り合わせ、海から離れるように避難。やがてすぐに渋滞に巻き込まれたためトラックを乗り捨て、徒歩で岩切の事業本部まで向かっていた。途中、大地震にどうして良いかわからずさまよっていた10人ぐらいの中学生グループを見かけ、危険防止のためには一緒に行動したほうが良いと判断し、声をかけて彼らと一緒に歩いて事業本部に向かった。

夜になり、渋滞に巻き込まれながらも回収業務から帰ってくる社員の安否を確認しながら明日からの対応を話し合った。自宅が津波の被害にあった4名の社員は会社に泊まることにした。中学生グループも事業本部に泊めることを考えたが、近所のコミュニティセンターが避難所となっていたためそこへ送り届けた。当日は雪がちらつくような寒さだったが、幸い事業本部にはドラム缶やパレットがあり、パレットを割って薪代わりにしてドラム缶の中で燃やし暖を取った。ドラム缶を囲むようにトラックを並べ風よけにして、それぞれの家族や親せきの安否を確認しあいながら夜を明かした。

翌日から

翌日、事業本部内に「災害対策本部」を設置した。安否確認、燃料調達、食料調達、顧客対応、処分場確認などの班に分かれそれぞれ情報収集しながら対応にあたることにした。ガソリンスタンド復旧の見通しが全くなかったため、遠方の社員は自宅待機とし徒歩や自転車を通



える社員を中心に復旧作業を行った。トラックは残っていたため、燃料さえあればトラックで仕事はできる。専務が仙台JCの理事長を務めていることもあり、緊急車両の指定を受けて14日ぐらいから栗原、登米、大河原などに向け、救援物資配送の支援を始めた。トラックを運転するドライバーは自宅が津波被害を受けた社員が中心で、自分の家のことを思うとつらい部分もあっただろうと思うが、とにかく自分たちが今できることをやっていくという趣旨を理解し、頑張ってくれた。また、自宅からおにぎりやみそ汁を差し入れてくれたり、県外の親戚が持ってきてくれた食料を持ち寄ってくれる社員もおり、皆で助け合いながら日々を過ごした。

業務再開への苦労

震災直後からお客様からの強い要請を受けて事業系のゴミの収集ができないか役所関係とかけ合ったが、なかなか動きが進まない。まずは人命救助、ライフラインの復旧が先決ということでゴミの処分は後回しとなっていた。お客様からは、停電で溶けてしまった冷凍食品、賞味期限の切れた商品、落下やほこりなどで傷んだ商品の廃棄を求められても、処分場が事業系のゴミを受け入れることができず、燃料不足もあってなかなか回収すら進ま

なかった。

いまだに賞味期限切れや津波被害を受けた食品などの廃棄業務が続いている。見るとまだ食べられそうなものもあるが、万が一のことを考えると店頭に出すことができない。お客様、私たちも葛藤を感じながらも、できる限り堆肥化する、飼料化するなどの処理方法を全国の処分業者とやり取りしながらの対応となった。

支援のパッカー車

つらい話だけではなかった。震災翌週には全国の同業者から米やその他食糧、水などがトラック1台分いっぱいにとめられて届いた。また、トラック5台を津波で失ったものの、この状況を全国の同業者に知らせ車両の貸与を呼びかけていたところ、トラックの貸し出しや支援物資の提供など全国からいろいろな支援の申し出があった。その中で岐阜県の産業廃棄物処理業者ジャパンクリーンサービス様が、新車のパッカー車（ゴミ収集車）を貸してくれることになった。届いたパッカー車を見て、社員全員が驚いた。車体には岐阜の小学生160人から集めた応援メッセージがプリントされていたのだ。さらにイラスト作家・森島知子さんのイラスト、文字職人の杉浦誠司さんが書いた「めっせー字」が車体一面に広がっている。「絆」という文字は、「しんらいする」というひらがなで「絆」と書かれている。もう一文字、「望」は「あきらめない」というひらがなで書かれていた。新車のパッカー車を貸してもらえるだけでもありがたいのに、この想像を超えた取り計らいに、社員全員が感動し、元気と勇気をもらった。日頃の心の通ったお付き合いの大切さを身にしみて教えられた。

2ヶ月が過ぎて

仙台港にある資源化センターは現在復旧作業中で、先週ようやく電気が通ったような状態。今は機械に電気を入れ稼働テストを行っていて、6月以降、機械を動かせるものから順次業務を再開していく予定だ。とにかく1日も早い復旧に向け、全社員で取り組んでいる。

震災後、会社の結束力は一段と高まった。この困難をみんなで乗り越えられたことを誇りに思う。また全国の同業仲間にも助けられ、当初の予想よりは奇跡的なスピードで復旧作業は進んでいる。震災復興スローガン「元気・勇気・挑戦!がんばろうサイコー!」を掲げ、自分たちの復興の姿が、お客様や地域にも勇気を与えられるよう、社員一丸となって頑張っていきたい。



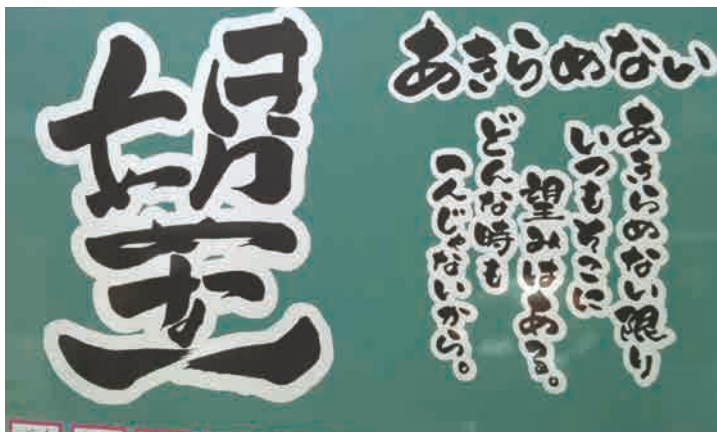
撮影：2011.3.15 津波で流されたトラック



撮影：2011.3.13 社員を集めて朝礼



撮影：2011.4.21 応援メッセージ入りパッカー車



撮影：2011.4.21 めっせー字「望」あきらめない

NPO

仙台市

女性のための支援へ。 東北人がつなげる現地と支援者

足立 千佳子 NPO法人まちづくり政策フォーラム理事

取材日

2011.6.4

関係諸団体との協働を基にまちづくりに関わる調査研究等を行い、豊かな地域社会の形成に貢献する事を目指し活動に取り組む。震災後はRQ市民災害支援センター登米現地本部で、ボランティアの受付窓口や諸々の事務作業を一手に引き受ける「総務」を経験。その後女性のための支援センターを立ち上げ、被災女性の支援に力を入れている。

落ち込んでいた3月

震災のショックは大きかった。自分はそれほど被害がなかったが、沿岸部のたくさんの人が亡くなってしまった。本当に目の前が真っ暗になった。私はもともと住民参加の地域づくりが専門。今まで関わっていたり、これから一緒に取り組む予定だった地域が津波で流されたり、ともに活動していた知人たちが亡くなってしまった。「まちづくりをしましょう」と夢のあることばかりを言っていたのに救えなかった、という思いに悩まされた。過去にはハザードマップのワークショップも行った。なぜもっと真剣にやらなかったんだろう！もっともっと分析してここがどれくらい危ないということがわかっていたら、もっと違ったハザードマップが作れたんじゃないか、今回の震災で活かすことができたんじゃないか。防災計画にしても、地域づくりにしても、もっともっと踏み込んでいろんなことをすれば、いろんなことができたはずなのに。

私がやってきたまちづくりはちっぽけだなと、3月はひどく落ち込んでいた。

RQ市民災害支援センター 登米現地本部へ

各地からいろんな人が来て受け入れが始まり、現場の人達は何をしているのか気になっていた。そこに知人が、現場のことをわかっているコーディネイト役が必要だと言うのを聞いた。東京や関西、全国から大勢のボランティアが駆けつけて熱心に救援活動をしているが、現地の地域性などが理解されず、もしかすると被災地ですれ違いが生じているかもしれないという。3月28日に突然RQ市民災害支援センターに行くことを決めた。

現場に行くと、やはり東北人ならではの「なかなか言えない」状況があった。何度も足を運んでお茶っこ※しながら話を聞くと、おばちゃんたちから「実は洗濯干すところなんだ」「着替えってこね



んだ」と後から後からいろいろな話が出てくる。いくら現地調査票を送っても、それを書くのはお父さんたちで女性は書かない。だから、困っている女性達の声は聞こえてこないのだ。

女性のためのホットライン

避難所に支援物資は確かに届いているが、配布者は男性だ。例えば下着が届いた時、男性の前で選べるだろうか。生理用品は袋ではなくナプキンで1個ずつ渡す人もいたそう。女性としてはせめて何かに包んで欲しいし、人によって必要な種類・個数は違う。支給品が無くなったと言えば係りの人に「もう無くなったのすかや」と言われてしまう。こんなにも性教育がされていないのかと驚いた。間仕切りがない避難所も多く、体育館に雑魚寝をしていて着替えはもともと布団の中でする。食事当番になれば1日中立ちっぱなし。それなりに役割分担はあるが、お父さん達が働きに出れば避難所に残る女性達に食事当番の負担がかかる。女性達はこんな状況で何か言えるだろうか。今まで当たり前を持っていたものを全て失った。だから「雨露をしのげるだけで幸せ」？本当にそうだろうか？自分を大切にすることの重要性を認識してほしいと思う。3月11日前の生活に戻る権利は誰にでもある。

化粧品を送ろう、体にあう下着を送ろうと活動を始めた。お金を渡せば女性たちは家族の物を優先して自分の物は絶対に買わない。だから「物」での支援が必要だと思っている。

6月1日から被災女性を支援するためのRQ被災地女性支援センターを立ち上げた。電話をもらったら課題に応じて解決していこうと考えている。避難所では個別ニーズ調査も行った。年代、身長、下着や靴のサイズなどプライベートなことを聞くため、番号で管理するなどプライバシーには配慮した。そのおかげもあってか、対象となる400余名中300余名から回答があり、ニーズの高さを実感した。

被災者とボランティアの心がふれあう瞬間

「災害ボランティア」は深刻な印象を受けるが、正直に言って不謹慎かもしれないが「楽しい」。「男はやんだ」としかめっ面をしているおばあちゃんが、男性にハンドマッサージをしてもらいながらいろいろなお話をしてくれる。終わるとニコニコしながらつつるになった手を何度もなでる。帰る時には玄関先まで手をつないで「また来て」と言ってくれるのが嬉しい。口実を作ってまた行くと「あの時のお姉ちゃんまた来てけたの、お茶っこ飲むべ」と言ってくれる。心と心がふれあう瞬間は本当に嬉しいし楽しい。

逆に牙になって向かってくることももちろんある。踏み入れてはいけない領域に入ってしまった時、「あんたたちボランティアはどうせあったかいところに帰れるんだべ」と言われたりもする。でも、私が仙台から来ていて体育館に寝泊まりしているということがわかったと、「あらなんだべや」とちょっと変わってくれる。避難所をまわって頼りにしてもらえたり、いろんな相談をしてもらえたりすることが、役に立てて嬉しいと感じる。東北の人のニーズは東北人でなければわからない。ずっと地元にいるおばあちゃんたちは東京や関西の言葉はわからないという。そういう点では私がいる意味があるのかなと思う。東北の言葉やちょっとした機微もわかる仙台の人にはもっと現地に入ってほしい。RQに来てくれたボランティアにこうなんだよと現地事情を話すと皆「えー、そうなんですか!？」と驚かれる。現地の状況をボランティアに伝えることも大事だし、逆に現地の人に「今こういうことだから言わねばダメだべっちゃ」と言う立場なのかなとも思う。現場に飛び出してよかったと思った。避難所の中でいろんなコミュニティができてきて、助けあうことをお手伝いすることもできた。これから仮設に入った後も一緒に何かしていけたらいいなと思

う。やっぱり私は地域づくりが好きなんだなと思った。コミュニティをちゃんと作っていく事、各地域でそれぞれの人達が主人公になるようなことを考えて、実現するにはどうしたらいいかなと思いつくのが好きだ。

ボランティアしたいと思っている人達へのメッセージ

ぜひぜひ現場に来てほしい。

どこでも人手は足りていないし、行けばさまざまな活動がある。行けば邪魔になるんじゃないだろうか、役に立てるだろうかと考えるくらいなら、一度現場に入ってみてほしい。もちろん行く前には「ボランティアの心構え」は読んでから。

もっと多くのボランティアに来てほしいし、ぜひ仙台の人にはもっと来てほしい。

=用語解説=

■「お茶っこ」

漬物とお茶を用意し、隣近所の人が集まりおしゃべりしながらお茶を飲むこと。取り皿や箸はなく、手のひらを皿の代わり漬物をのせ、指でつまみながらお茶を飲む宮城特有の習慣。



RQ登米現地本部となった、旧鱒淵小学校体育館

NPO

栗原市

生きる力のヒントはかつての日本文化の中に。 自然の猛威と恵み。

呉地 正行 日本雁を保護する会 会長

取材日 2011.6.25

ガンは古来より日本国民に親しまれ、近年急速に全国からその生息地が減少した。「雁」という文字は人（イ）と鳥（佳）がひとつの屋根（厂）の下に共生している。この文字に示された関係を実現するために、冬の田んぼに水を張り、新たな雁の生息地と渡りのルートを復元すると同時に、雁と水田農業との共生を目指す活動に力を入れている。

3月11日 14時46分

北海道北部・天塩（てしお）町には道内で2番目に長い「天塩川」がある。ここはシジミが地域の産物で、川や湖でシジミ漁が行われていた。春や秋には「オオヒシクイ」という雁が渡ってくる中継地でもある。ラムサール条約登録湿地の潜在リストにも載っている場所だが、地元の人にはオオヒシクイを資源だとは思っていない。オオヒシクイの重要な生息地となっている旧河川に昨年シジミのために大量に砂を撒いて、ガン類や、水鳥達らの食物にもなっているマコモやヒシなどの水草に影響を与えるという出来事があった。地元の人にオオヒシクイを大事にもらえるためにはこの鳥を地域の資源と思ってもらわなければいけない。そこで、漁業者、地元自治体、各分野の専門家、北海道開発局などが集まり、地域資源のシジミと雁の共存をめざす勉強会を立ち上げた。その第1回目が3月10日に開催され、会議に参加した。翌日、雪に覆われた美しい利尻島を眺めながら稚内へ移動し、羽田行きの飛行機に乗った。ちょうど宮城県から福島県の県境に飛行機がさしかかった時、飛行機が急に旋回を始めた。事前にアナウンスも入らなかった。しばらく経ってから大地震が発生したため羽田空港が閉鎖され、上空で待機をするとアナウンスがあり、長時間上空で旋回していた。結局羽田には着陸できず、仙台、花巻、三沢の上空でも待機したがどこも閉鎖され、計3時間程のフライトを過ごした後、千歳空港に降りた。その時点では大地震があった、という情報しかなかったが、空港のロビーでふとテレビを見ると、北海道の鶴川に津波がきて車が流されている映像が映し出されていた。これはただ事ではない、早く帰らなければと思った。携帯電話には自宅の妻から「地震大変です。みなめちゃくちゃです」というメールが届いていた。何回電話をしても通じない。陸路で帰ろうと思ったがJRは全面運休、テレビを見たら函館駅が浸水している様子が映っていた。その日は札幌に泊まり、翌日もう一度札幌駅に行ったがやはりJRは全面運休



だった。そこで千歳空港へまた戻ったが、すでに人であふれていた。運よく羽田行きの臨時便に空席があり、10時30分頃千歳を飛び立った。北上川沿いを南下し、宮城県の南部からは海岸より少し内陸寄り、福島では海岸沿いを飛んだ。とても天気が良く、下を見ると海岸沿いの地形が大きく変わっているのがよく分かった。堤防が切れて水が流れ込んでいたり、あんなに多く海岸沿いに湿地帯なんてなかったはずだというくらい田んぼはすべて水に覆われ、どこもかしこも地形が変わってしまっていた。ただ事ではないと感じるには十分だった。

家に戻るまで

早く若柳（栗原市）に戻りたかった。その頃には携帯電話が被災地域以外へは通じていたので、東京に住んでいる息子に連絡し、東京から仙台までのバスのチケットを確保してもらっていた。ところが東京に着いた頃には、道路の安全が確保できないという理由で運休になってしまった。東北新幹線はもちろん、北へ向かう他の在来線もみな運休だ。息子のアパートに滞在し、頻繁に津波の映像を流しているテレビを見ながら交通情報を収集した。14日に上越新幹線が動いていると知り、まずは東京から新潟へ移動し、バスで仙台へ戻ってきた。

問題だったのは仙台から若柳までの移動だ。公共交通機関は全く動いておらず、車はガソリンが手に入らないため、若柳まで往復できる仙台的友人になかなか出会えなかった。幸い送ってくれるという友人が見つかったため、15日の夜に暗黒の若柳にたどり着くことができた。国道4号線は停電のためにほとんどの信号が消え、真っ暗で、通り過ぎるのは自衛隊の隊列ばかり。とても現実のものとは思えなかった。

真っ暗になったので星はとてもきれいだった。同じ場所でも環境が変わるとあれだけ違うものになってしまうのかと、これまでの生活がいかに不自然だったのかを思い知った。

「持続可能なもの」を見直す

電気、水、ガスが止まり、何も使えなくなった。特にオール電化の家では水洗トイレの水も流せない、トイレのふたもあけられない。いかにハイテクが脆いか、便利さが持つ危うさを嫌というほど実感させられた。

家では障子やふすまが平行四辺形にひしゃげて破け、明治時代当時の書きつけを貼ったふすまの中身が見えていた。いろいろな物を見るにつけ、これはただ事ではないということが実感として押し寄せてきたと同時に、日本文化の見直しをさせられた。かつての持続可能な生活から、効率性や利便性を求める中で置いてきてしまったものが、震災の片づけをする中でいろいろと出てきた。ローテク・ハイセンスこそがこれからの生き方だと思う。今までは古い物は価値がない、時代遅れだと言ってどんどん処分してきたが、古い物はそれだけ長持ちしてきたということでもある。これまでの社会は「効率性・経済性」を最も重要視してきたが、これからは「持続可能なもの」にプライオリティを置きかえることが必要だ。そのような視点で見れば、古い物や仕組みはそれだけ長持ちしてきた証で、長く生活していく上でこれらを積極的に残し、活かして行くことは不可欠だと思う。自然の災害は必ず起きる。その中でも生き抜ける、生きる力のヒントはかつての生活の中にあった。今回の震災はそれを見直す良い機会となった。

被災地の記録を残そう

私の住む栗原市は、今回の震災で最大の震度7を記録した。自然災害として津波については頻繁に報道されてきたが、内陸の地震被害の報道はほとんどされていない。栗原市の中でも若柳の被害は最もひどく、栗原市で被災した住宅の65%程が若柳に集中している。私が住んでいる区画では57世帯のうち30世帯が赤紙を貼られ、そのま

までは住めないような状態となった。我が家もその1軒で、住家だけでなく、4つの蔵を含むほとんど全ての建物を解体しなければならなくなった、これも含め内陸被災地の現場でしかわからないことをできるだけ記録しようと意識している。

震災を振り返って

日本が欧米化する中で、もともと持っていた自分達の良さを捨ててきてしまった。今まで物質的な豊かさを求めて便利な生き方をしてきたが、それはとても危うく長続きはしない。考え方を根本的に変えなければいけないと多くの人が感じたと思う。生きていく上で何が一番大切なのか。原点に立ち戻ってもっと長持ちするライフスタイルを考えていかなければ、これから先の未来は描けないと思う。

日本は長い歴史があり、かつての文化の中で育んできた長持ちする仕組みがたくさんある。例えば世界の寿命の長い企業は日本の企業が圧倒的に多い。室町時代から続いている企業もある。日本は文化的に長続きできるようなノウハウや風土を持っている。それを再評価し、これからの時代に活かすことが必要だ。日本の文化、伝統を日本人自身が評価し、誇りを持って社会全体で活かして行き、価値の基準は変えなければいけない。

人間は自然に対して管理しよう・支配しようという考えを持って傲慢に接してきた。これは欧米型の発想だ。もともとのヤマト言葉の中にnatureを意味する「自然」という単語はなかった。日本の場合、自然と人間は一体化していて、人間も自然の一部だと考えられていた。それは



栗原市若柳地区

いかに人間と自然が一体化しているかということ象徴している。「自然」という言葉は明治頃に欧米文化が入ってきたことによって作られた単語だ。

原発や遺伝子組み換えのように、技術的には可能だがその影響が社会全体に及び、一度問題がおきると人間が管理できない領域には立ち入ってはいけない。またこれらの問題を科学者の良心だけにまかせるのではなく、科学技術倫理に基づき、社会全体で監視・管理できる仕組みを作り上げる必要がある。

エベレストはもともと海の底だった。それが今や8千mを越える山となり、頂上付近から太古の海に分布していたアンモナイトの化石が見つかる。地球ではそうした変化が起きてきた。人間の力はどうやっても自然には太刀打ちできない。そのことを改めて肝に銘じることが必要だ。どうすれば自然の猛威をかわしながら、その恵みを受け続けることができるのか、そこに知恵を絞らなければならない。大地は我らのものではなく、我々が大地のものなのだ。

行政

不眠不休の対応、震災の大きな爪痕。

大崎市

大場 宏昭 大崎市民生部環境保全課主査

取材日 2011.6.28

大崎市は広大で肥よくな大崎耕土を有する一大穀倉地帯で、世界の登録湿地の中で唯一水田を冠したラムサール条約湿地「蕪栗沼(かぶりぬま)・周辺水田」がある。地域の宝を次代につなぐため「マガンの里推進プロジェクト」や、地域の小中学生に環境教育を行う自然観察バス「マガン楽園号」を運行するなど、地域全体で環境活動に取り組む。

3月11日 14時46分

地震発生時は市役所にいた。携帯電話に緊急地震速報が入ったのですぐに席を立った。小学生の時に宮城県沖地震を経験しているので、どうしても地震は怖いという印象がある。宮城県沖地震は、近い将来かなり高い確率で発生すると言われていたので、大きく揺れた瞬間に「これは宮城県沖地震だ」と思った。立ちあがったとたんにものすごい揺れとなったが、なんとか1階まで駆け降り外に出た。1978年の宮城県沖地震とは比較にならないほどの凄まじい揺れだった。

市役所のすぐ近くには小学校があり、下校途中の子どもたちがあまりの揺れに道路にしゃがみこんでいた。すぐさま、コンクリート塀などの倒壊の危険に対する注意を呼びかけた。近くの古い蔵が音を立てて崩れた。市役所の建物自体はひびが入ったものの、幸い大きな被害はなかったが、市中心部へ目を向けると、建物被害が大きく、津波被害が甚大だった沿岸部だけでなく、内陸部の大崎市にも非常に大きな爪痕を残した。

直ちに災害対策本部が設置され、病院の入院患者の安否確認や、災害協定を結んでいる店舗等へおむつや毛布の調達に走ったが、店舗も非常に大きな被害を受けており、毛布が入手できず、停電で真っ暗闇のなか、日用品の調達がやっとという状



態であった。直後は災害対策本部の仕事でしばらくの間帰宅するのは深夜に及んだ。その後、環境保全課で倒壊家屋等の震災廃棄物処分の業務を担当し、災害マニュアルに基づいてゴミの一時保管場所の確保や震災廃棄物搬入の受付業務を行った。4ヶ月経過した現在でも、震災に関わる業務がほとんどで、通常業務はまだできていないというのが現状である。

しばらくの間水道、電気が復旧しなかったこともあり、普段いかに便利な生活をしていたのかということを実感した。家族が全員無事だったということが救いだが、沿岸部の方々のことを考えると

本当に胸が締め付けられる思いである。南三陸町役場に勤務している知人が心配で、震災後1ヶ月程経過した頃に南三陸町へ訪れた。津波被害の大きさを目の当たりにして言葉を失ったが、知人と再会できた喜びに安堵し、家族も無事だったことを聞いて涙がこぼれた。津波で家や家族を失っても震災以来、不眠不休で震災対応の業務をしている職員の方々がいることを聞き、本当に頭が下がる思いであった。

震災を振り返って

ライフラインが寸断され、不便な生活だったことや、食糧やガソリンの調達が大変だったことなど、震災直後の生活を決して忘れてはいけないと思う。普段の便利な生活に慣れて忘れがちだった人への思いやりや家族とのコミュニケーションの必要性など、不便な生活をきっかけとしてさまざまなことを学んだような気がする。

環境活動に関して

環境保全課では、節電とCO₂削減のために、市役所の敷地内にゴーヤを植えて緑のカーテンを育てたり、公共施設におけるエネルギー削減に向けた管理の徹底など細かな節電行動に取り組んでいる。緑のカーテンは今年で3年目を迎え、種まきや収穫には近くの園児達にも参加してもらっている。今年は震災の影響もあり、種から育てることができなかったが、震災を理由に取り組みをやめることはしたくなかったので、苗を購入して植え

ることにした。現在、元気にスクスク育っており、カーテンの出来栄が楽しみなところである。昨年は希望する住民への苗の無料提供も行ってきたが、今年は前年度のように配布できず、住民から「今年はないの?」という声も聞こえてきた。夏に向けて緑のカーテンを育てると、涼しく・省エネになるという認識がしだいに市民の意識にも浸透しつつあると実感している。今回の震災は、日常の便利で快適な生活をもう一度見直すという点で非常に考えさせられた。市で開催する環境出前講座で地球温暖化をはじめとする環境問題をテーマにした講演でも熱心に聞いてくださる参加者が震災前と比べて増えたような気がする。復興にはまだまだ多くの時間を必要とするが、市民1人ひとりが身近なことから始める環境施策を考え、PRしていきたいと感じている。



撮影：2011.6.28 大崎市役所の緑のカーテン

企業

大崎市

酒屋が酒を造れなかった37日間。 心を込めた酒造りと環境保全型農業で恩返しを。

松本 善文 株式会社一ノ蔵 代表取締役社長

取材日 2011.6.28

環境に優しい企業を目指して、環境保全型農業に取り組み、酒米として環境保全米を、酒瓶にはリターナブル瓶を積極的に採用。社内で「社会貢献推進クラブ」を立ち上げ、全社員ができることからエコ活動に取り組む。震災後、被災した子どもたちのために「未来へつなぐバトン 醸造発酵で子どもたちを救おうプロジェクトF174」を立ち上げた。

3月11日 14時46分

東京新宿の高層ビルの42階で、全国から100歳元が集まる会議に出席していた。地震発生時は、ちょうど休憩時間で会社と携帯電話で話していたが、電話の向こう側から伝わってくる声で、尋常

ではない状況がわかった。ほどなく東京にも地震が到達し、高層ビルが折れるのではないかと思います。エレベーターが停止したので非常階段で地上へ降り、公共交通機関が使えなかったため、レンタカーを探したが貸してもらえず、巣鴨に嫁いでいた姉の車を借り、東

京を出発したのは夜中の12時のことだった。高速道路が閉鎖されていたため、ひたすら一般道を走り続け、18時間以上かかってようやく翌日の夕方6時過ぎにたどり着いた。自宅に到着するや否や、すぐさま会社へと向かった。

被害の状況

倉庫や冷蔵庫に保管していたお酒のうち13,000本あまりが崩れ落ちて破損した。社屋の最上部にある醸造用の水を蓄えておく高架水槽が破裂し、その水が階下に漏れ出た。ボイラーや精米機も破損し、作業中の米も廃棄せざるを得なかった。原酒貯蔵タンクは幸いなことに建物側に倒れたため、被害が少なく済み、当面の出荷にも対応できた。津波で被災された沿岸部の蔵元さんと比較すれば、被害はあったものの、まだまだましな方だと思う。ラインの復旧から出荷までは11日間を要したが、「造り」は1ヶ月以上停止した。例年であれば終えている作業だが、ここまでこれたことをありがたく感じている。

津波で家が流されたり、家族が犠牲になった社員がいるものの、従業員全員の生命だけは無事だった。それだけで良かったと感じている。家を流された石巻の蔵人へ、通常は杜氏が仕込みの際に寝泊まりする部屋を提供した。震災直後から社員一丸となって、復旧作業に取り組んだ。3月18日には電気が復旧し、瓶詰めのラインが稼働できる状況となり、現場で早急に配送用のトラックをチャーターし、3月22日、震災後初めて出荷を行うことができた。

全国からの支援、被災者の立場からの寄付

震災直後から全国各地から支援や励ましの声をたくさんいただき、それが力となり2回の大きな地震を乗り越えることができた。震災後38日が経過した4月18日に酒造りを再開したが、酒屋が酒を造るという当たり前のことができるようになったことを蔵人も喜んでいて、ここまでご支援いただいた方々に対して、よりいっそう手をかけて、心を込めたお酒を造って提供することで恩返しをしたいと考えている。一ノ蔵では、例年4月にお客様を呼んでお祭りを実施している。今回は震災のため中止としその予算は宮城県に寄付を行った。全国主要都市で行ってきた催事もすべて取りやめ、その費用も寄付に充てた。我々も被災している立場であり、損害の修復にどれだけの費用がかかるか分からないという状況の中で複雑な思いはあったものの、宮城県民、宮城県の企業として「何かしなければ」という思いからの決断だった。



環境保全米

震災で、田んぼへの塩害などによる原料の確保の問題が懸念されたが、幸いなことに来年度仕入れる予定の米については見通しが立った。平成5年の大冷害の際でも無農薬、有機栽培をしていた農家では、平年と同じ品質で同じ収量を保つことができたと聞く。それをきっかけに慣行農法との比較、環境に優しい農業の推進のために「環境保全米ネットワーク」に賛助会員として加入した。平成13年に会員となり、無農薬米による純米酒を発売し、その売り上げの一部を「環境保全米ネットワーク」へ寄付をするという仕組みを作った。実際に酒造りに使用してみると、同じ品種で同じ造り方をしても発酵が違う経過をたどっていく。慣行農法の物であればだいたい3週間でお酒が仕上がっていくのに対し、有機米だとさらにそこから3日、4日と長い経過をたどる。視覚による判断でしかないが、有機米の方が、発酵が穏やかながらも継続的にゆっくりと進んでいき、慣行農法の物は一時期とても活発になるが、その後すぐに収束してしまうといった違いがある。個人的な感覚かもしれないが、でき上がった酒を利



撮影：2011.4.5 復旧作業

き酒しても慣行農法の物に比べて、有機米の方はまろやかな感じに仕上がっている。「造り」をやっている中で明確な差が出てきているので、これは今後も大切にしていきたい。慣行農法から環境保全型の農業にしていくことによって、この地域に昔いた生物、白鳥やマガンなどが戻ってきている。環境に優しい農業をしていくことが、子どもたちや未来への恩返しではないが、良い環境を残していく手助けになるのではないかと考えている。



撮影：2011.3.12 倉庫の被害状況

NPO

石巻市民の私たちにできることを考えながら。

石巻市

川村 久美 NPO 法人いしのまき環境ネット 理事兼事務局

取材日 2011.5.29

石巻圏域の環境に関わる啓蒙教育と実践活動を通し、自然環境と生活環境が共生する社会を形成することを目的に活動に取り組む。震災後は団体の活動を一時休止し、「東北広域震災NGOセンター」の石巻地区活動拠点として場所を提供するなど個人で支援活動に従事。現在は「石巻市民による石巻復興支援プロジェクト」に携わる。

3月11日 14時46分

3月11日は家にいた。蛇田は海岸線から5kmも離れているが、非常な緊迫感を持った防災無線が入り、「津波がここまで来る、逃げなくちゃ」と思われた。あとで知った事だが、その無線が本当に大変なエリアの人たちには届いていなかった。地震で放送設備がダメになるとはまさかの事態だった。そのため、津波がくることが分からず、窓から見て初めて津波がきていることを知ったという人がたくさんいた。

2日目の晩までは余震がひどかったうえ、門脇町方面に見える赤黒い空とヘリコプターの爆音に不安を掻き立てられながら過ごした。3日目の朝が来て、泥にまみれ、なすすべもなく人々が続々と大通りを歩いているのを見て、大変なことが起きているのだと実感した。

蛇田は無事だという情報があったのか、4日目からたくさんの方が訪れてくれた。安否確認所のような機能を果たせるのではないかと考え活動を始めた。これが復興支援のスタートとなった。仲間や友人の生存を確認するという不安と焦燥の入り混じる活動だったが、生きている姿を見た瞬間は、



この先ずっと忘れ得ない喜びになっている。いしのまき環境ネットとしての組織力を起動できる状態でない、深刻な被災状況だったため、個人として活動している。けれども震災後の支援活動は、いしのまき環境ネットがあったからこそつながりで展開している。

地域で炊き出し

13日には近所の神社で町内の人達が炊き出しをすると集まっていた。この辺りは農家が多いので

材料もみそも井戸水もあり、畑にある野菜で食べることができた。夏祭りをする会場には大きな鍋などもあり、こうした活動がすぐに行える土台があった。これまで、まちづくり団体の皆さんがそれぞれ一生懸命積み重ねてきたものの威力とネットワークと機動力が発揮されていた。

ボランティアの姿

ピーク時はものすごい数のボランティアが入ってきた。自分がどこのチームに所属する者なのかわかるようゼッケンを装着していて、とても目立っていた。目立つことが、「ボランティアさんが来てくれている」「応援されている、頑張らなくちゃ」という活力を住民に与えていた。

交流のある他県の団体から依頼があり、「東北広域震災NGOセンター」の活動拠点として自宅を提供している。ここには4月9日からスタッフ数名とボランティアさんが来てくっていて、支援が手薄な遠隔地へと赴き、必要なものを伺い、購入して渡すという支援を行っていた。「必要な物を必要な分だけ必要な場所に届ける」という、一方通行ではなく会話を持ち、信頼を培っていく形の支援を知って刺激になった。

これから

いしのまき環境ネットとしては消臭をテーマのひとつとして活動している。体育館や学校の昇降口などに微生物群の液体を散布し、実績を出している。効果はだいぶあるようで、口コミで少しずつ

申し込みが広がってきている。EM菌はニオイを消す、土壌の改良になるとの評判は以前から高かったので、出番だと言わんばかりに、要請に対処できるよう体制を整えていた事が功を奏した。石巻は広いので、災害の度合いが本当にいろいろなレベルである。町内会ごとにいろいろな大変なこと、不満、不都合を抱えているがそれを吐き出すところがない。役所に行ってもすぐには対応してくれないという思いを抱いていて、仕方ないと諦めそうな雰囲気もある。けれども、諦めても仕方がなくて何とかするしかない。私たちのような第3者が入って整理することによって、市民の声を行政に届けていく橋渡しをしていけたらなと思っている。



撮影：2011.4.13 石巻市

NPO

【特別編】石巻の住民による対談

石巻から考える復興

石巻市

川村 久美 NPO 法人いしのまき環境ネット 理事兼事務局、相沢 健一、毛利 壮幸（まさゆき）

取材日 2011.5.29

川村さん宅へ伺った際、「活動休息日」にお茶のみに集まっていた皆さんを交えてさまざまなお話をうかがいました。皆さんの承諾を得て、『3.11 あの時レポート特別編』としてご紹介させていただきます。

【毛利さん】 家が川のそばにあり被災した。ボランティアさんにすぐ入っていただける状況ではなかった。まず家の人が少し整理して、ボランティアさんが機能しはじめたところに、来てほしいと申し込みをして来ていただく日を待つという形だった。通りにはたくさんボランティアさんたちが歩いていたので、おかげで気持ちの部分では孤立感

に陥ることはなかった。不思議な現象で、ある日突然状況が変わったことによる一種の「共同体感情」が生まれていた。皆同じような痛みを受けているから、それだけで仲間というような。これまであいさつしたことのないような3軒隣のおじさんとあいさつや会話が生まれた。物資の配給ではこれまで作られていたコ

コミュニティが機能したんだろうけれども、今思うとある種の共同体感情というものが、ボランティアの人の中にも生まれていたんだろうなと思う。彼とはおそらく二度と会わないのだろうけれども、おはようとかあいさつを交わしたり。気持ちの位置するポジションが皆一緒だったのかな。助け合わなければならない、というのはあった。1人ではちょっと怖いという気持ちも働いたのだと思う。

【相沢さん】 僕の住んでいるところは比較的新しい町なので、それほどコミュニティはできていないと思う。外で会ってもほとんど話さない。けれどもあの時は、顔を合わせれば「水あるの？」と声をかけあう状況があった。

【川村さん】 皆優しくなれた。お互いを思い合って、「大丈夫だった!?’」「食べれてんの!?’’ という会話をしやすい雰囲気でもあった。

【相沢さん】 ボランティアが入ってきたのは水がひいてからのことだった。水があるうちは入りたくても入れない状態だった。道路事情が整った時点と、町中の水がひいたくらいに自衛隊が入り、道路の整備を行い、その後ボランティアが入ってきた。

【川村さん】 はじめは、食べ物の次には「道」だった。被害のひどい地域の人達は、ちゃんと来てもらえるように自分たちで道路を整えた所もあった。それは海の方の漁師の人達。普段同じ浜で漁をしている人達の絆ってすごいよね。道路を作ってからやっと自衛隊が来れるようになって、ボランティアが来れるようになったというのを話している人がいた。ここは自衛隊が通れないから、物資がこない。だから取りに行かなくちゃいけないんだといってひたすら自転車をこいで行くような状況もしばらく続いた。

当初は「ボランティアさんありがとう」という気持ちがあったけれど、今は気持ちも変わってきて「やってもらって当たり前」というありがとうの気持ちも忘れてきつつあるような話もよく聞くようになってきた。あとは「ボランティアを要請してもさっぱりこない、もう!」という不満もたくさんあった。

【相沢さん】 同じ場所でもいろんなレベルでいろんな被害がある。ある地域では、建てたばかりの家が津波被害を受けたけれども、直せば使えると大工さんに言われた。ところが周りの家がみんな引っ越してしまった。そのエリアの中で一軒だけぽつんと残ることになってしまう。そこに住み続



けるのか。果たして直して良いものか。

【毛利さん】 さまざまな、考えなければいけないことがある。ウチの自宅も、ここに住んでいるけれどもこの場所でいいのかしら、と考えてしまう状況もある。まだ僕の同級生には子どもさんや親が見つからない人もいるが、その対応も継続してもらいつつ、今後は生きている自分たちの未来に向けて、どういったことが起こるのか、少なくとも予想できることに対しては対応策を考えられる人・考えるべき人で考えておいてほしい。

【相沢さん】 亡くなった方の搜索とともに、生きている方の搜索も必要になってくる。孤立している自宅避難者は多い。

【川村さん】 市で発表しているリストとは本当にかき離れた数字があがってくるのでびっくりさせられる。避難者40という発表に対して、実際に問い合わせてみると「いやいや、おら方は周辺の自宅避難者混ぜると300だよ」なんていうこともあった。

自宅避難者はまったく把握されていない状況。そうした行政の援助からもれてしまっている人達に



対して私たちが支援の手を差し伸べられるような活動をしていきたい。あんまりにも膨大だからくじけそうにもなるのだけれども。こんなに広域だから、ここだけに行ってもいいのかという迷いも生じるが、そこはある程度妥協しなければ進んでいけないと思う。

【相沢さん】 自身も被災して自宅も大規模半壊ということになっているが、次の石巻の姿ができあがっていく、その時間と現場にいられることにすごくわくわく感がある。自分たちの動き次第でどうにでもなっていける。何年か経って、2011年の震災の後にこう変わっていったと歴史の中に残るだろう。何かの運命でここにいる自分を、どう活かしていくか、自分がそれにどう関われるのか可能性がすごくある。具体的に町をどう整理していこうかということに関して発言力はないけれども、自分たちのこれまで積み重ねてきた経験やつなかりを今こそ活かすべきなんだろうなという話を皆といつもしている。

【毛利さん】 今だからこそ、3月11日以前に言っていた夢物語のようなことをもしかしてやれるんじゃないか。

【川村さん】 これまであった何かが無くなったことによって、またそれをやり直せるチャンスももらった。

【相沢さん】 コミュニティの一体感は緊急時にはあった。ところが日常に戻りつつあって、買い物も普通にできるようになるとまたその部分がなくなってきた。

【毛利さん】 いつまでも共同体意識は存在し続けないということもわかった。「おはようございます、良い天気ですね、今日は何の作業ですか」というところまで踏み込んでいた会話が、最近は会釈程度になった。自分自身もそう変わってきていると感じている。

【相沢さん】 可能性のあるこれからの将来の町づくりを考えると市場や行政システムに依存しきるのは危険だと思う。ウチの界限でもファミレスなどがなくなり、井戸端がもうなくなっている。これは皆が集まって会話できる場所を新しく作るチャンスなんだろうな。

【毛利さん】 一瞬でも形成されていた『共同体意識』の不思議な一体感をまだ皆どこかには持っているの、それがすっかり消え去らないうちが、何かしらの新たな町の中でのコミュニティを作っ



ていくチャンスでもある。

【相沢さん】 それは多分、開かれたコミュニティでなければいけない。あまりコミュニティ意識が強すぎると、今度は外部から来た人が入れない。たとえば、物資を配るところでもそういう現象があるところとないところがある。「いいから持ってかいん」という所もあれば「あんたウチの地区の人でねっちゃ」と断る所もある。これから家を失った人達がもしかしたら入ってくるかもしれない。そのコミュニティを新たに作り直すチャンスでもある。

【毛利さん】 1人ひとりの気持ちのありようが求められる部分でもあるので、なかなかすぐ良い形にはならないだろうなと思う。震災を受けた地域は、日本だけど日本ではない価値観を作るくらいのタイミングでもあるよね、というような話がある人としていた。

【川村さん】 今回の「人間力」はすごいよね。たとえば、一度こんな風に話し合いの場を過去に持ったことがあるだけの繋がりの人が、心配して仲間を連れてきてくれた、という話をたくさん聞く。一期一会を大事にしていくと、何か別なものが生まれうるんだなと実感させられた。声をあげることによって良いサイクルがどんどん生まれるなというのも体験させてもらった。声をあげていくことを皆で忘れないでほしい。どうせダメだ、どうせできない、っていう人たちのことを「ちょっと待って諦めるまえにさ」と支援していきたい。

NPO

仙台市

震災で唯一良かったことは。 一番大事なことがわかったこと。

木下 牧子、岡 菜実 ACT53 仙台 事務局メンバー

取材日 2011.8.25

「100人のうち"53"人（半分以上）の人が変われば世の中は変わる、変わりたい」。そんな願いを込めて、「53」（＝ごみ）について知恵やアイデアを出し合い、積極的に"ACT"（＝行動）しようと発足した。震災後は被災された方が元気になるように、使う人も元気になるように、被災女性による手縫いの「げんき雑巾」販売のとりまとめ役を担う。

3月11日 14時46分

【岡さん】 実家の近くで買い物中だった。店員さんが誘導してくれたためさほどの混乱はなく、私は犬をつなぐゲージにつかまっていた。両親のことが心配だったので、カートにマイバスケットを置きっぱなしにして実家へ向かった。行ってみると心配したほどの被害はなくて安心した。

【木下さん】 工作中だった。病院の受付におり、どうしようと患者さんと抱き合っていた。もちろん診察は即刻中止だ。

近くの前町小学校が避難所になったので、夕方には先生と一緒に避難所へ往診に向かった。それから1カ月、子どもたちと一緒に食事の手伝いなどに毎日避難所へ通った。

自宅では電気は月曜日に復旧、火曜日に水道が出た、ガスは1カ月以上かかった。水道の復旧は早かったが、下水が壊れたためにお風呂に入れたのはゴールデンウィークのことだった。

【岡さん】 電気は3-4日、水道は10日程かかった。近所のコミュニティーセンターで水が出たので、水はそこへ汲みに行った。実家の両親はとても水汲みに行けない。ガソリンがあるうちはまず実家の分を汲んで車で運び、帰りに自分の家の分を汲んで帰った。両親宅は水道の復旧が遅かったため、その後しばらくは水をリュックに入れて背負い、バスで通う日々が続いた。だいぶ遅くなってから、災害ボランティアが水汲み代行もしていると知った。お願いすると若い人が自転車で来て、私の何倍もの水を一挙に運んでくれた。ありがたかったが、母は「もったいなくて使えない」と、少しずつしか使わなかった。ガスは1カ月くらいで復旧した。大阪ガスの方が夜中の2時過ぎまで暗がりの中で作業をしていて、もう本当にありがたかった。

石油ストーブとカセットコンロは常に使っていたので調理に困ることはなかったが、鍋でご飯を炊こうとして焦げ付かせてしまった。電気が入った時には電気はありがたいものだと思った。



避難所となった前町小学校

【木下さん】 震災当日は3,000人が避難していた。毛布は200枚しかない。真っ暗な中に階段に座って寝る人もいた状況だった。廊下も歩くところがないくらい、教室も体育館もぎゅうぎゅうで、あふれた人は校庭で一晩を過ごした。

翌日の朝、45号線には「気仙沼」「唐桑」と書いた紙を持った人がたくさん立っていた。避難所の人数は2,000人になり、その後2週間くらいは1,000-700人ほど。最終的には百何人かになり、4月7日に解散式が行われた。別れたその日に、震度6強の余震が起こった。この余震で家の3階のものはすべて倒れ、寝泊まりしていた3階の部屋は誰も行きたくないと言い、未だに2階の一部屋に固まって雑魚寝をしている。

個人のつながりから広がる支援の輪

震災直後は正直目の前のことでいっぱい、会として動くのはなかなか難しかったこともあり、それぞれできることをすることにした。最初は、子どもたちの文具を集めているところがあるという情報がメールで届いた。そこで呼びかけをはじめたところどんどん集まったが、届ける予定だったところはもう満杯でいりませんと言われてしまっ

た。さてどうしようかと悩んだ折、ACT53仙台代表のご主人が「風の会」の活動で、避難所で子どもたちと凧を飛ばして遊ぶ活動をしているという。そこで避難所へ行く時に文具を届けてもらうことにした。また、NPO法人水守の郷の海藤さんが南三陸の方へ頻繁に行っていたので、集まった文具を託して届けてもらっていた。

七ヶ浜にいる友人からも衣類などが欲しいと連絡がきた。次第に「欲しい」とリクエストがあった情報を発信して集める、欲しい人達に送る、中継活動にシフトしていった。欲しいものと集まってくるものがマッチングしないこともある。大量に物を集めて送るのは大きな団体に任せ、欲しいと言われたものが届くよう、小さく活動をしていた。

避難所から生まれた「げんき雑巾」

ACTの事務所の並びに事務所を構えている団体のスタッフが、自身も津波で家が流され職場で生活している。そのスタッフから、知り合いが避難所で届いたタオルを縫って雑巾を作っているの、その雑巾をどこかで使ってもらえないかと相談が寄せられた。プレゼントするのもいいが、どうせだったら買い上げようと思っているという話だった。それなら縫った方たちにお金がまわるようにしたいと発案すると企画を任せられ、生まれたのが「げんき雑巾」だ。3枚1セット500円で販売し、300円は縫った人に報酬としてお渡しする。活動を始めるとどっさりタオルが届いたが、肝心の縫う人がいない。避難所を移転していき、あるいは仮設に入り、行方がわからなくなってしまうからだ。縫ってほしいと思って宣伝しに行けば「お金の絡むことをやってもらっては困る」と避難所を管理している人から拒まれ、なかなか縫う人が増えなかった。そんな中、最初に物品を届けた七ヶ浜の友人が個人的に声がけをしてくれた。声をかけた先でグループができ、町内会で参加したいという声もあり、今は県内100人程が参加してくれている。5,000枚を目標にしたが、あっという間に突破する勢いで雑巾が縫い上がっている。そこで、10,000万枚に目標を変更した。ACTとしては10,000万枚でこの活動をストップしようと思っている。

雑巾にはハートやクマなど柄入りのものもある。皆さんすごく楽しんで縫ってくださっている。手を動かすことは本当に癒しになると思う。被災して何もする気が起きなかった方が、縫うことが生きがいになって途中で「卒業したい。私はやりたい手芸をしたい」と仰ったり、「母の顔に笑顔が戻りました」というお手紙も届いた。あるグループは、「報酬」を皆でためて焼肉を食べに行くことを目標にして取り組んでくださっている。仮設に入った方から、避難所の皆と別れて寂しいので



ACT53仙台で販売中の「げんき雑巾」

また雑巾を縫いたいと連絡が入ることもある。買ってくださった方からは、ハートの雑巾が出てきて心がなごんだと声が届いた。喜んでくださっていることを伝えると、またそれは皆さんの励みとなり、これはどこに行くんだろうねと言いながら縫っているそうだ。遠くは九州や北海道など、全国に旅立っている。

げんきのタグ

熊本在住の石川健次さんに書いていただいた。緑内障・白内障による合併症で視力を失いながらも絵手紙などを書いている方で、このために書いてくださった。

できあがった雑巾には石川さんに書いていただいた「げんき」タグを縫いつけている。このタグつけボランティアは現在のべ16名。お手伝いして下さる方を募集している。

震災を振り返って

【木下さん】 減らせること、なければならぬ暮らせることを実感した。震災直後は皆夜が早かった。夜にコンビニがあいていなくても大丈夫だし、用事はすべて午前中に済ませて午後は家にいる生活が続いた。とても省エネだったと思う。大変だったし、未だに大変な思いをしている方はたくさんいるけれども、皆家族や隣の人との絆など、一番大事なものがわかったと思う。

【岡さん】 行動力のある人はすごいと思う。ボランティアの活動はありがたい。

【木下さん】 震災があって家族が集まり、逆に家族が離れ離れになった家庭もある。どんなに家族が一緒にいることが大事なのが分かったと思う。悪かったことは数えたらきりが無いけれど、一番大事なことがわかったことは、震災で唯一良かった事だと思う。

協同組合

石巻市

すべて流されても「やっぱり海しかない」。
漁業復興への課題

磨 有司 宮城県漁業協同組合

取材日

2011.9.9

宮城県の沖合は好漁場が多く、また多くの養殖業が営まれてきた。このため、漁場と海洋環境の保全を図るために、漁業系廃棄物適正処理の推進、漁場油濁防止対策、非有機スズ系安全確認防汚剤の普及、海浜清掃運動、地球環境保全活動に取り組んできた。ホームページでは旬の魚たちの生態、おいしさを惹きたてる料理法、魚にまつわる雑学も提供する。

3月11日 14時46分

地震発生時は会議で仙台にいた。会議を行なっていたホテルも大きく揺れて、会場にいた人たちは外へ避難した。停電になったため車のラジオが唯一の情報源だった。80人ほどが駐車場の車のラジオに釘付けとなった。「気仙沼が10mの大津波警報」「仙台的若林区で津波により数百人規模の方々が亡くなられた」等、地震発生から1時間以内の放送で、いったい何を言ってるのかと思った。アナウンサーが「仙台東部自動車道の東側は津波で壊滅状態です。」と言うのを聞いて、これは沿岸域が全滅するような津波が本当に発生したのだなと思い、とんでもない事になってしまったと感じた。

その後、会議の出席者の点呼を取り、すぐに帰宅してもらった。出席者は牡鹿半島から山元まで仙台湾を中心とした漁業者の集まりだったため、自宅に辿り着くまでかなりの時間がかかったことと思う。理事長も出席していたが、石巻の漁協の本所へ着いたのは翌日の明け方ということだった。

震災直後の動き

週が明けて、まず安否の確認を第一に行なった。電気も停まり一般電話も携帯電話もつながらない。浜の方は車も使用できない状況で、情報の収集には困難を極めた。なかには本所まで10時間かけて徒歩で報告に来てくれる支所もあった。一番困ったのはガソリンと灯油の不足で、その調達に奔走した。全国組織でもあるので全漁連からガソリンの供給を受けたり、燃油会社から供給してもらったりして各所に最低限の配給を行った。燃料の他に、もうひとつ大きな問題があった。浜の方たちは津波で何もかも流されてしまっていたので、現金を持っていない。物資の配給はあるが、現金は必ず必要となる。漁協は信用事業も行っているため、現金払い出しの対応を早急に行った。対策本部を直後に立ち上げたが、当面は安否確認と燃料やお金の供給を主として動いていた。



宮城県の漁業の現状

生産量は約38万tで全国2位（金額では4位）、カキとワカメは2位、ホタテは4位、ギンザケはほぼ独占状態、他もほとんどが全国でベスト3に入るほどの生産量をあげている。宮城県はそのぐらい漁業が盛んな県であった。それが、大震災の影響で生産がほとんどなくなった。

組合員は10,000万名ほどいる。組合員の家屋は全壊・半壊含め約5,000戸以上にのぼった。船も宮城県全体で12,000~13,000隻あったが、残ったのは3,000隻に満たない。

3月は養殖の生産時期で海苔、カキ、ホタテ、ワカメ、ホヤ、ギンザケをちょうど収穫している時期だったが、すべて流されてしまった。したがって今の宮城県の沿岸漁業の実態は、船もなくなり養殖施設も無くなって生産できない状態にある。家も車もみんな失ってしまい、輪をかけて苦しいのは借金だけは流されずに残っているということだ。

漁業生産には生産手段だけが出来上がっても、陸上での受け入れ体制が無いとどうにもならない。魚市場、冷凍冷蔵庫、加工施設、これらもすべて被害を受けていて、全国有数の宮城県の漁業生産基盤がすべて無くなった。これを全部セットで復旧していかないと、元の通りにはならない。

組合員の現状

震災から半年が経過し、大体の方は仮設住居に入居されそこを拠点に活動しているが、今はほとんど漁業生産を行っていない。漁業者も国の補助を受けながら瓦礫撤去に従事して、それで収入を得ながら自分たちの漁港、漁場の瓦礫を撤去し漁業の再開に向け準備している。

復興への課題

まず一点は瓦礫の撤去。漁港の中、漁港の浮いているものも沈んでいるものも撤去してしまわないと安全の確保ができないし、操業できない。海をきれいにすることが復旧・復興への第一歩だ。

次に必要なのが漁港機能の回復だ。宮城県には142の漁港がある。今回の震災で沿岸部はほとんど地盤が沈下し、漁港の岸壁も沈下したため船が接岸できない。かさ上げして船を岸壁に係留できて荷揚げもできるように漁港の応急的な復旧が必要だ。漁港の沖の防波堤も破壊されている。台風や低気圧の荒天が心配で、先日の台風は進路をそれて事なきを得たが今後に向け課題である。

次に必要なのが漁業施設。漁船、漁具、養殖施設、道具類。まず船がないと始まらない。養殖の再開もできるところから始めていこうと思っている。自分で何とかしろというのは無理なので、国・県の助成を受けての導入に取り組んでいる。船外機船を年度内に千隻ほど用意し、養殖作業や刺し網漁などに向けての準備を進めている。今回は組合助成のため組合が船を所有して窓口となり、漁師へ貸し出す。1人1隻ではなくグループを作り、共同で利用していくことになる。宮城県では船を造ったり修理したりする造船所も被災している。徐々に修繕程度はできるまでになってきているが、これも全国の協力を得ながら取り組んでいる。一方で、市場や加工・冷蔵施設なども受け入れができるよう早急に対応していかなければ本格的な復旧とはならない。

宮城県漁業協同組合も50の事務所のうち40近くが津波で破壊されている。漁業者の今後の再生に取り組むと同時に組合の立て直しを計っていかなければならない。

4月の段階で組合員に対し行ったアンケートでは3割以上が漁業再開をあきらめるという回答だったが、支援体制が明らかになってきた今ではもう一度やってみようという人が増えてきた。高齢の方や後継者のいない方の中には見切りをつけやめる方もいらっしゃるが、若い人たちは「やっぱり海しかない」とやる気になっている人が多い。何年かしたら震災前の生産量に戻っているのではないかと思う。

「水産業復興特区」構想

宮城県では県知事が水産業の復興に民間の参入を促す「水産業復興特区」を提案しているが漁協としては一貫して反対の立場を取っている。一般の方々になぜ反対なのかという事を理解していただくのは難しいのだが、理由は何点かある。そのひとつとして漁業というのは自然環境を維持していかないと生産ができない。いわゆる自然との共生だ。したがって漁業権を持つということは自ずとその沿岸域の自然環境を守っていくことでもある。漁業者はある意味では国民の代表として漁場を使い結果として海の自然を守っている。そこに採算重視の営利目的の企業を入れるということには疑問を感じているということがある。

また、戦後の水産業は大手企業が参入し、一時期は輸出産業の花形であった。ところが二百海里体制が敷かれ、漁業コストの向上を受け軒並み撤退した。企業が生産すれば漁業が維持できるかという点必ずしもそうではない。漁業者個人が「生業」として、良い時も悪い時も絶対に撤退しない、撤退できない生活の一部として漁業を維持し、そしてそれを協同組合が支えるという枠組みがこれからも漁業の復興という点では望ましい形であると思う。



撮影：2011.4.13 南三陸町の魚屋



撮影：2011.7.13 宮城県漁協亘理支店

NPO

石巻市

水平線に見えた津波の壁…。 何もなくなった町で、皆のやる気を掘り起こす。

太田 美智子 東日本大震災圏域創生 NPO センター

取材日

2011.9.9

宮城県地球温暖化防止活動推進員として講師活動や環境活動に取り組む。自宅が津波で流され、石巻高校トレーニング室で生活しながら東日本大震災圏域創生NPOセンターを立ち上げた。雇用創出、避難所での問題解決、被災者が自立して生活できるまでの支援サポート、子ども達のサポートなどあらゆる復旧・復興に関するサポートを行っている。

3月11日 14時46分

3月11日は、宮城県地球温暖化防止活動推進ネットワーク(Net PAGW)の総会の打ち合わせを行っていた。車で渡波市民市場の駐車場を出た直後地震に襲われた。助手席からすべり落ちそうなほどの揺れだった。車を止めドアをすべて開けた。道路脇に置いてあった水槽の水は波打ってこぼれ落ち、ほとんど空になった。反対側の民家から人が飛び出し、電線が波打つ状態を目にして、揺れが収まるのを待つしかなかった。今まで体験したことのない初めての揺れだった。すぐさまこの場所からどのように避難すれば良いかを考えた。石巻では日和山に逃げなければ救われる場所はないと思い、とにかく日和山に逃げようとした。逃げるためには、北上川河口の日和大橋を渡るしかない。そこを目指した。その時点では車はあまり走っていなかったが、日和大橋のたもとで混み始めてきた。その時、先頭の車を追い抜いて行く車があり、この先へ行けるのだという希望と早く渡らなければという焦燥に駆られ、橋を渡りきれぬかどうかは分からなかったが、賭けてみた。滑り込みでも良いから対岸へ着きたいとその車に続いた。車で走っている間、私は助手席から太平洋を見ていた。水平線が帯状に太く黒い。普段の光景とは違っていた。低音でズーンと来るような空気を感じた。何かが起こる、今までにない凄い事態になると直感した。あとで過去にチリ地震津波を経験している人から聞き、この時に見た黒い水平線は何mという高さで襲ってきた津波の壁であったということが分かった。そんな中、無事橋を渡りきった。

総合体育館へ

壊滅的な被害を受けた南浜町に83歳の叔母が1人で住んでいる。叔母の家は日和山までの避難経路上にあった。叔母には常日頃から地震の時は直ぐ逃げるように言っていたことが功を奏し、行ってみると叔母はリュックを背負い玄関の鍵をかけ



ようとしているところだった。少しでもタイミングがずれていたら行き違いになっていたかもしれない。そのまま叔母を車に乗せ、大手町の坂を上り総合体育館へ着いた。駐車場もたまたま1台分だけが空いていた。事態を把握するためそこに留まった。

津波を逃れ、あらゆる方向から総合体育館を目指して多くの方が避難して来ていた。しかし総合体育館は、その日プロレスの会場となっており、室内は地震で照明が落下したため館内には入れず、ロビーしか居場所はなかった。波を被って濡れたままの人を中心に、ストーブ2台をみんなで囲むように暖を取っていた。私たちは車の中で過ごすことにした。そのうちに雪が降り出し寒くなってきたので、積んでいた新聞紙を車の窓ガラス全面に張り、衣服の中に巻いて体温低下に対処した。避難したことを近しい2人にメールで伝えることはできたが、つながったのはほんの一瞬だけで、やがてメールもつながらなくなった。ガソリンも残り少なかったのでヒーターを点けては消しを繰り返し、その夜をしのいだ。南側の空がオレンジ色に染まり、火事が起きたことは分かったが、それがどこでどのように起きているのか情報を得る手段は全くなかった。

総合体育館では、私たちの団体が数日前にフォーラムを開催した時に配ったお茶のペットボトルが

1.5ケース残っていたので、それを体育館管理者と車内に避難していた周りの人たちに届けた。すると隣の車から「今、リンゴの差し入れがあったから」とリンゴを分けてもらえた。叔母もリュックに詰めた飴やお菓子をみんなへ分け、そうして持っていた食品を皆で分け合って空腹をしのいだ。降雪で凍えるようだったがこのことで心はほんわかしていた。水はいつ届くか分からなかったので、ペットボトルのお茶はこんなに少しずつ大切に飲んだことはないというくらい大事に大事に飲んだ。

翌日、総合体育館が遺体安置所になるため退去指示が出された。被災全貌を確認するため、3人で市内を一望できる日和山へ向かった。チロチロ赤い火がのぞきくすぶり続ける灰煙の隙間から、何もかも無くなった石巻の町が目飛び込んできた。いったい何が起きたんだろう、これからどうなるんだろう。しばらく呆然と立ち尽くした。何力所か避難所を探して転々とし、現在の石巻高校トレーニング室へ落ち着き、今もここで生活している。避難所に身を置いた直後に、自宅がどうなったか確認しようと下へ降りようとしたが、流された車が折り重なっていたり、まだ水が引いていない状況だったので断念した。数日後に再び試みた。瓦礫や塀をつたい、泥だらけになりながら辿り着いた我が家は一階部分のほとんどが津波にやられていた。居間や床の間の床板が持ち上げられ家具類は濁流にもまれたようにあちこちに散逸、キッチンでは、裏口は流入物に破壊され、固定していた食器棚や冷蔵庫が不自然に傾き、泥にまみれた家財道具で足の置場すらなかった。大切な物を置いていた寝室は、机・ベッド・テレビなどすべてが汚泥にまみれていた。もちろん大事な資料のほとんどは水没し激しく汚臭を放っていた。避難所では、乾電池の残量が心配でラジオも細切れにしか聞くことができず、全体の情報を把握することが困難だった。3、4日してラジオ石巻が、誰がどこにいて誰を捜していますといった安否確認の情報を流すようになった。また入口に貼りだされた、手書きの「日日新聞」でようやく全体像がつかめるようになった。情報は次第に増えていったが、地域の詳細まではわからない。渡波のグループホームにいた母親がどうなっているのか知れたかったが、情報が無く警察へ搜索願を出した。

この避難所にもどこにいるのか分からない家族を必死に探しに来る家族がひきもきらず、泥だらけの靴も脱ぎきれないまま、入り口で家族の名前を叫ぶ。私たち自身、ここに誰がいるのかも分からない。そこで、私達のいる入り口付近に避難所にいる人の名簿を作って置くことにした。名簿に見つからない場合でも、周りの人に声かけを行うよう促した。

ネットワークの立ち上げ

市から回ってくる支援物資は限られていて、量が少ないので全員に十分には行き渡らない。メールで支援を呼びかけた。Net PAGW（宮城県地球温暖化防止活動推進ネットワーク）のメンバーの関係で四国の認定NPO法人セカンドハンドという団体とつながり、大量の物資を手配してくれた。しかし物流機能も断たれ、ガソリンも不足していて配送は困難を極めた。当初は170名ほどが避難所にいた。約4分の1が幼稚園児で、幼稚園に残っていたお菓子を分け合って食べた。豆腐1丁を10人で分け、小さなおせんべいも4等分にし、そのおせんべいで「かんぱーい!」と大きな声で乾杯しながら、すべてのものを分け合って食べていた。やがてリーダーが替わっていき、Net PAGWメンバー高橋さんのリーダー就任を機に、「自分もみんなと一緒に立ち上がりたい」という気持ちでサポートに入った。

届く支援物資は数や形が異なっていて、全員に公平に分配するのに苦労した。子どもたちの割合が多かったこともあり、この避難所は子どもを中心に運営していく形をとった。3月18日に「子ども避難所クラブ」を試験的に立ち上げ、避難物資が入っていた段ボールの裏側を使ってクレヨンで絵を描いてもらった。ボランティアで入っていた画塾の先生と方向性をすり合わせ、ここを出発点として他の避難所でもチャイルドタイムの子育て支援を提案した。

キャッシュネットワークということでの雇用創出、避難所での問題解決、被災者が自立して生活できるまでの支援サポート、子ども達のサポートなどあらゆる復旧・復興に関するサポートを行っていきこうと、4月17日に「東日本大震災圏域創生NPOセンター」を立ち上げた。2-3年の話ではなく、10年~20年を見据えての活動を想定している。

避難所での環境教育

避難所では毎朝6時に朝礼を行っている。朝礼や会話の時に、震災直後は電気も水も通っていなかったもので、どのようにしたら清潔にかつ不安なく生活できるのか、節水の生活の知恵を提案した。石油ストーブの燃料も貴重だったこともあり、石油はあと40年で枯渇してしまうこと。ソーラー式のLEDライト提供を機に、新しいエネルギー利用についてもお話した。生活を共有する中で、ただ使うのではなく、それが何なのかを説明することが、結果的に環境教育につながっていた。避難所から仮設住宅へと生活の場が変化し、エネルギー利用を抑えたいと考えた時、暮らしのエコ

の知恵を伝えるなどこれまで環境に携わっていた者として活躍できる場面が増えてくるのではないかなと思う。

これから

これまでの活動で知り合った団体の協力があってやっと事務所が決まった。雇用創出の支援金をいただきながら活動していくが、まだ法人化していないため県や国からの助成はもらえない状況にある。そこを繋いでくれているのは、友人・家族・親類のみならず、やはりボランティアで支援してくださった団体や企業だ。義援金として支援した

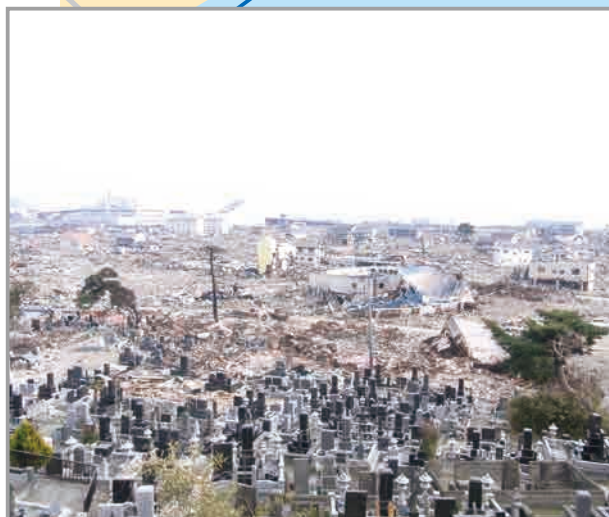
お金が見える形できちんと使われるところに寄付したいと思う人が多いようで、そういった人たちに支えられながら運営している。

これからの街を作っていくのは若い世代の人たちだ。その人たちに起業できるようなノウハウを雇用創出の事業の中から学び取ってもらえるようサポートしていきたい。

環境に携わっている時もそうだったが、震災からの復興も次世代に何を手渡すかということが大切だと思う。それはNet PAGWを作ろうとした皆の思いであり、皆がその気になれる活動の場づくりをしながら、そこで得たことを活かした新しい街づくりをしてほしいと思う。



門脇小学校



日和山から見た門脇地区



日和大橋

協同組合

塩釜市

手動で汲みあげた BDF 燃料。 給水・救援物資輸送車両への給油のために。

渡辺 信哉 塩釜団地水産加工協同組合

取材日 2011.11.21

H17年度に環境省の補助を受け、バイオディーゼル燃料精製施設を建設。特産の揚げかまぼこ製造で大量に排出される廃食用油を原料にし、H18年からBDFを製造・販売。組合員の配送車や市公用車、循環バスなど計190台が利用している。その後、地域の環境問題に取り組むためグローバル・エコシティ塩釜推進協議会を設立、69社が加盟している。

3月11日 14時46分

塩釜市職員の方との打合せ中に大きな揺れが起こった。書庫から書類等が散乱し、倒れそうになるテレビを近くにいた市の職員が必死に抑えていた。宮城県沖地震の時は関東にいたので、これほどの揺れを体感したことはなかった。大きな揺れが収まった後、やがて塩釜市の広報で津波警報が流れた。最初の広報が6mで、後から10mの津波がくると訂正の広報が流れて、高台に避難するようにとの緊急避難指令が発令された。職員の数人は付近の塩釜市清掃工場へ逃げた。私も含め、5人は職場に残ったが、津波がくる心配があったので、職場近くの高さ6m程ある排水処理施設へ逃げた。車は駄目でも命だけはとの思いで、排水処理施設の上から状況を見守っていた。ところが、時間が過ぎても津波が来る気配はなかった。周囲に目を配ると、付近の国道45号線はすでに高台へ逃げようとする車や帰宅を急ぐ車で大渋滞が起きていた。帰る事も困難な状況に陥ったため、塩釜魚市場の入り口近くにある高台の当組合で管理しているポンプ場に移動して待機することになった。当日は非常に寒く、雪が降っていた。暖をとるためにディーゼル発電機を持ってきて、中央監視室の前に上げ、照明と暖房を確保した。屋上から市街を見ると、塩釜市場周辺に津波が到達したのが見えた。人は乗っていないが、車が渦を巻いて流されていく。船が陸上にあがっていく。幸い人が流されることはなかったが、とても現実のものとは思えない光景だった。

自宅が浸水

震災当日は、まず自宅に戻った。国道45号線は通行止めとなり、利府街道を迂回して裏道に入った。自宅を目指すのが道路は冠水していて車では走れない。自宅近くの県道に車を置いて、腰くらいまで水に浸かりながら自宅に向った。水はとても冷たく、側溝の蓋など多くの障害物が浮いていて歩くには大変危険な状況だったが、そんな事を気



にする余裕もなかった。自宅にいる妻の事が心配でならなかった。

やっとの思いで東松島市野蒜（のびる）にある自宅へたどり着いた時には午後7時を過ぎていた。周囲の被害は尋常ではなかった。自宅は床上1.2m程浸水し、妻は避難所には行かず自宅の2階に残っていた。幸い家族は全員無事で、犬舎が水で浮き隣の家との塀の上に乗っていたが、飼い犬4頭も奇跡的に救出する事ができた。その晩は家族1人ひとりがそれぞれ犬を抱きしめながら夜を明かした。

翌日、実家のある美里町に妻と娘を連れて避難することにした。実家は地震の被害はあったものの津波の被害はなかった。美里町も1週間ほどはライフラインが不通だった。野蒜の自宅周辺は犠牲になった方々も多かったので、遺体捜索を行う山形の自衛隊が入り、その地区の住民ですらしばらくの間は立ち入ることさえできなかった。

地元産バイオ燃料が効果を発揮

12日に家族を美里町に送った後、その足で状況確認と今後の対応のために職場へ向かった。職場では塩釜市から要請があり、給水や救援物資の輸送車両へ給油を続けた。タンクローリーへBDFを投入するためには、電気が使えなかったので手

回しで行うしかない。従業員が交代で行ったが、手動では10回回して1ℓ程しか汲み上げられず、大変労力を要した。当時、BDF燃料の備蓄は約1万4,800ℓもあり、3月29日までにのべ85回、計4,800ℓを使った。さらに工場への給水事業を柱としている組合は、BDFのPR用発電機を使って水を汲みあげ市民に提供した。

電気が回復した19日からは、組合員の工場の冷却塔に給水し、冷凍庫の食材を守ることができた。4月7日の余震時も同様に、PR用発電機が市民への給水に大きな役割を果たすことになった。会社組織としては、震災から1ヶ月程は緊急支援を中心に尽力し、ライフラインがすべて復旧した頃には、組合の方々の安否確認、被害調査等を行った。震災後1ヶ月程はガソリンが枯渇している状況だったので、従業員を3班に分けて乗り合わせることにし、3台ある社用車は通勤に使用した。

震災から半年過ぎて…

他県から来たボランティアの方々にいろんな事をしてもらい、救援物資をいただいた事は大変感謝の思いがある。また、臨時給水所として水を供給した時など、従業員は大変だったと思う。ライフラインが戻ると震災が起こった事さえ忘れがちだが、あの大変だった思い、辛かった思いは決して忘れてはいけないと思う。当時は辛いと思う余裕

すらなかった。

BDFの大口排出事業所であった揚げ蒲鉾工場など数軒が工場を流され、月3万ℓを目標としていた原料の回収量が半分以下になってしまっている。冬場は回収量が多いので、震災当時ストックしていた事が緊急時に幸いした。普段はあまり地域の人たちと話す機会がなかったが、今回臨時給水所を開設した事で住民の方とコミュニケーションをとれたことや、感謝してもらえたことは大変嬉しく思っている。



大学

仙台市

「新しい暮らし」を自分達で生み出し、 地元に「エネルギーの駅」を作ろう

中田 俊彦 東北大学大学院工学研究科技術社会システム専攻 工学博士

取材日 2011.12.13

地域エネルギーシステムのデザイン、エネルギー経済工学が専門。東北経済産業局東北地域再生可能エネルギー活用事業アドバイザーボード委員長など、各種エネルギーに関する委員等を務める。研究室ではエネルギーの有効利用と環境配慮型社会への貢献を目的に、熱サイクル評価とエネルギーシステムの設計に取り組む。

3月11日 14時46分

青葉山にある大学の3階会議室で打ち合わせをしていた。揺れ始めて2分程が経過しても、揺れている。3分が過ぎた頃には揺れが次第に大きくなったので、机の下に潜って揺れがおさまるのを待った。しかし揺れはおさまるところが増す一方で、やがて停電になった。吊るしてあった観葉植物は大きく揺れて、土が地面に落ちる。建物の継ぎ目から土埃が出ていて、まるで炭鉱の中にいる

ようだった。昭和39年頃に建てられた青葉山で一番古い建物は、正直潰れてしまうのではないかと恐怖を覚えた。とにかく怖かった。

5-6分後、揺れがようやく落ち着いたので避難場所であるテニスコートへ避難することになった。100-150名程の学生や大学関係者が避難していた。屋外での点呼と待機が続き、ようやく1時間半後に、研究室がある工学部総合研究棟へ歩いて戻ることになった。制震構造が入っている最新構造の建物だったので、外観では大きな被害はな

かった。停電でエレベーターが止まっていたので、非常階段を上り8階の研究室へ戻った。ところがドアが開かない。なんとかこじ開けると、ドアの向こうは本棚や備品が倒れて通路を塞ぎ、本やファイルが散乱していた。机に置いたままだった携帯電話や財布が落下し書類の下敷きになっていて、夕闇の中で探し出すのに苦労した。

ライフラインの復旧まで

もう日が落ちかけた午後5時半頃、中心部に向かうための道は大渋滞が起きていた。車のテールランプが長く連なっている。主要道路を迂回して自宅に向けて車を走らせた。信号はもちろんすべて消えていた。ところどころ道路に段差もできていたが、何とか2時間半かけて午後8時過ぎに自宅に戻ることができた。車中でラジオをかけて初めて、東北全体で大規模な停電が起こっていることを知った。絶望感とあきらめの念に襲われ、自分ひとりの力ではどうにもならないという思いがした。

家には暗闇の中、妻と娘2人がいた。この夜から布団3つに4人が寝る日々も2週間ほど続くことになる。妻がお風呂や入れられるものに水を溜めていてくれた。その夜は家族4人、1階の和室で一緒になって不安な夜を過ごした。朝6時頃に夜が明けはじめ、朝日が出始めるのがとても嬉しく思えた。朝食は、常にごはんを冷凍していたので、卵おじやにして食べた。いつか使うだろうと用意してあった石油ストーブを出して、タンクに備蓄していた石油を給油して暖をとった。朝食後に外へ出ると、隣家のエアコンの室外機が動いているのが見えた。急いで家に戻って慎重にブレーカーをあげてみると、電気が復旧していた。3日後に電話、テレビ、インターネットが、5日後に水道が復旧した。他の地域に比べるとライフラインの復旧は早かった。

震災時は春休み中であつたが、20,000人を超える学生に対して、大学職員、教授、助教授が手分けし学生全員に連絡をとり、安否確認をするとともに急いで仙台を離れて遠方の実家に避難するよう指示した。幸いに、学生全員の無事を確認することができた。学生のケアを最低限できたことは、大学としては大変な手順であつたがとてもよかったと思う。

週明けに臨時の教員会議が行われるので、泉パークタウンから青葉山まで15kmほどの道を自転車で通った。でも気分は嬉しかった。頑張るしかないとの思いが強かった。職場に向かう途中、ガソリンスタンドの水道から水が出ているのを見つけた。思わず水を求める人々の列に並んだ。シャンプーもなかったが頭を洗いたかったので、戦時中



はこうだったのだろうと思いながら、嬉しくて無我夢中で頭を洗った。2回目の会議では、片道通常1時間のところを3時間かけてバスを乗り継いで通った。往復6時間かけては仕事にならないので、3回目の会議招集では、自家用車に残ったガソリンを使って高速道路経由で通勤することにした。途中、病院帰りの高齢者を同乗させたこともあった。

学生の避難と職場の復旧スケジュールを確認した後で、食料や灯油のライフラインが未復旧の自宅を離れて横浜の実家へ身を寄せることにした。妻と娘は東京の実家へと家族別々に避難した。移動には高速バスを利用したが、インターネットでもなかなか予約することができなかった。東北を脱出できることで、一時的にとっても救われた気持ちになった。早朝5時に新宿へたどり着いてショックだったのが、辺り周辺が計画停電の影響で真っ暗だったことだ。実家に向かうために乗った小田急線の内灯も真っ暗だった。当時は関東でもガソリンスタンドは渋滞、食料も手に入りにくい状況が続いていた。その後、仕事のために仙台に戻った頃には、自宅のガスも復旧していたし、ガソリンスタンドの渋滞もなくなっていた。

震災を振り返って

僕らはもっと怒るべきだと思う。あんまりにも大人しいし、優しすぎるし、東京や大阪、北海道などは普段の生活に戻っている。東北の人たちはもう大丈夫だよと自然に言わざるを得ない状況は変だと思う。こんな変な体験をしたことは、悲劇だし、悲惨なことだ。めったにできない経験もした。みんなが辛かった。今後はそれを地域づくりに活かして、これまでとは別の舵をきるチャンスであると思う。決してUターンしたり逆方向に行くべきではない。

明治から140年間、日本の地方自治体では「エネルギーをどうするか」ということを考えること

はなかった。政府主導で大きなインフラをつくり、電力、ガス、石油のネットワークはすべて経済産業省エネルギー庁が担当していて、良い意味での中央集権だった。だが、日本のどこで何が起こるかわからない時代である。エネルギーがないと人間は生きていけない。ならば、最低限生き伸びられるように、地元で「エネルギーの駅」を作ることが必要だと考える。燃料電池や充電器が学校や公民館など地域にあれば、基幹のインフラに何かが起こった時、自立運転ができる。エネルギーを備蓄しておけば、いざという時に必ず役立つだろう。

避難所はトイレがあるだけの場所が多かったが、テレビニュースが見られるエネルギー源だけでも自給できれば、避難所の状況は大きく変わるだろう。自分達の暮らしを守る、家族の命を守るために、地域エネルギーシステムの整備は今一番必要な事だと思う。

「新しい暮らし」や「新しい社会」を自分たちで生み出していかなければならない。前に戻るのではなく、別の道を見つけていかなければならない。3年~10年かけてでも、外国の良いところ、東北と同じように寒い北欧の人たちがどんな豊かな生

活環境をしているのかを視察し、何かを感じてみるのもいいと思う。東北の自分たちは自然が豊かな場所に住んでいて、バイオマスをはじめ多くの大事な資源が豊富にある。今あるインフラと結びつけて、「宮城版」「東北版」モデルを作ることは難易度が高いとも思う。目の前にそれだけ高い課題が待っていることを頭の中に入れておかねばならない。



個人

「自然と共に生きる農業」のこれから

名取市

三浦 隆弘 なとり農と自然の学校

取材日 2012.2.16

セリ、ミョウガタケなど在地野菜を作る農家の7代目。朝市夕市ネットワーク、NPO介在型市民農園「プチファーム」、公益財団法人みやぎ・環境とくらし・ネットワーク（MELON）、（特活）ほっぶの森びすたーリーフードマーケットの農業就労支援などの活動に参画し、食と農のつながりづくりに取り組む。オープンファーム「なとり農と自然の学校」主宰。

3月11日 14時46分

3月11日は栗原市瀬峰にある農業試験場で、トマト栽培の研修を受けていた。栗原は震度7の揺れを記録した場所だ。平屋の1階にいたが、揺れがひどくガラスが割れた。50名程の参加者はすぐに駐車場に避難したが、立っていられずしゃがんだり、植えこみの木につかまっていた。池の水面もばちやばちと激しく揺れていた。

研修会は即座に終了、現地解散となった。

車載ラジオを聞き、ツイッターを見ると10mの津波警報が出ていた。とにかく家に帰ろうと、ラジオを聞きながら名取へ向かった。山方向を行けば良かったのだが、気が動転していて瀬峰から田



尻へ入った。田尻地区では道路や橋に段差ができていて走行しづらく、迂回しながら松島へ抜けた。松島では通りかかったホテルの付近で水がまさに溢れかけている状態だった。危険を感じ、そこから利府に向かう山道に抜けた。このあたりから道路は大渋滞を起こしていた。ブロック塀が崩れ、あるいは橋が崩れていたためだ。

ツイッターでは情報がどんどん書き込まれており、ラジオよりも有力な情報源となっていた。ただ、津波にのみ込まれてトラックの荷台の上にいるというチェーンツイートの書き込みもあった。岩切付近でいよいよ燃料が底をつきはじめ、知り合いの方に車を入れ替えさせていただいて、翌日朝に名取に着いた。この間、家族との連絡は一切とれずにいた。帰宅すると、家の中はしっちゃかめっちゃか。築200年の家の土壁が落ちていた。

ビニールハウスで暮らした 1週間、7月には母子疎開へ

農家なのでビニールハウスがある。そこにストーブや布団を持ち込み、1週間程暮らしていた。オール電化と対極にいる生活をしていたので、石油ストーブや練炭火鉢がある。これらを使って煮焚きをしていた。水は井戸や備蓄していたペットボトルもあったが、名取市は水道水がいきっていたので問題なく過ごせた。

また、ライフラインを少しずつ独立化する意識は環境団体・MELONに関わっていたため常にあった。家全部はできないが、ソーラーパネルを1つ導入していたため夜には灯りがついたし、トラクター用のバッテリーとインバーターを直結させてテレビを見ることも、携帯電話の充電もできた。そういう意味では環境活動に関わり、いろいろなお話を聞いて「ないよりはあった方がいいかなあ」と思ってたものが役に立った。

2・3日が経過しても、多賀城の方にはずっと黒煙があがっていた。下増田小学校に避難所のようなものが立ち上がっているらしいと聞き、ちょうどセリの収穫時期だったのでセリを収穫してお米と一緒に持っていった。障害者の就労支援施設に関わっているが、この施設は長町に店を持っているため野菜などを運ぶ支援も行なった。店はだんだんと通常営業に戻っていったが、精神的にはまだ通常には戻れていない。

3月15日から20日にかけて、雪や雨が降った。これに浴びない方がいいというツイートが書き込まれていたのを見て、放射能への心配に気づいた。そこからネットで放射能に関する情報を集めて勉強し、最新情報をチェックし続けた。7月には母子疎開を選択し、相方の実家に子ども達を転校させた。とりあえずわからないから距離をおく判断

をしたわけだが、父親としてはそれで随分精神的に安定した。

下余田集落では、稲作は今年1年お休みになった。田んぼに水を入れると、その水は閑上（ゆりあげ）地区にたどり着く。閑上地区は大きな津波被害を受けた場所で、行方不明者の捜索が続いていた。稲作をすれば水がどんどん流れこみ閑上地区で水があふれ、捜索の邪魔になる。人道的措置として稲作の中止が決定された。

有機農家としての対応

「地域循環型農業」「顔が見える農業」を売りにしてきたが、堆肥の原料になる稲わらなどが放射能に汚染されていたら、堆肥の中に汚染が濃縮される可能性がある。基準値以下でも放射性物質が検出されたら、知らせずに売るわけにはいかない。5月にガイガーカウンターを購入し、畑の表面や雨どいを計測した。県南の農家さんが計測機関にサンプルを送って計ったところ、高い数値が出ていた。それをネットで確認していたので、計ってから販売することを決めた。セリは土と水、できたものを計っている。自分の中で数値を決め、これを下回ったら売ろうと考えていたが、結果的にはすべて大きく下回っていた。

ここで農家として暮らしていこうと思いつけるモチベーションは、「安心安全なものを作る私」がいて、「それを買い支える食文化を一緒に作って担おうとする皆さま」と、仙台ならではのつながりを作っていこうというものだった。「自分が食べたいと思えるものを作りたい」という思いが根っこにある。

一方で、自分自身の基準をクリアするのは非常に辛い現状が見えてきている。折り合いをつけるのではなく、それをいかに乗り越えて自分基準を満たせる食べ物を作り、作ったもので経済活動を行い、生活できるかを考えなければいけない。幸せなことに今までは小さな家族経営を続けることができたけれども、土や水の大循環の中で有機物をまわしながら小さな家族経営の有機農業に取り組む続けることは、想像しにくい状況になってきている。自然と共に生きる農業をやってきた人達が、対応を迫られている。

作る人と食べる人の関係性

作る人と食べる人が対立するのではなく、共に放射線量を計り続け、「目に見えた評価」を続ける関係が作れるかどうか今後の鍵になるだろう。これができなければ仙台で農家はできないと思っている。宮城では農産物の検査サンプル数が少なく、県産の農産物に対する消費者の信用は低下し

ている。計測を繰り返し、自分の畑でできた作物について農家自身がデータを持ち、数値を表示した上で流通・販売することは、消費者に安心して購入してもらうために必要な措置だ。これを宮城県農家全員の気持ちとして共有したい。

作付け前の今のうちにやらなければいけないことはたくさんある。田んぼが復旧して、国の支援をいただいたとしても、安心安全で宮城の食文化を担えるおいしい生産物が作れない土であれば、それは悲しいことだ。

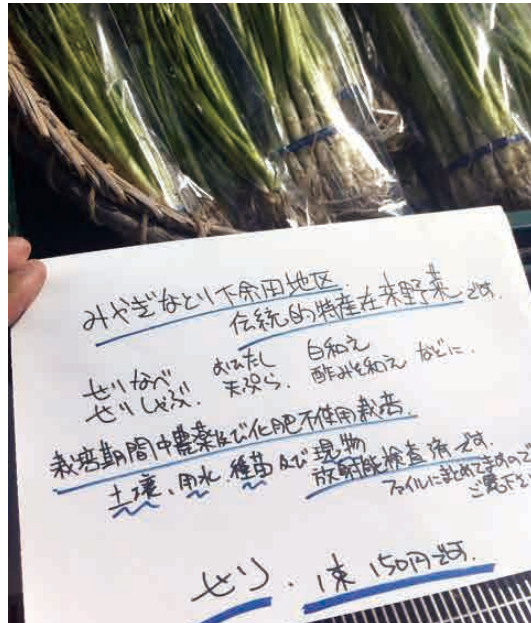
震災からこれまで想像力をたくましくさせて、ここで農家をしながら10年・20年子どもを養いながら生活し続けていくためにはどうしたらいいか、新たな情報を仕入れながらずっとシミュレーションをしている。

震災を振り返って

たくさんの方がすでに仰っているが、目をつぶって見ないでおいできたものが一気に出てきた。自分の力で、あるいは自分の連携できうる相手づくりの中で対応して、ひとつひとつ解決していかなければいけない、という覚悟がついた気がする。漫然と取り組んではいけない現実もある。現状としてはまったく対応は追いついていないし、認めたくない気持ちもある。大地と共につなげる最前

線の農家として考えると、この大地を一番最初に諦めなければいけない、そういう判断をしなければいけないのが一次産業の人間だ。

田畑への執着があるし、安心安全な食べ物を生産することで、食べる人の健康づくりと笑顔に寄り添いたい。そのためにあらゆる試行錯誤を重ね、さまざまな方々と思いを共有していきたいと思っている。



個人

仙台市

大震災を経て学んだのは、感謝の心。たくさんの方がつながって、私たちの暮らしが成り立っている。

長田 賢一 武心學館 長田道場 師範

取材日 2012.2.23

1980年代から90年代にかけて（社）全日本空道連盟 大道塾が主催する北斗旗全日本空道選手権大会を幾度も制し、現在は大道塾仙台北支部の支部長を務める。独自道場を開いてからの10年で、延べ800人の門下生を指導してきた。道場生の情操教育や道徳教育の一環として環境活動に取り組み、仙台七夕祭りのごみ分別活動に参加するなど地域環境活動に力を入れている。

3月11日 14時46分

たまたま両親が来ていて、帰ろうと外に出た時に地震が来た。とっさに母を抱え込んだが、ものすごい揺れであったのでこれは建物が倒れると思った。母はだいぶ怖がっていたので、一緒にいることができて幸いだったと思う。実家は岩沼にあり、もし別々にいたら連絡もとれず安否がわからないまま過ごすことになっただろう。

揺れがおさまると、ケガもなく一緒にいた安心感もあり、両親は「宮城県沖地震終わったね、あと

20年はこないな」と呑気なことを言いながら岩沼へと帰って行った。

道場の事務所の中は全てのものが落ちてごちゃごちゃになっていた。家の中も同様で、住めない状態だった。夕方に講演の予定が入っていたが、停電になっていたのでこれは中止だろうと判断し、1人黙々と片づけをしていた。夜になって郡山にいる妹夫婦と連絡がとれた。私としてはここがすごく揺れたと思っていたので、両親に怖い思いをさせてしまった、仙台で一番揺れたんじゃないかと話したら、「何言ってるの、大変なことになっ

ているんだよ！」と返された。何が大変なのかと聞いても「とにかくすごいんだから！」と要領を得ない。すぐに車載テレビでニュースを見て、はじめて未曾有の大震災が起きたことを知った。特に信仰はないが山伏の修行をしたいと思い、夏や秋に山形の羽黒山に1週間程籠る。普段も毎朝、道場の神棚に祝詞をあげている。道場生にはよくなってもらいたいし、この国もよくなってもらいたいし、自分もその役に立ちたいと思っている。そんな生活をしていると、今の環境や日本人の在り方がこのままでいいのかと思ってしまう。津波の映像を見た時は、くる時が来たのかと、そう思った。

ライフラインが止まった中で

ガソリンは満タンであったし、灯油の買い置きもあった。水は2日ほどは出たので容器にためておいた。電気はすぐに復旧するだろうから、何とかかなだろうと腹をくくっていた。普段から玄米と漬物と味噌汁という食生活をしており、山伏の生活ではほとんど飲まず食わずで10日間を過ごすため、食べ物に関してもさほどに大変であると感じなかった。逆に皆からもらって普段より栄養のある食生活になった。

ただ、知れば知るほど深刻な事態であることを実感した。電気やガスがない生活でも個人的には困らなかったが、現代の生活のツケがきたのかとも感じた。これまで当たり前に使っていたが、いろんな人がつながって暮らしていることに改めて思い至った。

現代は「感謝」する気持ちがなくなっている。震災後2・3日目から、武道という伝統的なものに関わる身として、伝統が果たす役割を再認識してしっかりと取り組んでいかなければと思うようになった。真剣勝負の武道の世界では、感謝することや謙虚になることについて考えさせられることが多い。物事にはきちんと感謝をしたいし、謙虚に生きたい気持ちを持っている。たとえば、ご飯を食べる時に「いただきます」と言うのはもちろん、感謝をしていただくようにしている。太陽の恵みや水があり風があり、農家の方が耕して、稲が成長していった、誰かが買ってスーパーに並び自分が買い、自分で作って食べる——までを、たまには想像しながらいただく。

ありがたいと感謝することは必要だと思う。いろいろな人がつながって、生活ができています。もう一度皆で感謝する気持ちを持ってもらいたいと感じた。



震災後

友人などから物資が届いたので、知り合いに連絡を取り山元町や北上へ届けに行った。

岩沼や山元町の避難所で物資の積み入れをしていたが、沿岸部には行かなかった。雄勝町や女川に行った時は、すべてがなくなることであるんだなと唖然とした。人格も人の思いも、今までの人生も、地域の歴史も含めてすべてなくなった。すべてが終わったような錯覚に陥り、虚無感とともにため息しか出なかった。

物資を届けに行っても、被災者の顔は疲れきっていて悲惨であった。

安否確認を行い、道場は3月末から稽古を再開した。他の武道館や市民センターは稽古ができない状況だったが、休みたくはなかったので車で送迎を行い、青空道場も行った。

道場生育成のための環境教育

環境の取り組みは、子どもたちの情操教育や道徳的教育として始めた。ごみが落ちていたらダメだと思うし、拾わなくちゃと思い、捨ててはいけないと思うのは、心の問題だからだ。武道は単に勝ち負けだけではない。何のために強くなるのかと考えた時、人の役に立つことを考えてほしい。そこで、人の役に立つことを体験させようと、ゴミ拾いや七夕のごみ分別の手伝いをさせてもらった。環境のことはそこで学ばせてもらった。物を無駄にしないために七夕の竹を炭にする活動や、水源の保護活動にも参加することで、自分達の生活を守るとはどういうことなのかを学んだ。自分達の分を知り、何を大事にして守っていかなければいけないかを考える上で、環境は生活そのものなので最良の題材だ。

一方で、木を植えよう、ごみを拾おう、リサイクルしようといろいろなことに取り組んだが、これまで「感謝」という単語は出てこなかった。大震

災を経て、さまざまな繋がりに「感謝」する事こそ大事だと思うようになった。

建物をはじめ作ったものは壊れる。後世につなげられるものは気持であり、伝統や文化、日本人としての伝統的な意識を伝えることだと思う。それは命を伝えることでもある。震災後は、先祖や自然や、人と人とのつながりに感謝して生きてきた人達のおかげで、今の自分があるということを明確に自覚できた。先人達はもちろん親や先生にも感謝することは、地に足付いて物事に取り組む時に大事なことだと思う。武道は特にメンタリティーが大切であるし、前に進むということは、自分自身の深みを知ることでもある。物事に感謝するスタンスがあつてはじめて物を大事にする思いが生まれ、その心は環境を守る活動にもつながっていく。

振り返って思うこと

本来感謝すべきものに感謝しなかった、見るべきものを見てこなかった。気がつく機会はこれまでに何回もあったのに、気がつかなかった人の愚かさ目目の欲に気を取られる欲深さは常に反省しなければいけない。よっぽどの機会がなければこうしたことを振り返れない人の愚かさを自分に

感じた。油断や奢りは自身でなかなか律することはできないが、律するために真摯に取り組んできた方々が先輩にいて、命が紡がれてきたのだと感じる。武道の世界でも先輩方、先人達が教えを守ってきたから、この伝統的な文化が伝えられてきた。その恩恵にあずかっている我々が、学びとして活かしていない部分は多い。それは明らかに奢りであり油断であり横柄さであり、これらをいかに律するかを日々生活の中で反省し、日々感謝する心を持ちたいと思っている。



撮影：2011.7.15 山元町

大学

仙台市

1人ひとりの死が1万数千件あった災害。 失われたのは普通の地域の普通の人々の営み。

新妻 弘明 東北大学大学院環境研究科 教授

取材日 2012.3.12

日本地熱学会会長、国際地熱協会理事等を歴任。2002年からエネルギーの地産地消である概念「EIMY (Energy In My Yard)」を提唱し、岩手・宮城・福島・長野等で実現に向けた実践研究に取り組んでいる。震災後に発刊した著書「地産地消のエネルギー」では、実践例を交えながら自然エネルギーを地域レベルで活用していく方法を説いている。

大学

3月11日 14時46分

研究室にいた時、スピーカーから緊急地震速報が流れてきた。宮城県沖地震を経験していたが、それより長く大きな地震だと感じた。自分のデスクの下に身を隠しながら3度の大きな揺れを感じた。いつもなら揺れが落ち着く頃に長い揺れが何回か発生し、2回目、3回目の揺れで次々と大きな本棚は倒れた。振幅が1mほどあったように思う。「確率99%で起こるといわれていた宮城県沖地震は終わったな」とほっとした思いがした。その時点で津波の知らせはもちろん知らなかった。その後、避難場所となっているテニスコートへ避



難した。全員の安全確認を行い、けが人がいないことを確認した。大学本部からの解散指示が来るのを待っている時、学生がワンセグで「こんな状況になっています」と津波の状況を教えてくれた。近くにいた留学生はしゃがみ込み、恐怖心で震えていたのを覚えている。自宅は八木山にあったが、帰路にある八木山橋の倒壊の恐れがあったため、大学に車を置いて迂回しながら歩き、50分ほどかかり自宅に戻ることができた。

ライフライン

電気、ガス、水道が止まった。自分の予備知識として、以前の経験からだ水道、電気は3～4日、ガスは1ヶ月くらいで復旧するという思いが頭にあった。電気は3日目くらいに復旧したが、今回は水道が復旧するまで3週間もかかってしまった。これは宮城県を南北につなぐ広域水道の基幹ラインの破損によるものだった。このような状況にあって、我々に本当に必要なものは、水と食べ物と熱であることを実感した。自宅での飲み水は市の給水に頼り、生活用水には自宅裏の小さな沢水を利用した。熱は薪ストーブが大活躍した。薪の蓄えがあったので、暖房のほか料理や湯沸しにも使うことができた。停電の暗闇の中で薪ストーブの炎に大いに心を癒された。自分で収集したエネルギーを自分で使えるということは、何物にも代えがたいものがあつた。常日頃、自分で自給している強みがでたと思う。

大地震の後はお金が全く役に立たない世界だった。沢の水を運んでいる時、ふと、「昔はこのようなことはごく当たり前だったのだ」と思った。大変だけれども、これはこれでやりがいも出てくる。蛇口をひねるだけで水が出てくる世界はなんと便利なのだろう。だがそれは、食べることも嘔むことも不要な点滴を受けているようなものではないかと思った。我々は、点滴が止まれば生きていけないような社会に住んでいるのではないだろうか。

被災地へ支援物資を

情報収集を兼ね、東北大学の学生支援組織HARUに寄せられた支援物資を被災地に届けに行った。多くの方々から頂いた支援物資と、仙台朝市商店街振興組合から提供していただいた4箱分の果物と野菜を積んで行った。

数100人規模の避難所が対象では物資に限られていること、個人規模の避難者には避難所と同等に支援がされていないことを聞き、大きな避難所ではなく、小規模な避難所へ届けた。また、役所や避難所という組織を通してではなく、被災者に直接物資を届け、顔を見て話を聞くことで、被災

地の実状や被災者の心に直接触れたいとの思いもあつた。

特にあてがあつた訳ではないが、6箇所支援物資を直接届けことができた。最初は怪訝そうな顔をされたが、東北大学と言うと少し安心し、果物を持って来たことを告げると他の物資まで喜んで受け取っていただける。こうした反応の連続だった。仙台で我々が経験したように、果物や繊維質を欲しいと思う頃であつたため、果物の提供は大変喜ばれた。一般に行き渡っているとされていた下着や衣類等も喜んで受け取ってもらえた。統計的には充足していても個人単位では過不足があり、個人に合ったものが無い実状を学んだ。同時に全国から送られてくる膨大な量の支援物資を、個人レベルまでおろすことの難しさを感じた。送られてきた支援物資の箱1つひとつを見ると、それぞれに心がこもっている。このお志しを直接被災者に伝えることができない現状に複雑な気持ちでいたが、今回、直接被災者に手渡し、別な形で支援者の心をお伝えできたことは幸せに思う。一番得な役をやらせていただいたことになり恐縮するとともに、関わってくださった多くの方に感謝したい。現地では、津波の直前に金華山と牡鹿半島が陸続きになり、それから海が盛り上がりかなりの時間そのまま動かなかったという貴重な証言を得ることができた。現地の実状を知るとともに、情報収集に関しても大いに勉強になった。

震災の振りかえり

この度の震災では、普段マスコミや学界で注目されることがない、普通の地域の普通の人々の普通の営みが失われた。そして、その時起こった社会現象から、我々は社会の大多数を占めるこの普通の地域の普通の人々の普通の営みの大切さ、尊さを思い知らされると同時に、世間で耳目を集める事象だけで物事を考えてきたことを深く反省させられた。また、世の中は統計量だけで物事を考えてはいけないことを思い知った。

震災で1万数千の死者が出たのではなく、1人ひとりの死が1万数千件あつたのであり、その1人ひとりの死にそれぞれの思いと悲しみがあつたことを忘れてはならない。また、被災地の状況や人々の心は場所によってそれぞれであり、支援や復興は決してそれらをひとくくりにして考えてはいけない。被災者の避難先の確保にしても、「全体として数が足りていればよい」との認識が全く通用しなかったことも、このことを表している。それぞれの地域のそれぞれの生活には、それぞれの事情と思いがあり、その事情と思いはそれぞれの地域の歴史と風土に根ざしている。このような人々の営みは、植物と同じように、移植すれば済む話で

はない。

単に被災地の復興や社会体制・防災体制の変革、我が国や社会の再興を促すだけではなく、エネルギー多消費型文明、効率優先社会、そして巨大な人口システムに相互依存した文明に対して大きな警鐘を鳴らしたものと考えべきだ。

震災を機に、持続可能な環境共生型の文明社会に転換するのか、あるいはこれまでの文明の延長をばく進するのか、重大な岐路にあると思う。

未曾有の被害をもたらした災害が、我々に何を教えるべきとしているのかを、立場を超えて真摯に考えるべきであり、この時代の節目にあつて、我々が震災に何を学び、どうアクションを起こしたかは、これからの1,000年の行方を決めることになるだろう。1人ひとりに何ができるかを考えた時、自分で学び続ける以外に道はない。自分にできることは少ないが、地域を見つめて自分に何ができ

るのかを考え、地域の1人ひとりがどう動いていくかが重要だ。



撮影：2011.8.5 桂島

個人

停電状態の中唯一生き残ったメディアとしての責任感。

仙台市

板橋 恵子 ラジオパーソナリティ、企画・制作プロデューサー

取材日 2012.3.30

Datefm（エフエム仙台）で長年にわたり番組の制作に携わる。2004年から想定宮城県沖地震への備えとして防災啓発番組を制作。2008年には身近な環境キャンペーンの必要性を感じ、緑豊かな宮城の自然を守る「ForeverGreen」キャンペーンを展開。2012年からフリーとなり番組制作やイベントの企画制作を手掛ける。仙台市復興検討委員会委員として復興計画策定に関わった。

3月11日14時46分

いつもよりも遅い昼食から戻り、歯を磨いて3階の化粧室を出たところで、突き上げるような激しい揺れが起きた。廊下の壁に両手をついて、立ったまま必死で揺れに耐えた。「ああ、ついに、想定宮城県沖地震が起きた…！」と思った。まさに、宮城県沖地震の再来に備えて、7年前に立ち上げた防災啓発番組の中で、「地震の揺れは1分程度で収まります。落ち着いて行動しましょう。」と、再三呼び掛けてきた。1分耐えれば…。しかし、激しい揺れは、1分では収まらなかった。一瞬の間をおいて、また揺れ始めた。そして、さらに1分…。のちに判明するが、3つのプレートが次々と割れたために、3分以上にわたって激震が続いた。以前外国人留学生にインタビューした際、生まれて初めて地震を体験したときの状況を、「大きな怪物が、自分の住んでいるアパートを持ち上げて、揺らしている」ように感じたと話していたことが頭をかすめた。まさに、巨大な力で、ビル



をまるごと、完膚なきまで揺らされ続けている…、「この世の終わり」を意識した。

揺れがおさまった後、がくがくする足で、壁に両手をつきながら、一段一段確かめるように階段を降りて、2階のニュース室に向かう。定禅寺通りのサテライトスタジオからの生放送は、停電で一

時停波、すぐに自家発電に切り替わったものの、緊急地震速報が立て続けに3回も発信されたことでシステム障害を起こし、およそ10分にわたって無音状態が続いていた。15時少し前、放送が再開できるタイミングにニュース室にたどりつき、そのまま、1も2もなくスタジオに駆け込んだ。地震後の第一声を発する。それが、その後、1か月以上にわたって続く24時間体制の震災特番のスタートだった。私自身は、3日間会社に泊りこんで、強い余震が続く中で、何人かのアナウンサーと代わる代わる生放送を続けた。「災害時こそラジオ」、停電状態の中で唯一生き残ったメディアとしての責任感が支えとなった。

今思えば、地震発生がウィークデイの昼間だったことが幸いだった。放送に携われるスタッフがたくさんいたことで、すぐさま特番体制を組むことができた。発災がもし深夜・早朝、休日だったらこうはいかなかった。現場の最も大きな混乱は、停電で、電話もパソコンも使えず、どこからも情報ソースを得られなかったことだ。当初は、地震の震度情報に加えて、自分自身の防災啓発番組の制作に携わっていたことで身につけていた知識を総動員して、「余震が続いています。頭を保護して、身の安全をはかって下さい」「ガラスや看板が落下する危険があります。ビルから離れてください!」「自動販売機は転倒の恐れがありますから、離れてください」「車を運転中の方は、信号機が止まっているので、ゆっくり路肩に止めて車から降りてください」等、注意喚起を伝え続けた。何よりも、「緊迫感をもって、しかし落ち着いて」伝えることを肝に銘じていた。やがて、大津波警報が発令され、「予想される津波の高さ、6m、10m…」と信じられない高さの津波情報を伝えることになる。その後、一局だけ見られる状況になったNHKのテレビからの情報をリライトして発信した。にわかには信じられない津波来襲の映像、「仙台市若林区で2-300人の遺体発見」のテロップ…など、想像を絶する被害の状況から、少しずつ震災の全体像が見え始めてきた。雪が降り出した仙台市内に何人かのスタッフが取材に出て、街中の様子を見て歩き、情報をかき集めるようにして放送していった。Eメールが使えなかったためGメールでリスナーからのメールを受け付け始めると、「今あの地域はどうなっていますか?」「家族と連絡が取れない」「〇〇さん、無事ですか? 私は無事です」などの切実な安否確認情報が次々に送られてきた。固定電話も携帯電話も使えない状態の中で、ラジオが唯一の連絡手段となり、あわせて6,000通を超えるメールが寄せられた。後になって、「ラジオからの声に、どんなに安心し、励まされたことか」という声をたくさんいただいた。深夜にも強い余震が続いたが、不安な中でい



撮影：2011.4.5 気仙沼市

つも聴いている声が聞こえてくることに安心感を持って下さったようだ。「災害時、生き残るメディアはラジオしかない」と我々はずっと言ってきた。今回ははからずも、それを証明することになった。

自宅に戻って

数日後、1時間余り歩いて帰宅。23階建マンションの14階に住んでいる。当然エレベーターは使えず非常階段を登ることとなったが、壁が崩れ落ち、階段が壁から離れているところもあった。フロアのカーペットにも、剥がれた壁やコンクリート片などが散乱していた。おそろおそろカギを開けると、あまりに悲惨な状態に言葉を失い、呆然と立ちすくんだ。玄関からリビングに通じる廊下に置いていた何千枚ものCDやLPがカラーボックスごとすべて崩れ、リビングにたどり着くまでに2時間かかった。食器棚やサイドボードは固定していたものの、扉が全部開いて大事な食器ほど粉々に壊れていた。壁にクラックがはいり、まさに足の踏み場もない状態だった。電気も水もガスも、すべて止まった中で、かろうじて眠るスペースを確保して、布団にくるまった。悪いことに、3日間の必死のがんばりからか、熱が出て数日寝込むことに。余震も続く中で生きた心地がしなかった。

津波で家族を亡くされたり、家も仕事も失うなど、大きな被害を受けられた方々とは比べることができない被災状況に、どこか申し訳なさを感じていた。自分自身は、早い段階から気持ちが落ち着き、平常に戻ったつもりでいたが、震災から1年が過ぎて、ようやく震災直後の番組の同録を聴く気持ちになれた。また、雪の中、並んで食料を手に入れた、路上で卵を買ったなあ…など、震災後の日々を思い返せるようになった。自分は大丈夫と思っていたが、抑え込んでいた気持ちに気づいた。

エフエム仙台の対応

当初は余震情報を主に放送していたが、だんだんと生活情報にシフトしていった。電気の復旧は比較的早かったがガスは遅く、3月23日ごろから、徐々に都市ガスが復旧し始めると、明日はどの地区で開栓作業が行われるかの情報をリスナーは本当に心待ちにしていた。全国津々浦々から応援にかけつけてくれた「ガスマン」たち。「うちには大阪の人がきてくれました。本当に神様のように思えました。」といったメールがリスナーから届いた。また、あの時の安否確認放送の方は無事でしたという報告やお礼のメールも届いた。

音楽を流すことに対しては、最初とまどいがあった。津波で犠牲になられた方が多かったので、海にまつわる曲はやめよう、あまり明るい曲調の曲はさけよう、歌詞の中に刺激する言葉はないか…と選曲には心を配った。ぼつりぼつりとリスナーからもリクエストが来るようになり、音楽に気持ちが癒された、音楽から力をもらえたという感想をたくさんいただいた。リクエストの中には、私たちが避けていた、サザンや桑田さんなど、海にまつわる曲が意外なほど多かった。

津波で家も船も流された漁師さんの、「1日も早く、また海に出たい」という言葉が、テレビから流れた。四方を海に囲まれた日本、たくさんの恵みを与えてくれる一方で、過去何度も手痛い被害も受けてきた。恩恵も受けるがダメージも受ける、それが「自然」だと割り切って生きてきた強さを、海辺の方ほど持っているのだと思った。

防災意識を高める 「サバ・メシ*コンテスト」

震災前、宮城県沖地震の発生確率が高かったにもかかわらず、宮城県民の防災意識は、残念ながら全国的にみても低い傾向にあった。番組の発信だけではなく、さらなる防災意識の啓発を目的に、2006年から毎年、『サバ・メシ*コンテスト』と銘打った非常食のコンテストを開催してきた。「サバ・メシ」はサバイバル・メシを略した言葉で、「非常食」では硬いが、「サバ・メシ」というネーミングのおもしろさもあって、たくさんのサバ・メシのレシピが寄せられ、反応も上々だった。サバ・メシのレシピを考える時、災害にあった時、使える食材は何か、水も少なく、使えるツールも限られる…と、身近な「食」を通じて、災害時をイメージし、備えを身につけてもらおうというのがねらいだった。

震災後、コンテストでグランプリになった方からメールをいただいた。「コンテストに参加していたおかげで、子どもたちがとても落ち着いていた」



撮影：2011.3.15 仙台市宮城野区蒲生

という。コンテストに応募するにあたって、何度も家族で話し合っ、災害時をイメージしてレシピを考え、実際に何度も作ってみた経験が、子どもたちの安心感につながったそう。また、震災後、グランプリを獲ったサバ・メシを作って、マンションの皆さんにふるまったということを伺って、コンテストを行なってきた意義が活かされ、お役に立てたことが何よりうれしかった。

反面、地震への備えについてはさまざま啓発をしてきたが、津波に関してはまったく足りなかった。あんなに沿岸から離れたところまで津波が到達するとは想定できなかったし、津波から身を守る行動や備えについて、メディアとしての意識も啓発も不十分だったと大いに反省している。今後は、「いのちを守る」防災・減災をより高いレベルで、呼びかけていきたいと思っている。

震災を振り返って

昼夜の別なく、24時間営業の店には煌々と明かりが灯り、街のあちこちに自動販売機。必要以上の「便利さ」、行き過ぎた「進化」が、地球環境にダメージを与え続けている状況に、大きな疑問を感じていた。震災が起こったとき、「天罰」という言葉が頭をよぎった。地球が怒っている…と。

震災後数日間、仙台であんなにきれいな星空が見られるとは…。ネオンやビルの明かりがない、まさに「夜」は夜らしく、闇の中で、月も星も本当にきれいだった。夜明けとともに目覚め、夜は早々に家路につく。少しのもので工夫し、今まで言葉を交わしたことの無いお隣の方と言葉を交わし、人と人のつながりのあたたかさを感じる…。余計なものが取り払われ、稀薄になっていたものを取り戻し、あの数日間、私たちは、ある意味「ユートピア」にいたのではないかと…。本当に大事なことは何かに気づかされたはずなのだが、普段の暮らしが戻るにつれて、つかの間の「ユートピア」

は消え失せ、ものの見事に、元にもどってしまった。

21世紀に入ってから、世界各地で大規模な自然災害が起きている。環境破壊も含めて地球全体の危機が迫っているのではないかと思う。今回の震災から、私たちは何を学ぶべきなのか。もう一度、自らの生き方を見直し、自然との良い共生の在り方、「進化」ではなく「深化」する人類の在り方を考える必要があると思う。

震災後に立ち上った心のケアの番組で、多くの方にお話を伺うことができた。日野原重明さん、玄侑宗久さん、柳田邦男さん…。いずれも震災がなかったら出会えなかった方たちだ。震災を機に、本当に多くの出会いがあった。東北に、ボランティアという形で全国からたくさんの人たちが来てくれたし、世界中から多くの支援があった。大変な震災だったが、その裏側にあるたくさんの出会いは恩恵でもあると感じている。私たちは、近年誰も体験したことがない未曾有の災害を共通体験し

たのだ。その「負」を、プラスに転じられるよう、気持ちを切り替えて前向きに生きてほしいし、自分自身もそうして生きていきたいと思っている。



撮影：2011.4.7 川を埋め尽くした瓦礫



撮影：2011.4.7 石巻市門脇地区



撮影：2011.4.7 津波で壊れた橋



撮影：2011.4.26 名取市役所の連絡掲示板



撮影：2011.4.5 避難所となった体育館

NPO

相馬市

松川浦ガイドブックを持って避難所訪問、干潟に残ったかすかな生き物の気配

新妻 香織 NPO 法人フー太郎の森基金 理事長

取材日 2011.5.13

98年の創設以来、フー太郎の森基金はアフリカのエチオピアで緑化と水資源開発に取り組んでいる。震災後は不定期で新地町の避難所や仮設に出向き、炊き出しやヘアカットなどを行った。相馬市の仮設入居に合わせ、市民に家庭用品や家具・電化製品の提供を呼びかけ、入居者に使っていただく会を開催するなど、支援活動に奔走した。

3月11日 14時46分

当日、フー太郎の森基金事務所にいた。宮城県沖地震も経験していたが、当時を上回る長い揺れを感じた。自宅兼事務所は岩盤の上にあるため、1階では皿が1枚割れる程度だった。しかし大津波警報が出たので、海岸近くに住んでいる両親を夫に迎えに行ってもらった。両親を連れて来た後、夫は飼い犬を連れにもう一度両親宅に行っていた。考えてみたら大変危険なことだった。

海拔15mほどの家で、一息ついてテレビに映る釜石市の津波のニュースを生中継で見た。とんでもないことが起きていることが分かった。ふと、自宅から南側の松川浦を見ると、いつもの風景が一変している。水が引いて真茶色になり、底が見えているのだ。普段水位が高いはずなのに…。そして東側の海岸の方を見ると、水煙で前の家が見えなくなっていた！急いで2階に登ると、スーパーや家がメリメリ音を立てながら押し流されてくる場所だった。辺りは相馬でも2番目に住宅が密集している地区であった。2軒隣まで瓦礫が押し寄せ、状況は緊迫していた。家族を連れ、さらに高台にある公民館を目指した。

高台の旅館や火力発電所にも多くの人が避難していたようだが、この東部公民館にも200名程が避難していた。その中で、デイケアサービスの方々も全身ずぶ濡れで震えていた。バスが津波にのまれ、何百mも流されたという。4人の老人のうち3人は、救出された後寒さで亡くなっていた。近くの保育園では園舎の前をどんどん船が流れていく異常事態に、園舎にはしごをかけて子どもを屋根に登らせ、反対側の丘に降ろして公民館まで逃げてきていた。すんでのところは無事だった自宅からストーブ、食べ物、毛布、衣類を公民館に次々と運び、部屋に灯りを灯しラジオをつけて情報を流した。

相馬市の対応は早かった。中心地に津波の被害が及ばなかったのが、当日22時くらいには迂回路を通して自衛隊と市のバスが入り、水とパンを差し入れてくれた。そして電気のある町中の避難所



へと多くの人々を移動させるためにバスでのピストン輸送が続いた。

翌日、夫が新聞記者から「原発が危ない」と聞いた。「メルトダウン」という言葉に、チェルノブイリ級の事が起きていることがわかった。まだ、ニュースで伝える前の事だった。家族を連れ、すぐに相馬を離れた。その後は福島、二本松、山形県遊佐の知り合い宅へと避難した。ライフラインが復旧することがわかったため3月22日に相馬市に戻ったが、事務局の職員にはPCを家に持って行って自宅で仕事をしてもらい、事務所を預かりながら、避難所巡りを開始した。職員が事務所に復帰したのはGW明けからだった。

支援活動

早速3月末から取りかかった支援活動は、週3回、エチオピアコーヒー、家庭料理、市民で作ったガイドブックを持って避難所を回る。ガイドブックには元気だった頃の松川の町並みが掲載されている。家を流され、すべてを失った人達には、自分の店や思い出がいっぱい詰まったとてもありがたいものになった。また、フー太郎の森基金の会員の方も被災されたので、週2回鎌倉にいる知人のビーチクリーンの若者達と共に、自宅の泥出しや片付けを行った。夫が有機農産物の卸をやっ

ている関係で、全国から生鮮野菜や食品が大量に届いたので、近所の家々、保育園、会員宅に配達した。

そして緊急支援物資が充分に行きわたると内容を生活支援物資に切り替えた。仮設住宅に入居するにあたり、細々とした日用品が必要となる。そうした、自立のために必要になる電化製品や家具、食器、調理器具などを集めた。配布会は仮設入居に合わせ、2週に1度計6回開催されるが、物資は午前中に集め、午後には被災者に配布するようにしている。鍋などの生活必需品から中古車まで、多くの市民の善意でたくさんの支援物資が集まってくる。

振り返って

被災した人としなかった人で温度差があると感じることもあるが、日本は今回の大震災で多くを学んだと思う。今回の大震災は日本の「リセット」だと思っている。私たちは新たな価値観を持って生きていかなければならない。無駄に電気を使う生き方ではなく、自然にマッチした生き方とはどういうものなのかを考え直す時期にきていると思う。震災で神社や古くからの墓地が高い所にある理由がわかった。これらはすべてが残った。自然の脅威の前では人間はいかに弱々しい生きものだ。自然に抵抗しない、「沈下橋」のような構造物、生き方が大切だと思うようになった。

東北で最も広大で生物多様性の高かった松川浦の干潟は、生物の気配すらない状態になってしまった。そんな状況の中、嬉しいことにかすかに生き残った生物を確認することができた。会員の方の家の片付けをしている時、掘りごたつの中から「ヤマトオサガニ」2匹が生きたまま出てきた。震災から38日目の出来事だった。生き物たちがどんな形で戻ってくるのか、長い時間をかけても記録していきたい。遅く生き残ったものたちが、子孫繁栄して新たな生態系をつくっていくことを期待して見続けていきたいと思っている。



撮影：2011.5.13 松川浦



撮影：2011.5.13 電線のない真新しい電柱



撮影：2011.5.13 津波の威力を物語る車

施設

10m の津波の被害を受けた相馬海浜自然の家

相馬市

鈴木 修二 相馬海浜自然の家 次長

取材日 2011.5.13

幼児と親と一緒に、砂浜等の自然の中で楽しく遊び、自然に親しむ環境教育を実践してきた。風光明媚な松川浦でのカヌー遊びを通して、美しい自然の保全の大切さを学ぶなど、小中学校等を受け入れ一般的な野外活動の他に自然観察や生態系・多様性に関する自然体験プログラムに取り組んできた。震災で建物が津波被害を受け、施設は閉鎖中。

3月11日 14時46分

当時は、相馬海浜自然の家の事務室にいた。職員7名が所内におり、自然の家に訪れていたお客様は、昼食を終えてバスで帰られた後だった。最近地震が多く、いつもの揺れなのかと思った。しかし、いつもの揺れとは明らかに違って規模が大きく、時間は長かった。職員は中に残る者、外に出る者とに分かれた。立っているのも困難な状況で、しゃがんで揺れがおさまるのを待った。その間に、地面に地割れができるのが見えた。

地震がおさまリ、中に入ると停電が起きていた。市の防災無線で3mの津波がくるという情報が入った。その後、防災無線が伝える津波予想は10mに変わった。もうお客様が帰った後だったので逃げるしかない判断した。職員全員が自家用車で、磯部地区で唯一の高台にある磯部小学校を目指した。3時過ぎに小学校へ到着し、津波の状況が確認できたのは3時半くらいだった。高台から少し下りた所で見えたのは、黒い塊のようなものが磯部地区を押し流している光景だった。地元住民の津波に対する意識は普段から高かったが、想定をはるかに超えるものだった。

磯部小学校は孤立状態になり、そこで一夜を過ごすことになった。11日深夜、市の職員が歩いて飲料水やおにぎりを運んできてくれた。

翌日昼前に水が引き、市が道路の瓦礫を撤去してくれたため避難所を出て福島市内にある自宅に戻ることができた。当時、電気は大丈夫だったが水の復旧には時間がかかった。スーパーも開けている店は少なかったが、なんとか食べることはできる状況だった。

振り返って

3月中は避難所の生活支援や利用予定であったお客様への連絡などに忙しかった。自然の家は、建物の一部は残ったが内部は全てが流された。現在も関係者以外は立ち入る事ができない状態である。今後の運営に関しては全く見通しが立っていない。



宮城県沖地震が近い将来起きる事は知っていたが、震災当日は津波を見て「福島原発は大丈夫だろうか」と思った。1,000年前にあった大津波に匹敵するといわれる災害を経験して思うことは、「人は、過去の出来事に対して常に謙虚に向き合っていかなければいけない」ということ。

相馬海浜自然の家の基本方針である「人と人とのつながりを大事にする」空気が、今回の大震災後に顕在化しているので、この空気が一過性のものに終わらないよう、行政、民間含めて大きな運動になってほしいと感じている。

自然の家は社会教育施設とされているものの、従来、社会教育そのものは曖昧でよくわからないと言われてきている。社会教育の根本は、人と人とのつながりこそが生きる力の源であり、人はその中でしか生きられないというところにあるのではないか。

今回の大きな被害を糧にして、社会教育を見つめ直してほしい。

NPO

福島市

支援の中継役としてマッチングとコーディネートを行う。

佐藤 和子 NPO 法人 ふくしま NPO ネットワークセンター 理事長

取材日 2011.5.13

震災後、被災者と支援者のマッチングやコーディネートを行う「ボランティア・マッチング・プロジェクト」を立ち上げた。4月27日には「ふくしまNPO市民活動団体連携復興プロジェクト会議」を設立、緊急対応を行う「被災者支援部会」、中長期対応の「復興計画部会」を設置し、被災者への支援と福島の復興に取り組んでいる。

3月11日 14時46分

福島市内にある自宅とオフィスのあるビルで、大きく長い揺れを感じた。最初はいつもとと同じ揺れぐらいにしか感じなかったが、次第に揺れが大きくなりただならぬ状況を感じるようになった。オフィスは9階にあり、書棚の中の本は飛び出し大きな机も大きく揺れ、足の踏み場がない状況に陥った。机にしがみついて揺れがおさまるのを待った。隣近所から、女性の「キャー」という悲鳴が聞こえた。

まず、10階自宅の飼い犬を救出した。余震が長い間続いたが、揺れが落ち着き始めた時に階段で1階まで駆け降りました。1階に避難した多くの人々と大きく揺れるビルを眺めながら、不安なまま時間は過ぎていった。

ライフライン

揺れているうちに電気が切れたが、次の日の朝7時半頃に復旧した。水道は1週間後の18日に復旧、幸いな事に都市ガスは地震によって寸断することはなかった。

食糧を求めて市内のコンビニに並んでいる人々の姿は見られたが、ある程度の備蓄をしていた人々も多く、この大震災で大いに役に立った。自宅には数ヶ月困らない程の食糧があったので、近所の人々に配布した。

事務所は1週間ほど断水したが、事務所や自宅にはそれぞれ、いざという時のために飲料水をケースで用意していた。給水車も出動していたが、福島市内は井戸がいたる所であり、井戸水を近所に配ったり、井戸水を使って営業を始める飲食店もあった。道路沿いの井戸がある家庭は、「ご自由にお使い下さい」と声がけをし、市民同士が助け合う光景も見られた。

普段賑やかな街中が、震災当時はとても静かに感じた。ガソリンが手に入りにくく、多くの人々が家で自主待機、自主避難していたためだ。飼い犬や飼い猫の餌は備蓄がなく、百貨店に並ん



だ。福島市内には停電しない箇所もあったので、商品がなくなるまで営業を続けたコンビニも多かった。

福島にとって福島原子力発電所の問題が終息に向かわない限り、震災から2カ月過ぎた現在でも、普通の暮らしに戻ったとはいえない状況が続いている。

震災を受けて

福島市には浜通りからの避難者を中心に3,000人以上の人々が避難している。

情報収集をし、ふくしまNPOネットワークセンターのホームページ上でツイッターを利用して次々と情報提供を続けた。全国からの物資やボランティア派遣等の支援を受け、大きな被害を受けた浜通り地区へのつなぎ役も務めている。また、NPO法人ふくしま飛行協会が管理する「ふくしまスカイパーク」では、震災翌日から災害支援物資中継、原発対応人員輸送、航空写真に対応するためのヘリコプターの離着陸が行われた他、原発上空撮影無人ラジコン飛行機の操作ミッションを受け入れるなど、空の玄関口として協力活動を行っている。

福島は原発を抱えているので、被災地の職を失って避難している人の就職支援を行いたいと思っ

ている。原発に対して、福島県としての市民レベルの意見出しを行いたい。

東日本大震災で感じたことは、行政の対応が早く、ボランティアの派遣や支援物資の供給がスムーズに行われていたことである。過去に起きた阪神大震災などの経験が今回に活かされたように感じている。



撮影：2011.5.13 かつての住宅街

NPO

郡山市

支援活動に注力した2カ月。 複雑化を増した地域の課題。

鈴木 和隆 NPO 法人うつくしま NPO ネットワーク 事務局長

取材日 2011.5.31

福島県内で活動するNPOの活動を促進するための支援活動を行い、市民自らが考え行動してゆく活力ある社会づくりを目指して設立された。震災直後は中間支援組織としてすぐさま支援活動に取り組み、自らも被災して動けないNPOに代わって支援活動を展開するために郡山、会津、いわきに基地を設置し、緊急支援・復旧支援に取り組んだ。

3月11日 14時46分

地震発生の時はいわき市の自宅にいた。家屋は無事だったが、部屋の中の書棚はすべて倒れた。自宅は高台にあったため津波の被害は免れた。電気は無事だったが断水は約1ヶ月間続き、その間は給水所へ通った。食糧は「このような緊急時に鈴木さんが活動できないのでは困る」と多くのNPOから支援をいただいた。ガソリンも不足がちで、職員が交代で給油を行うなど、みんなが助け合いながらライフラインを確保していた。

地震については、これまで経験した中で最も大きく、長いものというのが率直な感想だ。津波の被害と原子力発電所の問題で、3月11日の夜から翌日の朝にかけて、いわき市民約34万人が避難し、その後も1日か2日で3-4万人が避難した。「これは大変な事だ」と、組織として非常態勢をとり事務所も24時間体制を始めた。

震災直後の活動

福島県で活動する中間支援組織である当会は、東日本大震災の支援活動として活動のフェーズを、



- ①緊急支援
(命をつなぐ支援)
 - ②生活・企業・商店・学校支援
(生活を立て直す支援)
 - ③復旧支援
(地域の安全・安心を確立するための支援)
 - ④復興支援
(豊かな地域を創造するための支援)
- に分けた。期間も3月-4月、5月-6月に分け、3月-4月は緊急支援として救援物資の調達・配布

を行った。現場のNPOも被害を受け身動きが取れない状態だったので、私たちが直接やろうと郡山基地、会津基地、いわき基地を開設した。福島県の社会福祉協議会は福島市に福島県災害ボランティアセンターを立ち上げた。県内の600弱あるNPOとのコネクション強化のため、職員を1名常駐させNPOの対応にあたった。また余震対策として水の備蓄を行い、こちらは現在も継続している。生活・企業・商店・学校支援のためホームページになんでも相談コーナーを設け、困っている人と支援する人からの相談を受けた。

モデルケースとして大熊町の支援を行った。避難所へ食料と衣服を届け、入進学シーズンにはランドセルや学用品、保健室を作るための機材や薬品、音楽室を作るためのピアノ、子どもたちのこのころのケア、先生のサポートなどさまざまな支援を行った。

また、今後の支援活動に向けた情報収集のため、震災緊急救援、復旧・復興に関するアンケートを実施した。公益信託うつくしま基金「災害救援緊急支援コース」を設け、復旧活動を行うNPOやボランティアなど15団体に助成も行った。加えて、過去に起きた災害で「三宅島全島民避難」、「新潟県中越地震」、「ハリケーン・カトリナ」などひとつの自治体、コミュニティが全部避難した事例から、同様に全町で避難している大熊町についてのシミュレーション的な調査を行っている。

5月・6月は長期化する避難所生活の改善、社協自体が被災してしまった町村へのボランティアセンター立ち上げの支援、計画的避難区域（飯館村）への支援を行っている。生活・企業・商店・学校支援では、応急仮設住宅での生活支援はもちろんのこと、双葉郡8町村支援のために職員を派遣し、週2回の連絡会を行いながら対応にあたっている。復旧支援では、被災地域100ヶ所程度の中から、最終的に20から30ヶ所の地域について被災の記録を残そうと作業に取りかかっている。復興支援では県域を超え、さまざまな知恵を集結して復興ビジョンを作るための組織「(仮称) 東日本大震災復興支援ネットワークin福島」、の立ち上げと事務局運営を計画している。

震災後約2ヶ月を経過して

大震災があってもなくても岩手県、宮城県、福島県などの東京から遠く離れた、いわゆる「地方」は過疎、高齢化社会などのさまざまな問題を抱え

ていた。そこに大震災が発生し、都市型の災害とは異なった様相を呈している。さらに原発が複雑さを増している。

被災地の復旧・復興は、震災以前に顕在化していた問題を、これを機会に同時に解決するものではないといけない。倒れた柵を戻しても、そもそもその柵がそこにあつていいものかという事が問われていた訳で、この際、被災地を地域再生のひとつのモデルとして日本全体で考えていかなければならないことだと思う。それがない限りは見かけ上の復旧・復興で、倒れた本柵を元に戻しても、そこに入っていた本がそもそも間違っていたのかかもしれないし、そこに本柵があつてはいけなかったのかかもしれない。そうした事が問われているということを、この2ヶ月間のいろいろな活動、多くの方との対話を通して感じている。



撮影：2011.5.13 松川浦に沈む車



撮影：2011.5.13 田畑の上には倒木ばかり

NPO

いわき市

物資支援、炊き出し、雇用創出・・・ 地域の外からの支援に支えられて。

吉田 恵美子 NPO 法人ザ・ピープル 理事長

取材日 2011.8.30

ゴミ問題の解決に向け古着のリサイクルを中心に活動に取り組んできた。震災直後からマイクロバスを利用した物資の配送、炊き出し、風評被害に苦しむ農家支援など独自の支援活動に取り組む。その後、いわき市災害救援ボランティアセンターの傘下で活動に取り組み、現在は「小名浜地区復興支援ボランティアセンター」として活動を続けている。

3月11日 14時46分

当日は、毎月1回行われる定例のスタッフミーティングの日だった。いつもは2時間以上かかる会議がその日に限って1時間で終わった。主だったスタッフが帰り、一息ついていたところに誰かの携帯のアラームが鳴った。何の音かわからずいたところに大きな揺れが起き、後からあれが地震速報だったのだと知った。入居しているビルは古く、中には危険だと思い裏口から駐車場に避難した。通りすがりの中学生が泣き出すのをなだめ、ビルの屋上の水があふれる様子や、壁が崩れていくのを見ながら地震をやりすごした。大津波警報は鳴らなかった。消防自動車サイレンを鳴らしながら走って行き、「大津波警報が出た」と誰かが大声で叫んでいるのを聞いた。いわきの人間は津波に襲われた記憶が無く、津波に対する警戒心が無い。大津波警報がどの程度のものなのか全くイメージできなかった。事務所のある小名浜地区がいわき市内の沿岸部にあるにも関わらず、津波への心配よりも内陸部に位置する自宅の地震による被災や、自宅に居る家族の安否が気にかかって急ぎ帰路についた。付近の工場から避難する人々の車の渋滞に巻き込まれ、津波の到達時刻までに自宅へたどり着けなかったが、津波の直接的な被害は逃れた。スタッフの中には沿岸部を通勤路としている人もいて、会議の時間が延びていれば津波の到達時刻にそこを通過していたかもしれない。震災で活動に若干の支障はきたしたものの、幸いなことに人的な被害は無かった。しかし原発事故の影響で2つの店舗を閉めざるを得なかった。

支援の動き

家庭や家族の事が自分の中である程度収束したのが3月15日。被害の状況が次第に明らかになり、津波で被災された人達が着の身着のまま避難していると聞いて、古着を小名浜にある倉庫から社会福祉協議会の小名浜地区センターへ届けたのが



3月16日、支援活動のスタートだった。当時はガソリン不足がネックとなり、いざという時、自分たちも避難できるように燃料を考えながらの活動だった。そのような中で大阪の市民グループの「赤ちゃん引越しプロジェクト」の支援で、いわき市内でマイクロバスを調達することができた。緊急車両の登録を行い、優先的にガソリンを給油できるようにした。本来の目的であった赤ちゃんと母親の避難に関しては諸事情から頓挫したが、後々このマイクロバスが大活躍することになった。

水産加工業者から、津波で冷凍設備が壊れてしまったが冷凍食品が無駄にならないうちに活用して欲しいという申し出があった。市内の福祉施設へ電話をかけ、マイクロバスに魚を積み込んで、欲しいという施設に配り歩いた。

阪神淡路大震災の経験がある兵庫県の業者からは、避難所の床に敷くようにと震災直後にカーペットの提供があった。ところが行政機関では受付窓口も混乱しており、しばらくストックヤードに置かれたままの状況が続いた。避難所では多くの方が寒い思いをして過ごしている。マイクロバスに積み込み自分達で避難所へ配り歩くことにした。この時点で避難所では既に区割りがされていて、改めてカーペットを敷き直すことが難しいところもあり、せっかくの善意がうまく活かされなかった。

活動を通して避難所の方とお話しをするうちに、支給される物の中に本当に必要としている物が無いという声が聞こえてきた。そこで、ニーズを聞き必要な物資を届ける「御用聞き」支援を始めた。これは避難所が閉鎖されるまで続けた。

避難所での炊き出しも行なった。けれども受け取る人の顔は、一様に暗い表情だった。避難所には主婦という料理のプロがいる。そこで、炊き出しの調理のお手伝いをお願いすることにした。すると皆さんの顔が生き生きと変わっていくのがわかった。それからは、いわき産の野菜にこだわって材料を調達して届け、自分達で自炊してもらうスタイルの炊き出しを行った。ここから生まれたのが「かあさん弁当」だ。避難所のお母さんたちを雇用し、400円で日替わり弁当を販売している。おいしいと好評で、徐々に固定客も生まれてきている。また風評被害に苦しむ農家の方々に対して、野菜販売のお手伝いもした。ここまでがザ・ピープルとして独自に行ってきた支援である。

4月も半ばを過ぎると、徐々に避難所から自宅へと戻る動きが起き、支援の内容も個人宅での瓦礫の撤去や泥上げへと変化した。そうすると「NPO 法人ザ・ピープル」という名前では、被災者に自宅の中へ迎え入れてもらえるほどの信頼関係が築けておらず、安心して受け入れてもらえるようにと、いわき市の社会福祉協議が立ち上げた災害救援ボランティアセンターの傘下に入ることにした。小名浜地区災害ボランティアセンターは、NPO 法人ザ・ピープル、いわき地域活性プロジェクト MUSUBU、学生ボランティア団体 UGMの3つの団体が主体となって運営する大変珍しい形のボランティアセンターであったと思う。

主力メンバーの中に災害ボランティアセンターとしての運営ノウハウを知る人間がいない中で、手探りでスタートだった。1つひとつその場で起きた事に対応する形でノウハウを積み重ね、ボランティアセンターを閉じるまでに全国各地から3,800名のボランティアの参加があり、600近くのニーズに対応することができた。ボランティアからは他のボランティアセンターが事務的であるのに対し、ここはハートがあり暖かく居心地が良いと言ってもらえ、リピーターも多かった。この地域の将来を担う若者達を育てる場として、このボランティアセンターが機能してくれたのではないかなと思っている。

いわき市小名浜地区復興支援 ボランティアセンターの立ち上げ

避難所にいた方が仮設住宅や民間借上げ住宅、自宅へと移り、点在する形となった。加えて、原発立地地域である双葉郡の各町村からの避難者もい

わき市内にバラバラに住み始めている。そうした状況の中でも、コミュニティが再生され、被災者自身が支援されているのだという意識を持ちながら頑張る気持ちになってもらえることが重要だと考え、いわき市小名浜地区復興支援ボランティアセンターの立ち上げに至った。

これまで集会所を利用した支援サロン、被災者支援のチャリティーバザーなどを行っている。

「特定非営利活動の種類」の中に「災害救援活動」がある。ザ・ピープルでは自分たちの活動の1つとしてあげていた。はじめからこのような活動を念頭に置いていた訳ではない。古着を集めているので、火災が発生した際、市の福祉部門や警察署からの要請に従い、罹災された家族構成に合わせてすぐに着れる服をお届けする活動を行ってきた。こうした活動であれば我々でもできると考え、パンフレットにも記載していた。記載していたことが今回活動する上で非常に力になり、後ろ盾ともなった。

震災直後は周りのNPOもすべて支援に動いているのだと思っていた。こういう時に動かなければNPOとして、市民グループとして意味がないだろうと勝手に思い込んでいた。

しかし、2ヶ月くらい経過したところで、どうも周りの団体は動いていないと気づいた。我々が早く動くことができたのは、古着という生活に密着したものを扱っていて、手元に持っていたということが1つ。それから団体の構成員に被害が無かったからと考えている。

今後の計画

お弁当の製造でわずかながら雇用を生みだしたが、きちんとした雇用が生みだせるようにしていきたい。食物が耕作できないような土地でコットンなどを栽培し、それにより少しでも土壌が改善され、農家の方々にわずかながらでも収入が生まれたらと考えている。避難されている方々、特にお年寄り自分たちのコミュニティに対する思いは強い。今後は、元いた場所に戻って行うサロンも企画していきたい。仮設住宅は交通の便が悪いので、コミュニティバス運行の仕掛け作りといったお手伝いもしたい。古着だけでなく廃食用油の回収、わりばしの回収も行っているため、既存の取り組みを活用してのコミュニティバス運行など、地域の力を少しでも上向きにしていけたら良いかなと考えている最中である。

今回の震災で、市民団体の地域外との交流・連携がセーフティーネットとして十分に機能しうるものだと当事者になり強く感じた。これもきちんと検証し、まとめておきたいと思っている。

震災を振り返り

地域にいる者だけでは乗り切れなかった。地域の外からの人、物資、資金、情報などさまざまな支援のおかげで今まで立ち止まることなく進めて来れたのだと思う。今後は外部の関心が薄れて行く、支援の手が止まる、そのことにより被災地が孤立していくことが懸念される。被災地に目を向け、足を運んでくれることが重要で、これまでの支援に感謝すると同時に、今後もその支援を継続していただきたいと思う。



撮影：2011.5.13 松川浦

個人

いわき市

外で遊ぶ子どもの笑顔を見て、ママも笑顔になってほしい。

大平 ひかる オフィス・クワイ

取材日 2011.8.30

震災後、子どもを持つ母として「子どもが家に閉じこもって余震に怯えていたりするのは不自然。本来あるべき姿に子どもたちを戻したい」と思い、子どもを思い切り遊ばせるための「キッズオンパク」の取り組みを始めた。ソーシャルネットワークを通じて、自然学校や環境団体をはじめ多くの団体が活動を支援している。

3月11日 14時46分

いわき市は揺れの時間が最も長く、3分10秒（190秒）も続いた。湯本の町は崩れたりした箇所は無かった。その日はヨガのワークショップ開催に向け、先生を呼んで打ち合わせを行っていた。大きな揺れに驚きラジオをつけると、アナウンサーが「津波の高さは6m」「××地域の津波の到達時間は3時、3時は今です。」と叫んでいた。6mの津波と聞いてイメージできなかった。後からテレビを見て6mというのは2階建ての家を飲み込むほどのものであることに気づき、大変なことが起きてしまったのだと感じた。湯本だけに限れば、4月11日の地震の方が被害が大きかった。

キッズオンパクのはじまり

3月は避難していた子どもが多かった。30km圏外で避難していなくとも屋内待機していた。外で遊んでいる子はほとんどおらず、買い物に行っても子どもの姿を目にすることは無かった。母親達は情報の交流も無く、自分の家だけ子どもを避難させずにいるのか、他の家はどうかの



と不安な日々を過ごしていた。4月になり学校が始まるため避難している人達が戻ってきた。残っていた人も戻ってきた人も不安な状態だった。子ども達と一緒にどこかで遊ばせ、その姿を見たお母さん達も元氣になればと始めたのが「キッズオンパク」だ。最初はスタッフ2名で始めた。「こんな時だからこそ子どもたちを思い切り遊ばせたい」と、NPO法人「いわきの森に親しむ会」の全面協力

のもと、「湯の岳山荘」を会場として使わせてもらっている。

山荘内、屋根付きデッキ、屋外、森の中（NPO法人「いわきの森に親しむ会」の案内付き）、どこでも自由に遊んでいい。屋内、半屋外、屋外と3カ所の放射線量をガイガーカウンターで計測し黒板に数値を記入し、どのエリアで遊ばせるかについては保護者の選択に任せた。食事は山荘にある石窯でピザやおやきを焼いて食べた。お昼ご飯の持ち寄りも呼びかけ、食べる・食べないの判断もそれぞれの家庭にゆだねた。自己判断、自己責任を基本に開催している。自分の子どもも遊ばせたいし、子ども達が笑っていればいいという思いではじめたが、続けていくうちに「洗濯物はどうしてる?」「野菜は買って食べてるの?」「水はどうしてるの?」と、お母さん同士の情報交換の輪が自然とできていた。小学生を対象にと考えていたが、回を重ねていくうちに小さい子どもたちも増えてきた。参加者は、最初は30人程度だったが今では100名を超えている。ブログを見て関東の団体がボランティアで来てくれたりもした。子どもを連れてきたお母さんにお手伝いいただくことを前提に、スタッフはほとんど2名だけで運営してきた。

支援の環

キッズオンパクの子どもたちのためにと多くの支援があった。ホールアース自然学校をはじめ環境団体からの支援の他に、震災後いわきにボランティアで来てくれた団体とtwitterやFacebookを通じて親好を深め、情報交換を行い、スケジュールが合えばお手伝いに来てくれた。遠くから来た人達は常に、こちら地元の動きを追ってくれている。本当に凄い事だと思う。この間も九州からいわきのお祭りにわざわざ踊りに参加しにきてくれた。

今後について

キッズオンパクは、最初は子ども達を遊ばせる場所を作ることを目的に始め、次第にお母さん達の

交流の場にもなっている。お母さんが笑っていないと子ども達にも影響してしまう。不安を抱えるお母さん達の心を和らげるために、子どもだけではなくお母さん達を対象とした交流の場も必要だと感じている。

参加者の中からは、いわきは比較的放射線量が少ないので福島や郡山の子ども達をいわきに呼んで遊ばせてあげられないだろうかという声も出てきた。これからは子どもたちだけではなく、お父さん、お母さん、おじいちゃん、おばあちゃんも含めて、子どもたちをどうやって守っていくか、子どもたちをどう育てていこうかという方向にも目を向けなければいけない。内容の見直しも考えなければいけない時期だと思っている。



撮影：2011.6.4 外で元気に遊ぶ子どもたち



撮影：2011.6.4 お母さんたちが協力してお昼を準備

個人

震災後、スピーディーに動いたのは個人。
日ごろからの顔の見える活動が大事。

いわき市

里見 喜生 いわき湯本温泉 元禄彩雅宿古滝屋

取材日 2011.8.30

福島県の温泉・いわき湯本温泉にある温泉旅館の若旦那。百年後を視野に入れた地域づくり、人づくりを目指してきたが、地震による建物被害のため休業中。震災後は風評被害に苦しむ生産者を応援する物産展を各地で開催、沖縄伝統芸能で大震災の犠牲者を慰霊し再生を祈願する催事を企画するなど、さまざまな復興支援活動に従事している。

3月11日 14時46分

郡山へ移動中で高速道路を走行していた時に大きな揺れを感じ、近くのサービスエリアに避難した。車はほとんど停まっていなかった。車を止めラジオをつけた。「津波が10m」と聞いて、これは尋常じゃないなと感じた。やがて高速道路が閉鎖となり一般道へ降ろされた。幹線道路だけでなく細い道路も寸断されていた。携帯電話もつながらず知人を介して家族や友人に無事を伝えてもらった。一緒にいた方が近くに住んでいたためその方の所に2日ほどお世話になった。いわきの温泉の水位は10m下がった。旅館組合でも1,200年続いた温泉地がここで途絶えてしまうのではないかと困惑していた。

「オンパク」でのつながり

「オンパク」とは観光でお客様を呼ぼうという事ではなく、ひとつのまちづくりだ。町に魅力が無いと言う声が多いが、実はそうではない。絵に描いた様な風景は無いが、それぞれの町には文化や歴史や芸能があり、何よりもおもしろい人がいる。魅力が無いのではなく魅力を表現しきれてないところに要因がある。隣町できれいな建物を造ったからこちらにもというのでは意味が無く、きりが無い。そこで、「あるもの磨き」をしていくことを理念とし、この活動を通してコミュニティ形成のきっかけになればと思い描いていた。

この活動は同じ理念を持ち全国各地で行われている。震災後、そのネットワークが非常にスピーディーに動き、優しくて効率的だった。2月26日に、今後「オンパク」に取り組みたいというところが集まりいわき市小名浜で研修会を行っていた。その時は震災で小名浜が壊滅状態になるとは思っていなかった。震災から1週間後、あの時研修に参加していた水上町の人が物資を届けに来てくれた。その頃はガソリンも不足し、道路も封鎖され、宅配便もいわきエリアは原発で危険なので配送しないという状況だったが、車で駆けつけて



くれた。さらにその1週間後には水上町の町長が自ら避難所を回ってくれた。

実は、水上町ではどこかを支援したいと考えていたが、どこに問い合わせても「いまは混乱しているから待ってくれ」との返答だったそうだ。言葉には出さないが迷惑だというニュアンスであった。そこで、オンパクつながりのあるいわき市をピンポイントで支援しようと、町長自ら物資を含め1億円の予算をつけてくれた。地域を越えたつながりだった。宇部市もオンパクつながりで3月28日に支援金を送ってくれた。

支援の動き

いわきは原発の影響もあったせい、ボランティアの入りか躊躇され、物資の入りも遅かった。加工品や去年取れたお米が全然売れなくなってしまっていた。震災前の加工品や、震災前に採れたお米は安全なはずなのに、それすら売れない。大手スーパーに頼んでも取り合ってもらえないという。まさに風評被害だ。物資を送ってもらうのもありがたいのだが、いまは経済的に困っている。ここでもやはり地域のつながりが活きた。風評被害に苦しむ方を応援しようと、全国10ヶ所以上でいわきの加工品などを販売する物産展を開催した。このイベントで地元の方とのつなぎ役

として、各イベントでいわきの加工品と安全性のPRをしたが、西日本の人は震災の実感が全くなかった。実情を話したり写真を見せたり生の声や感情をストレートに話すことで、やっと大震災の現状が伝わった。

震災直後、沿岸部の小名浜と勿来（なこそ）にボランティアセンターが立ち上がったが、いわきは今まで震災に遭ったことがない。ボランティアセンターでも何をどうして良いのかわからなかった。小名浜は民間で運営が始まったが、勿来は早々に宇部市の災害復興メンバーが応援に駆けつけてくれた。延べ100人以上が来て、日替わりで立ち上げと2ヶ月間の運営を行ってくれた。宇部市も顔が見えるまちづくり仲間であり、炭坑つながりでもあるいわき市を支援しようと、1億円の予算を確保して支援を行ってくれた。

今後のステップとして、もっと今の状況を見てもらいたいと思っている。いわきに来たいという話があればガイド役として案内したい。原発ぎりぎりのところ、原発対応の最前線、さらに被災した海岸や仮設住宅、地元の農業・漁業に携わっている方々のお話を聞き、食事は地元のお寿司屋さんへ行く。そこに並んでいるネタは、本来は久ノ浜産や小名浜産など地元で獲れる魚貝であるはずのものが、宮崎産や山口産に変わっている。押しつけるのではなく、異常な状態であることを見てもらいたい。

震災を振り返って

震災後、支援物資配給でスピーディーに動いたのは大きな組織ではなく個人。町の人たちが個人レベルで「あの人が困っているからなんとかしてあげよう…」と集まった。日頃から人の顔が見える活動が大事なのだなと感じた。これができているところとできていないところの差は大きい。

例えば東京では隣の子どもの顔もわからない。そんな環境で、有事の緊急避難の時に「おじさんと一緒においで」とは言えない。コミュニティが形成されているところは、このおじさんはいつも挨拶している人だと信頼感があり、地域にとってそれはとても大切なことだと実感した。

これから

放射線が無ければ日常と変わらない。大人は経済的な部分などで直接感じられるが、子どもはわからない。昔は子どもに外で遊べと言ってきた。ところが今はそういうわけにはいかない。とは言え太陽の下で遊ばせたい。

今回の震災では大人も精神的にダメージを受けている。そのケアが必要ではないかと思う。大人の

気持ちに余裕がないと子どもにも影響してしまう。子どもを守るためには大人向けのプログラムも必要なのではないかと思う。



撮影：2011.4.14 歌手がいわき市の避難所を訪問



撮影：2011.5.13 倒壊家屋の壁にスプレーでメッセージ



撮影：2011.5.13 一本の木だけが残る

NPO

宮崎市

宮崎から恩返し。 唐桑の空家を拠点に陸前高田市、気仙沼市を支援

石田 達也 NPO 法人宮崎文化本舗 代表

取材日 2011.8.17

映画を中心とした芸術文化のまちづくりと、市民活動団体の事務局代行事業を実施。大震災後は被災地（陸前高田市・気仙沼市）を支援するため、復興支援および復興共創を行うプロジェクトチームを発足させた。九州、中国、四国の協働体制による東北大震災復興支援ボランティアや、復興共創インターシップ派遣プロジェクトなどを展開する。

3月11日 14時46分

大きな地震が起きた事は職場がある宮崎で、ニュースで知った。テレビとインターネットで次々と情報が入ると、どこまで被害が広がるのか、被災地とはまた違った恐怖感、死者・行方不明者が多数出ている状況で何かしたいが遠くにいてどうにもできない悔しさを感じた。

T-ACT 設立

宮崎は去年、口蹄疫、新燃岳噴火と度重なる災害が発生し、全国から支援を受けてきたので、「みやざき」からの恩返しをしたいと常々考えていた。震災後、東北で被災された現地の人と共に立ち上がることを最大の目的に、T-ACT(東北で行動する)を設立した。

4月に視察のため被災地へ入った。被害の規模が大きすぎて、何をすればよいのか途方に暮れた。とにかく時間はかかるだろうと思った。国、自治体、何もかもが混乱していて、「もう少しくまかないのか」ともどかしさを感じた。

現地での活動

長期にわたり1箇所支援をしたいと思います、ボランティアの減少が予想されていたGW後に被災地へ入り支援活動を開始した。長い期間の支援活動を想定していたので、唐桑町の空き住居を借り、拠点を構えた。

T-ACTには常時6名から18名のボランティアがいて、瓦礫の撤去のため陸前高田や大島へ向かう班と、町づくり班の2班にわかれて行動をした。町づくり班は地域の話し合いに参加し、地元の人々との関係性をつくり、地域に何を残せるのかを考え、最終的には町で夏祭りを開催することを目標とした。しかし、町の人々の大半が今年は祭りを中止にしようと言っていた。ところが日が経つにつれ、地域の人の気持ちにも変化が見られた。開催に向けて前向きになっていった。



最初は信頼できる人間なのかと、地元の人々の警戒心が強かった。けれども活動を続けるうちに警戒が理解や信頼へと変わっていった。地元の住民から支援要請を受けるようになり、自宅に招かれ、食事を共にしながら、いろいろな話も聞けた。漁師さんからは大震災当日の、大津波から間一髪逃れた話も聞いた。メディアでは伝えられないような、緊迫した状況が手にとるようにわかった。時間が経つにつれ、地元の人々と心が打ち解けていったのが嬉しかった。

唐桑夏祭り開催

初めて唐桑の地に足を踏み入れて3ヶ月。まさかこんな盛んに祭りができるなんて夢のような気持ちだった。夏祭りは午後1時~午後8時の花火大会までの長丁場。夜の点灯式で使用するキャンドルボール作りワークショップは材料がなくなるほどの盛況ぶりだった。宮崎の木材業者の方には無料でキャンドルを飾る献花台を提供していただいた。

夏祭りは大変盛り上がり、地元の方々が喜んでくれたのが一番嬉しかった。

地元の人が元気になるきっかけをつくるのが最終目標であつたので、ある程度は達成できたように感じている。

出船おくり

8月17日には、5カ月ぶりに漁に出る漁師さんを送り出す出港式を、総勢60名で行った。

出港の際に色鮮やかに染め上げられた大漁旗が掲げられ、家族や関係者が色とりどりの紙テープと軍艦マーチで、航海の安全と大漁を祈りながら見送った。市内のホテルの女将さんらでつくる「気仙沼つばき会」の皆さんも揃いの衣装でお見送り。長い航海に向かう船員さんたちを笑顔で激励する姿、「いってらっしゃい!」と手を振り続ける姿に、どこか胸にくるものがあった。

震災をふりかえり

気仙沼で支援活動をしているボランティアは、ほとんどがテント生活だった。我々は長期間にわたる支援活動を目的にしていたので、昼のある拠点を確保できたのは本当によかったと思う。日本は今まで、経済を優先する生き方をしてきた

が、生き方や信念を見直す機会をつくらなければ、今回犠牲になった方々にも申し訳ないと思う。次の時代をどう築いていくか、私たち日本人全員が試されていると感じている。

この大震災を、ライフスタイルを見直すきっかけにしていきたい。1人でも2人でも、住民の心の中に今回の支援活動が残ってくれたらいいと思う。



撮影：2011.8.17 大震災後5カ月ぶりの出船おくり

大学

三沢市

ボランティアを支えるためのボランティア、組み立て式風呂の支援。

相馬 孝 小川原湖自然楽校 代表

取材日 2011.10.20

小川原湖での自然体験を通しての環境教育を目的に、自然体験活動や自然体験活動指導者養成に取り組む。震災後はRQ市民災害支援センター・登米現地事務局の立ち上がりから震災ボランティアとして関わる。自らのボランティア経験から支援活動に従事するボランティアのための支援が必要と考え、活動環境を整備するなど裏方支援を行った。

3月11日 14時46分

弘前で亡くなった叔母の通夜の準備をしていた。大きく揺れたが、恐怖を感じるほどの揺れではなかった。ただ、横揺れがずっと続いたため今までの地震とは違うと感じた。

青森でもすぐに停電になり、雪も降り、暖房もつかない中、ロウソクだけで通夜を取り行った。翌日は地元に戻り、13日に電気が回復した。テレビなどを通してだんだんとあちこちの被災状況が明らかになるにつれ、これは大変な出来事が起きていると思った。

野外活動に取り組んでいる手前、ライフラインがとまっても生活に支障はなかった。

皆は電気の生活に慣れてしまっているため、ストーブもファンヒーターなどを使っている家庭が多い。12日の夜に帰って来た時、「ストーブがつか



けられなくてとても大変だった」という話を聞いた。自然楽校にはストーブが4つあるので、ランタンと一緒に貸し出した。

水も止まったがペットボトルのとりおきもあり、冷蔵庫の中には常時1週間ほどの食糧が入ってい

る。冷凍庫にもたくさん詰め込んでいたため、かえってそれが良かったようだ。電気が止まっても互いに互いを冷やしてくれた。

被災地へ入り…

13日に叔父が気仙沼に戻ったが、すぐに食糧を送ってほしいとSOSが来た。車も満足に動かせないような状態で、従兄と一緒にトラックをチャーターし、北海道から物資を取り寄せ燃料を積み込み、出かけられる体勢が整ったのは19日のことだった。

気仙沼からの帰り道、陸前高田を見ておこうと立ち寄った。そこで大きなショックを受けた。第二次世界大戦が終わった時の、東京の焼け野原のイメージだ。あれみたいに何もない状態ではなかったが、建物はすべて崩壊し、瓦礫の山があり、これは地震ではなく戦争だなと思った。

支援活動

登米に拠点を置いたRQ市民災害支援センターの立ち上がりから手伝った。最初の仕事は荷物のデリバリーだ。行政の支援から漏れているような、避難所になっている個人宅などを探して物資を届けることが当初の目的だった。行った先であそこにも避難所があると聞けばそこへ行き、何がないと聞けば午後には届けた。

自分はもちろん、手伝いに来ている人達は4日も5日も風呂に入らないで帰る生活だった。これは風呂を作らなければなりと思ひ、組み立て式の風呂を作って持って行った。

ボランティアに来る人達のスタンスもいろいろで、長く手伝ううちに違和感を感じ始めた。全然知らない人同士が1週間など長いスパンで一緒に動く。ボランティア人数が増えるにつれて、自分達の活動とはあわないと思うようになった。それで同じRQでも単独で動いていた歌津などの手伝いに行くようになった。

歌津は電気もなく、夜は太陽光発電のLED照明という暗い中で打ち合わせをしていた。たまたま一緒に現場へ行った職員が元大工だと話をしたら、RQ歌津のスタッフは目をランランと輝かせていた。その頃は支援物資が入っていた段ボールを机代わりに写真クリーニングをするような有様だった。それで机を作るなど、裏方のための支援を行った。支援活動はRQだけに特化せず、釜石地域で活動をしていた北海道のNPO「ねおす」など、別の場所にも手伝いに行った。

自分達が動くよりも、ボランティアを支えるためのボランティアの方が自分達の活動にあうと思った。組み立て式風呂の支援もその1つだ。



撮影：2011.5.28 RQ歌津朝のミーティング

防災教育

一般的に言われている「防災教育」は、ハザードマップ作りが多い。小川原湖自然楽校では毎年「防災キャンプ」を開催しているが、動きそのものは普通の体験活動となんら変わらない。環境教育は自然体験なくしてはありえないと思っており、防災教育はいつもしている自然体験の延長線にあると考えている。

震災を振り返って

現在の生活は電気にどっぷりつかってしまっている。国が原子力政策を推し進め、地域産業がなく雇用のない土地では受け入れざるをえない状況もあった。これからは、果たしてそれで本当に良かったのか、皆で考えなければいけない。原子力が本当に安全かどうかという議論は今に始まった問題ではない。世界の人達がやったことがないパンドラの箱を開けてしまったことは、どうしようもないことだ。これからは多少なりともコントロールできるようになってくるとは思うけれども、もっと先の話だろう。

ただ闇雲に危ないからダメと言うのではなく、目の前のものをどううまく使っていくかをもっと上手に考えていけばいいと思う。自然エネルギーにしても良い部分だけを見て、良い部分だけをPRすることには反対だ。例えば青森県では南部と北部では日照時間が違うから、一様に太陽光発電を導入すべきではない。オール電化の家は電気が止まった場合のことを考えられていないし、そもそもなぜそんなに電気を使わなければいけないのだろう。ストーブにしてもそう。灯油以外に薪ストーブもあるし、最近ではペレットストーブも出てきた。

さまざまな負の部分もよく見て、メリット・デメリット両方を考え、それでも必要だというものを導入していったほしい。

個人

東京都

被災した故郷。
被災地での取材の中で感じた「育てあい」。

櫻田 彩子 オーケープロダクション

取材日 2012.1.27

元仙台在住。フリーアナウンサー・レポーター・ナレーター等をこなす。現在のレギュラー番組は「ちい散歩」レポーター（テレビ朝日）。「震災復興と生態適応 グローバルセミナー東北2012」「低炭素杯2011・2012」「一村一品大作戦全国大会 2008・2009・2010」など環境イベントの司会、コーディネーターも務め、エコに高い関心を寄せる。

3月11日 14時46分

東京・千石にある近所のスーパーに買い物に出ていた。最初は地震だと気づかず、通りにある動物病院のガラスがビニールのように見えた。なぜビニールなのだろうとよく見ると、中の看護婦さんがすごい顔をしている。それでガラスが波打つほどに揺れているとわかった。大きい通りまで出たが揺れはひどくなっていて、ビルとビルが道路を挟んで反対側に揺れていた。そばにある標識につかまっていると、ビルからたくさん人が出てきて、道路の車も止まり、落ち着くまでそこにいた。

「宮城かもしれない」と思い、宮城県にいる両親、兄弟、夫の両親、知っている限りの親族にメールをした。返信はすぐに返ってきた。母からは「電気が消えてご飯が炊けないよ!」というメールが来たので、大丈夫そうだと安堵して帰宅した。エレベーターは止まっていたのでマンションの11階まで階段で登った。部屋に入ると棚からさまざまなものが落ち、食器が割れていて、これだけで大きなショックを受けた。

とりあえずテレビをつけて見たら、仙台の放送局が生中継で津波の状況を伝えていた。テレビの前で動くことができなかった。夜になり歩いて夫が帰宅するまで、トイレに行くこともできず椅子に座ったまま、ずっとニュースを見ていた。ひたすら涙が流れた。

それからは誰にも電話が繋がらず実家とは4日間連絡がとれなかったが、おばあちゃんの家黒電話だけはつながった。それで震災直後は時間を決めて皆でおばあちゃんの家集まり、そこで用件を済ませていた。

東京からの物資支援

仙台と連絡がとれるようになると徐々に、「何がない」「あれを買っておいでとけるとありがたい」という話が聞こえてきた。宅配はすべて止まっていたので、送れるようになるまでに買ってこうと、エコバッグをたくさん持って夫と買い



物に出た。ガスボンベがないと聞いていたが、これは危険物なので郵送することができない。日持ちのする食べ物や缶詰、電池を買おうと思ったが、東京でもすでに売り切れていた。電車を乗り継いで何軒もお店をまわり、少しずつ買いためていった。

宅配が送れるようになると、仙台では卸町か富谷の配送所に届けられ、あとは現地の人が取りに行くシステムで動きだした。それで実家の住所で送り、配送所まで車で取りに行ってもらうように



撮影：2011.9.27 岩手県 大槌町

して何回か荷物を送った。最初の時は荷物の受け取りに3~4時間並んだと聞いた。ライフラインの復旧に時間がかかることがわかると、お湯を沸かせるよう電熱器を買って送ったりもした。そうこうするうちに、東松島市や岩沼などいろんなところで困っている人がいることを聞いた夫の母から、荷物を送りたいから買える物があれば送ってくださいとリストが届いた。個人的に友人や番組と一緒に仕事をしている人たちにお声がけをし、衛生用品や下着、Tシャツなど細々したものを何度か送った。

仕事は軒並みキャンセルになるだろうと思っていたが、火曜日から仕事をする事になり驚いた。今思えばすぐ仕事があったのはありがたいことだったと思う。友人と安否確認のメールをやりとりする中で、「宮城は本当にひどい状態だから少しでも働いて何とか世の中まわしてくれ」というメールが来た。何人もの人から同じようなメールが届いた。そういう風に思ってもらえるのだったら、今は何もできないけれど、とりあえず目の前のことをやって、ちっちゃいちっちゃい経済でもまわすことが「できること」なのかと思った。そのメールの言葉は、涙が出るほど嬉しかった。

仙台に帰って

GWに仙台に帰れるようになった時、東松島の月浜に荷物を届けることになった。私たちは仙台出身者だけでも、そこで被災した人間でもない。届けに行く名目があっても行っていいのか、邪魔になるのではないのか、もしかして嫌な思いをさせるのではないかと迷いながら届けに行った。20軒ほどあった民宿はちょっと高台にあった1軒だけが残っただけで、浜の民宿ごと全部瓦礫になっていた。その情景を見た時には足が震えた。一方で、自分が被災したわけではなく、もっと大変な人たちがいるのに私たちがここで泣くのは卑怯だとも思った。ものすごく、無力感を感じた。親や親戚、友達は「大丈夫」としか言わない。「庭で煮炊きしているし大丈夫」と言われていたが、実際に行ってみると全然大丈夫ではなかった。ご飯も食べていない、あったかいものも食べていない、水もないけれど雪で食器を洗って工夫をしながら、皆ずっと我慢をして暮らしていたことを知った。

被災地の取材

仙台出身であることから、9月に東京の番組で取材に行くことになった。その時は角田、釜石、奥州へ、企業にお話を伺う形で取材を行なった。皆さんそれぞれに大変な状況を過ごしていた。一緒



撮影：2011.9.12 仙台市若林区蒲生

にその時間を地元で過ごせなかったことにショックを受けた。今までずっと宮城で仕事をしていて、沿岸地域でも多くの場所で取材をさせてもらっていた。イチゴ、ホッキ、カキ……あの方達はどうしているだろうか。

いくら東北の人間だといっても、あの揺れを体験していない。なんと聞いてよいのかわからなかった。ところが実際お話しをしてみると、あの時の状況を答えてくださる。たまたま街頭インタビューで、釜石のある工場の経営者ご夫婦に話を伺った。「大丈夫、元気だよ」と笑って仰る。工場も家も流されちゃったけど、私たちも従業員も元気だから——と言いながら泣いている。何も言えなくて、ただ一緒に泣いた。クルーも皆だ。各地で大変な思いをなさった方にお話しを伺えたことが、ありがたかったと思う。親戚や友人、親兄弟は、温度差があってもずれたことを聞いても許してもらえる。取材をたくさん受けて嫌な思いをしたかもしれない、話せばどうしても辛かったことを思い出してしまう。泣いているということとは、思い出したということだ。それでも見ず知



撮影：2011.4.13 宮城県 南三陸町

らずの初めて会った方が、丁寧に話してくれて、笑って「ありがとうね」と言ってくれた。極限状態を経験した人の懷の中で許してもらっている感じがして、とても救われた。

震災を振り返って

千年に一度のこんな大きな地震が来るだなんて思っていなかった。昔の絵本や口伝を読むと、「津波でんでんこ」のように後世へ伝えようと多くの伝承が残っている。警鐘を鳴らし続けていた方もいた。それでも、どこか他人事だった。

昔の人たちが教えようとしてくれたことを、私たちがこれから先伝え続けていかなければ、また同じことが起きる。今ここで何かをしなければ、歴史を途絶えさせてしまう。津波はもちろん環境のこと、温暖化のこと、すべてつながっている。何かすることをやめしまうと、歴史を止めてしまうのかと思うと、歴史は生き物のようにも思えてくる。昔は外で遊ぶ中で虫や生き物たちと遊び、動物としての人間という部分があったと思う。今は誰かが教えてくれないとわからない。私たちは伝え、継承していく責任を果たさなければいけないと思う。もう震災前には戻れない。

今回、いろいろなことに臆病になった。何々を言ったら相手を傷つけるのでは、何かをすることによって誰かを傷つけてしまうのではないか。それで何が嫌かと言ったら、相手を傷つけたことで傷つく自分が嫌だし、怖かった。でも、釜石のご夫妻のように受け入れてくれる方もいる。被災者と呼ばれる人たちにどんと胸を借りて、こちらが傷つく勇氣も時には必要なのだと思った。謙虚や感謝という言葉をおんなに実感することは、今まで生きておんなでなかった。育てあいをしてもらっているようにも感じた。ボランティアをする、あるいは話を聞く時も細心の注意は必要だが、臆病になって何もできないと何のコミュニケーションもできずに終わってしまう。これから、自分に

できること・動けることがあれば、長いタームでつきあっていこうと思っている。



宮城県栗原市 飛び出したマンホール



撮影：2011.8.6 鎮魂と祈りの思いを込めた仙台七夕飾り



撮影：2011.11.1 大空にたなびくこいのぼり



撮影：2011.8.16 鎮魂の灯火

編集後記

井上郡康

我々は今回の取材を通してさまざまな人間模様を見てきました。千年に一度という大震災において人の数だけドラマがあり、そこには困難にも立ち向かおうとする人間の姿がありました。

過去より津波被害を受けてきた東北地方の沿岸部には、先人たちが私たちに警鐘を鳴らすさまざまなものを残しています。我々は先人たちが残してくれたように、この時代を生きた人間の責務として後世に伝える努力をするべきだと考えます。

また震災後、ライフラインが全てストップした町では持続可能な社会が途切れ物資不足など当たり前のありがたさが身に染みて実感できたと思います。

電気が全て消えた町の空には満天の星が輝いていました。その時、私たちは星空を見て何を感じていたのか絶対に忘れてはならないと思います。

佐々木雅博

東日本大震災から1年が経過しました。改めて震災により亡くなられた方々に哀悼の意を表するとともに、被災された皆様に心よりお見舞いを申し上げます。

この1年をとっても長かったと感じる方、もう1年経ったのかと感じる方、人それぞれ感じ方も異なると思います。

震災直後、何かしなければ、何かできることはないかと手探りの状態でこの企画は始められました。まだまだ普通の生活が困難な状況であった時期にも関わらず、また当時の体験を語る時、その時のつらい状況を思い出してしまうような状況の中にもかかわらず、多くの方々にご協力いただくことができ、掲載件数も40件を数えようとしています。

お話を伺っている中で感じたことは、自身も被災されているのに、自分はまだ恵まれていると、自らのことはさて置き、他を思いやる心を皆さんがお持ちであることでした。その都度、人と人のつながりのすばらしさを改めて感じさせられる機会でした。

三浦 純

東日本大震災は、人類が経験した最大級の自然災害に加えて、世界最大規模の原子力発電所事故が伴った災害で早1年が過ぎました。自然の猛威の前に、私たちの世界は、たちまちコントロールを失うことを、深く思い知らされました。多くの命と築き上げてきた営みが一瞬にして奪われた現実を前に無力感が募り、生まれ育った故郷や親しんだ光景の変わり果てた姿に声も出ませんでした。

そこで、この大きな災害を後世に伝えるべく、私たちは、行政、環境に携わる方々が震災当時の様子や、その後、どのような行動をしたのかを取材してきました。震災直後、災害の傷跡が生々しく残る被災地で取材を受けていただいた多くの方々に、取材をお受けいただいた感謝の思いと、悲しみに負けず必死に前を向く姿に、胸が熱くなりました。幸い生き延びることのできた私たちには、生き延びた者として犠牲になった方々へ、恥じない生き方をしなければならないと深く考えさせられました。

3月11日を境に、日本は生まれ変わらなければならないのです。今、こうして生きていられる事・毎日仕事ができている事・毎日大切な家族と過ごせる事。今まで当たり前と思っていた事をもう一度考え直してみたいと思います。

鈴木美紀子

自宅で、公民館で、避難所で。いろいろな場所でお話を聞きました。ハンドルを握りしめて瓦礫の山の間にできた道を通り、大きく陥没した穴や飛び出したマンホールを避け、どこが道なのかわからないガタゴト道を通り。見覚えしている記憶の中の土地と何一つ重ならない目の前の光景に、喪失感ばかりが感じられました。

東北の人は我慢強いと言われましたが、実際はどうでしょう。電気もガスも水道もなく満足以食べられなくても、家があり家族がいて布団で眠れてどうして不満を言えたでしょうか。ただ生きることに精いっぱいだった日々の中で、本当に大事なものは何であるのかを思い知らされました。だから「あなた達だって大変なのだから」と言われても、誰もが首を横に振ったのです。本書はその当時のことを伺った貴重な体験談です。多くの人にじっくり読んでほしいと思います。あの時何があったのかを知り、もう一度暮らしや地域や社会のことをよく考えてもらいたいと思うのです。

手探りで始めた本活動は、「たくさんの人に伝えて」と逆に皆様に後押しされて継続することができました。「EPOさんががんばってね」と笑って見送ってくださる皆様の姿に、『笑う門には福来る』をしみじみ感じた1年でした。



【作成・発行】

発行：平成24年5月31日

東北環境パートナーシップオフィス (EPO 東北)

〒980-0014 宮城県仙台市青葉区本町2-5-1 オークビル5F

TEL. 022-290-7179 FAX. 022-290-7181

E-mail. info@epo-tohoku.jp

URL. <http://www.epo-tohoku.jp/>

リサイクル適性 (A)

この印刷物は、印刷用の紙へ
リサイクルできます。

GREEN PRINTING APP
P-01/0064
この印刷物は、環境に配慮した
素材と工場で製造されています。

RICE INK
®

この印刷物は、
輸送マイルージ低減によるCO₂削減や
地産地消に着目し、国産米ぬか油を使用した
新しい環境配慮型インキ「ライスインキ」で印刷しており、
印刷用紙へのリサイクルが可能です。